

高知県香南市発掘調査報告書 第8集

にわ が ふち
庭ヶ淵遺跡

—市道堀ノ内南北線整備工事に伴う発掘調査報告書—

2012.12

香南市教育委員会

にわ が ふち
庭ヶ淵遺跡

—市道堀ノ内南北線整備工事に伴う発掘調査報告書—

2012.12

香南市教育委員会



調査対象地 遠景 (S. 61 空撮)



完掘状態

序

香南市は高知平野の東端に位置し、太平洋から四国山地まで、東西 15 km 南北 20 km の広がりを持つ豊かな水と緑に包まれた地域です。市内を流れる物部川、香宗川、夜須川の 3 つの河川は、流域に自然の恵みをもたらし、人々の暮らしと歴史を育んでまいりました。

市内の真ん中を流れる香宗川流域には、史跡や遺跡が点在、樹齢 800 年を超える国の天然記念物「天神の大杉」や伝説に彩られた式内社「石舟神社」など、この地にかつて栄えた中世の大忍庄（おおさとのしょう）の原風景を偲ばせる素晴らしい景観が広がっています。

この香宗川の支流、山南川のほとりに庭ヶ淵遺跡があります。調査は市道建設に伴うものです。ここに、縄文時代から弥生時代へと移り変わろうとする時期の人々のムラがありました。縄文晩期の土器や弥生時代初めの土器が次々に出土、朝鮮半島の影響を受けた孔列文土器や北陸の影響を受けた土器から、縄文時代の終わりごろ東西の文化交流があったこともわかりました。

住居跡や火を使った場所も確認されるなど、小さな集落の調査ではありますが、高知では例のほとんどない縄文時代の集落の実態を解明するという意味でも、大きな一歩となりました。

本書は、香南市の歴史を広く知っていただくとともに、埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただきますことを願って刊行するものです。文化財保護の資料として広く活用されれば幸いです。

最後になりましたが、高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センターはじめ多数の方々のご協力をいただいたことに心から御礼申し上げます。

平成 24 年 12 月

高知県香南市教育委員会
教育長 安岡 多實男

例言

1. 本書は、香南市教育委員会が平成 23 年度に実施した市道堀ノ内南北線社会資本整備総合交付金工事に伴う庭ヶ淵遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 庭ヶ淵遺跡は、高知県香南市香我美町上分字庭ヶ淵 2974 番地他に所在する。
3. 試掘調査は平成 23 年 3 月 9・10 日に実施し、本発掘調査は平成 23 年 7 月 8 日～10 月 6 日にかけて実施した。
4. 調査対象面積 約 1,025 m²
試掘調査面積 約 36 m²
本発掘調査面積 約 300 m²
5. 試掘調査時(平成 22 年度)の調査体制は以下の通りである。
調査者 山本 八也 香南市教育委員会 生涯学習課 文化振興保護係 係長
6. 本発掘調査時(平成 23 年度)の調査体制は以下の通りである。
事務担当 小松 誠 香南市教育委員会 生涯学習課 文化振興保護係 係長
" 田中 一也 " " " 主任
調査担当 宮地 啓介 " " " 埋蔵文化財調査員
7. 報告書刊行時(平成 24 年度)の香南市教育委員会生涯学習課文化振興保護係の体制は以下の通りである。
課 長 岡本 光広 嘱託職員 宮地 啓介
係 長 小松 誠 臨時職員 藤方 正治
主監調査員 松村 信博 " 宮本 幸子
(主任 田中 一也) " 齋藤 美幸
" 澤田 佐世
" 松岡 知佐
8. 本書の編集・執筆は宮地が行った。
9. 本報告書中で使用する方位は真北を基準とし、公共座標は世界測地形第Ⅳ系に拠った。掲載した地形図等は、特に表示のない場合は上方が北である。
10. 発掘現場作業に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
[発掘調査] 宗圓良一 永野宏幸 窪田泰詔 十万博安 溝淵進一郎 山中 忍
松村信博 藤方正治 宮本幸子 齋藤美幸 澤田佐世(香南市文化財センター)
[重機オペレーター] 清遠勝秀
[機械・器具] (株)東部レントオール 香南営業所 (株)ジッタ 高知支店
11. 遺物整理・報告書作成等に際しては下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略)
松村信博 藤方正治 宮本幸子 齋藤美幸 澤田佐世 小松経子 水田紀子
12. 遺構の略号は、SD(溝状遺構)・SK(土坑状遺構)・SX(性格不明遺構)・P(ピット状遺構)等と表記した。
13. 出土遺物は「11-^{にわ}NW」と注記し、関連図面・写真と共に香南市文化財センター(高知県香南市香我美町山北 1553-1)において善良な管理の下に保管している。
14. 本報告書作成に際して、出原恵三氏、前田光雄氏、宮里 修氏、松本安紀彦氏、菊池直樹氏(公益財団

法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター)、米田克彦氏(高知県教育委員会文化財課)、久田正弘氏(財団法人 石川県埋蔵文化財センター)、辻 康男氏(パリノサーヴェイ株式会社)、山本 実氏(香南市教育委員会文化財保護審議委員)、松村信博氏、藤方正治氏(香南市文化財センター)、武吉眞裕氏ら諸氏に貴重な御教示・御助言を頂いた。また近藤康生氏(高知大学理学部自然環境科学科教授/進化古生態学研究室)、菊池直樹氏(同研究室)には土層断面剥ぎ取りに御協力頂いた。記して謝意を表する次第である。

本文目次

第Ⅰ章 調査の経緯	
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査対象地の概要	3
第3節 試掘調査	4
第Ⅱ章 香南市域の地理・歴史的環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の成果	
第1節 調査の方法	13
第2節 調査対象地周辺の土壌	14
第3節 I区の調査	
1. 基本層序	14
2. I区の遺構・遺物	16
3. 包含層出土遺物	33
4. 小括	48

挿図目次

第1図	香南市及び庭ヶ淵遺跡位置図	1
第2図	庭ヶ淵遺跡包蔵地及び調査対象地位置図(S=1/5,000)	2
第3図	試掘坑位置図(市道部)	4
第4図	TR2 出土遺物実測図(S=1/3)	5
第5図	庭ヶ淵遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図(S=1/45,000)	9
第6図	調査区位置及び公共座標(S=1/500)	13
第7図	I区 東壁(南側)セクション図(S=1/50)	14
第8図	I区 遺構配置図(S=1/100)	15
第9図	SK1 平面・セクション・エレベーション(垂直分布)図(S=1/20)	16
第10図	SK1 出土遺物実測図(S=1/3)	17
第11図	SK2・3 平面・セクション・エレベーション図(S=1/30) 出土遺物実測図(S=1/3)	18
第12図	SK4 平面・エレベーション図(S=1/30) 出土遺物実測図(S=1/3)	19
第13図	SX2・3 平面・エレベーション図(S=1/40)	19
第14図	I区 東壁(北側)セクション図(S=1/40) SX4 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	20
第15図	SX5・6 平面・エレベーション図/包含層セクション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	21
第16図	SX7 平面・セクション・エレベーション図(S=1/30) 出土遺物実測図1(S=4/5)	22
第17図	SX7 出土遺物実測図2(S=1/3)	23
第18図	SX8・9 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	24
第19図	SX10 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	25
第20図	SX11・12 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	25
第21図	SX13・14・15 平面・セクション・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	26
第22図	SX16・17 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	27
第23図	SX18 セクション図・他(S=1/50) 出土遺物実測図(S=1/3)	28
第24図	P8 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	29
第25図	P14 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	29
第26図	P29・30/36・37 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	30
第27図	P45 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	31
第28図	P70・71 平面・セクション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)	31
第29図	I区 包含層(北東端)遺物出土状況図(S=1/40)/火処4 出土遺物実測図(S=1/3・4/5)	34
第30図	I区 包含層(北東端)出土遺物実測図(S=1/3・2/3・4/5)	35

第31図	I区包含層(南東端)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・4/5)・	36
第32図	I区包含層(南東端)出土遺物実測図2(S=1/3)・	37
第33図	I区包含層(南東端)出土遺物実測図3(S=1/3・2/3)・	38
第34図	I区包含層(中央北側)出土遺物実測図1(S=1/2・1/3)・	39
第35図	I区包含層(中央北側)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図2(S=1/2・1/3・4/5)・	40
第36図	I区包含層(中央北側)出土遺物実測図3(S=1/3・2/3)・	41
第37図	I区包含層(中央南側)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・4/5)・	42
第38図	I区包含層(中央南側)出土遺物実測図2(S=1/3)・	43
第39図	I区包含層(西側)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/3)・	44
第40図	I区包含層(西側)出土遺物実測図2(S=1/3)・	45
第41図	I区包含層(西側)出土遺物実測図3(S=1/2・1/3・4/5)・	46
第42図	I区包含層(西側)出土遺物実測図4(S=1/2・1/3)・	47

表目次

第1表	I区ピット状遺構計測表・	32
-----	--------------	----

写真図版目次

巻頭図版1	調査対象地 遠景/完掘状態
図版1	香我美町 遠景/香我美町旧山南 遠景
図版2	調査対象地 遠景/調査前風景
図版3	調査区 遠景/完掘状態
図版4	完掘状態
図版5	I区 東壁(南側)土層断面/I区 東壁(北側)土層断面
図版6	土層断面/SK1
図版7	SK2~4
図版8	SX4~7
図版9	SX7・8
図版10	SX9・11~13
図版11	SX14~18
図版12	P70・71・8・29・30
図版13	包含層出土遺物

図版14	礫群(I区南側)
図版15	礫群(I区南端)/火処1~4/暗渠
図版16	調査日誌抄 7月6日 ~ 7月15日
図版17	調査日誌抄 7月21日 ~ 8月1日
図版18	調査日誌抄 8月2日 ~ 8月8日
図版19	調査日誌抄 8月9日 ~ 8月12日
図版20	調査日誌抄 8月17日 ~ 8月22日
図版21	調査日誌抄 8月23日 ~ 8月28日
図版22	調査日誌抄 8月29日 ~ 9月1日
図版23	調査日誌抄 9月5日 ~ 9月8日
図版24	調査日誌抄 9月9日 ~ 9月15日
図版25	調査日誌抄 9月21日 ~ 9月30日
図版26	調査日誌抄 10月3日 ~ 10月12日
図版27	Excavation staff
図版28	Excavation staff

第I章 調査の経緯

第1節 調査の経緯

本調査は高知県香南市香我美町上分の市道堀ノ内南北線整備工事事業に伴う、記録保存のための緊急発掘調査である。

本事業は(仮称)香南工業団地造成工事事業に伴う周辺整備の一環として、経営環境の利便性を図り、地域の発展に資するものとした社会基盤(市道)整備事業である。事業対象地周辺に、周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかったが、地理的・歴史的環境を鑑み、埋蔵文化財が遺存している可能性が考えられた。これに伴い、事前に事業計画区域内の埋蔵文化財の有無を確認し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、香南市教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。

調査の結果により、比較的良好な遺物包含層が遺存することが判明した。埋蔵文化財包蔵地の所在把握に伴い字名をとって「庭ヶ淵遺跡^{にわがふち}」として新設し、遺跡発見の通知(文化財保護法第97条)を進達した。当事業の施行により対象地の埋蔵文化財が影響を受けることが考えられ、関係機関と協議の結果、その範囲について同法第99条の規定に基づき、香南市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会文化財課の協力を得て、調査対象面積約1,025㎡の内約300㎡について、平成23年7月8日から10月6日にかけて遺跡の調査と記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施した。



第1図 香南市及び庭ヶ淵遺跡位置図

第2節 調査対象地の概要

庭ヶ淵遺跡の所在する香南市香我美町上分は、広義の高知平野東端山麓線(遷緩線)谷口に位置しており、斜面基部の緩傾斜面(麓屑面)や谷底低地に集落を形成する里山景観を呈している。同町大字上分・下分に該当する地域は嘗て山南と呼ばれ、地名は北部に連なる丘陵の南側に位置することに由来し、当センターの所在する山北と対を成していた。字「庭ヶ淵」周辺は狭隘な河谷地形で、昭和初期の旧地図には当該地近辺に「佐古」地名が遺されている。“サコ”とは一般に山の斜面の窪まった場所や山間の低所などを指し、谷(盆地)状地形を表す言葉とされている。

調査対象地は、香宗川河口から約5.8 km上流に位置しており、安尾谷を源とする支川山南川(流路延長2.6 km)の侵蝕作用により形成された標高30 m前後を測る河成段丘に立地している。谷底低地が段丘化した地形と考えられ、低位段丘の平坦面が耕地などに利用されており、水利は主に山南川及び溪水を取水している。県営山南地区圃場整備事業の施行により、一帯は農林業などの第一次産業が盛行し、対象地周辺の地目は水田及びビニールハウスである。同事業の実施に伴い、当遺跡から約0.7 km下流の標高19 m前後を測る山南川右岸の河成段丘に立地する拝原遺跡⁽¹⁾が発掘調査され、縄文後期の土器片や、弥生前期末・後期中葉及び古墳時代前期の集落跡を検出している。また香宗川中小河川改修関連工事の一環として山南川河川改修工事が計画され、約0.5 km下流に位置する稗地遺跡⁽²⁾の発掘調査が行われた。遺跡は同川左岸の氾濫原性の低地から低位段丘に続く標高22 m前後を測る平坦面に立地し、弥生後期から古墳時代初頭頃の集落跡を検出するなど、山南川流域に展開する水系集落遺跡と考えられている。

当該地の周辺地域は、律令期に成立したとされる「大忍郷」(『和名抄』)に属しており、地区内に条里地割を示唆する坪地名(字「井坪」)が遺されている。中世には「大忍庄」が立荘し、山南は東分・西分と記され(「大忍庄山南東分国末名」応永30(1423)年他『安芸文書』)、現在の上分・下分に該当すると考えられている。対象地近辺は堀ノ内と呼ばれ、今回施工の市道名も地名に依拠する。「堀ノ内」とは、中世において主に在地領主などが構えた(方形)居館等を表すとされ、同地では建武2(1335)年『安芸文書』所収の「末清名名脇職宛行状」他に記載がみえ、館跡は現在の字「安養寺」近傍に現地比定すると考えられる⁽³⁾。また町境を成す月見山山系から丘陵への漸移部に当たる檜尾山(標高約120 m)頂部に岩神城跡が遺存するなど、対象地周辺は山南(堀内)川流域に形成された小河谷盆地を基盤とした中世小村の景観が復原できる環境であり、当該期の遺跡が周辺に所在している可能性が考えられるが、近年の大規模な開発事業等によりその風景は失われつつある。



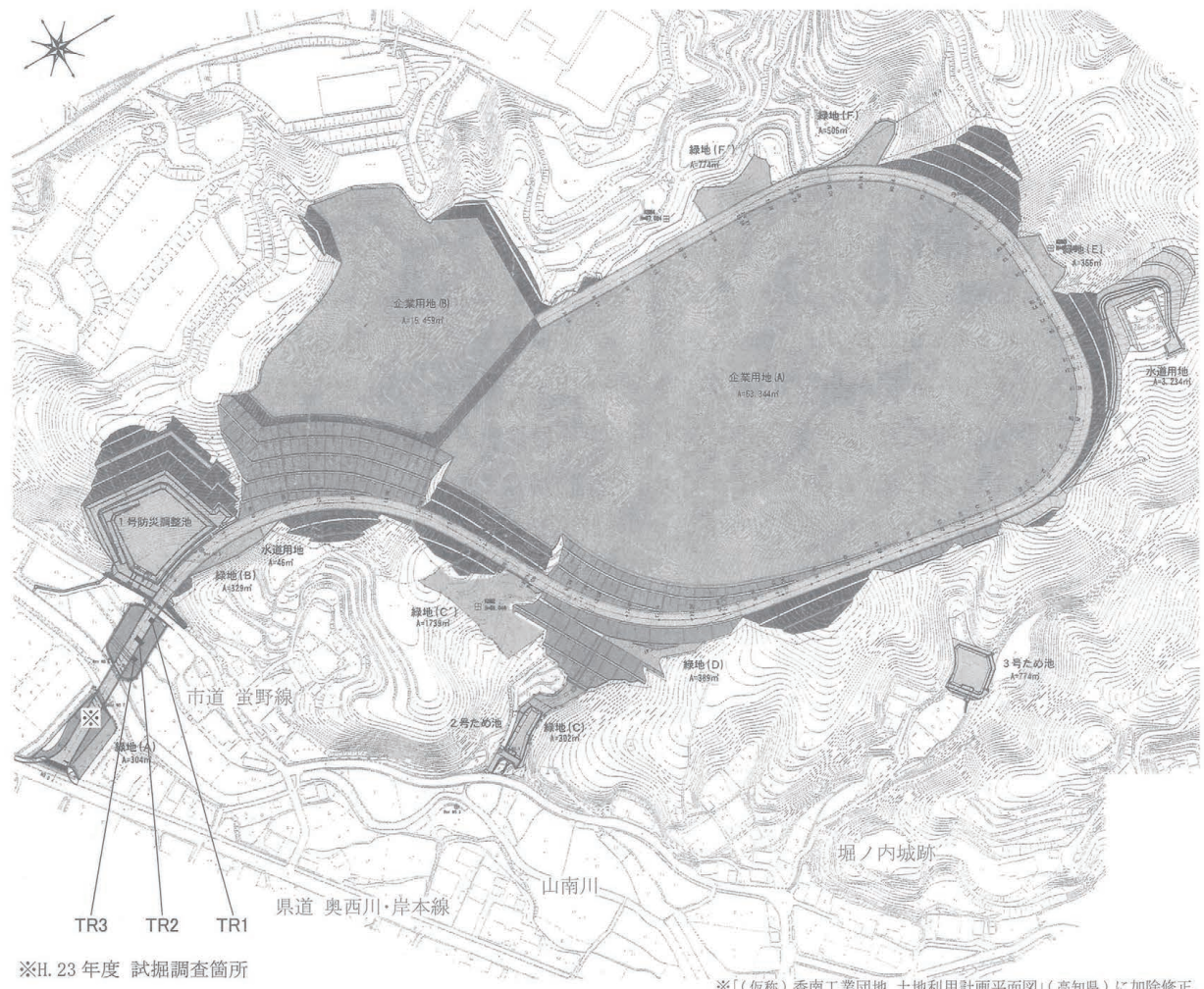
堀ノ内(安養寺附近)から稗地方面を臨む

第3節 試掘調査

香南工業団地開発計画の事業対象地(約 134,100 m²)において、遺跡分布調査による周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていなかった。これに伴い、事前に事業計画区域内の埋蔵文化財の遺存状況を把握し、埋蔵文化財の保護と事業の円滑な調整を図ることを目的として、平成 21 年度に香南市商工水産課の立会いの下、同市教育委員会(生涯学習課文化振興保護係)及び高知県教育委員会文化財課で合同踏査を実施した。検討の結果、試掘調査の必要性が認められる箇所を選定し、平成 22 年度内に着手可能な 2 地点について、香南市教育委員会が主体となって試掘調査を実施した。

試掘調査は平成 23 年 3 月 9 日から 14 日に行った。調査対象地は山南川右岸(字「庭ヶ淵」)の市道部(進入路)と、造成地内の尾根頂部(字「城林」)であり、数箇所のトレンチ(試掘坑^{テストピット})を任意に設定し、確認調査を実施した。調査面積は約 49 m²である。市道部の調査対象地は、石垣により 3 段に造成された旧耕作地で、各段にトレンチを設定し調査を行った。調査方法は、重機を用いて表土掘削を行い、手作業で土層の堆積状況や遺物・遺構の有無について確認した。土層断面(セクション)及び遺構の検出状況については、図面作成(S=1/20)・写真撮影等により調査結果を記録した。

尚、今回の調査結果は『香南市香我美町上分堀ノ内地区試掘確認調査概報』(香南市教育委員会 2011 年)で報告しているが、本報告書において若干の修正を追補している。



第3図 試掘坑位置図(市道部)

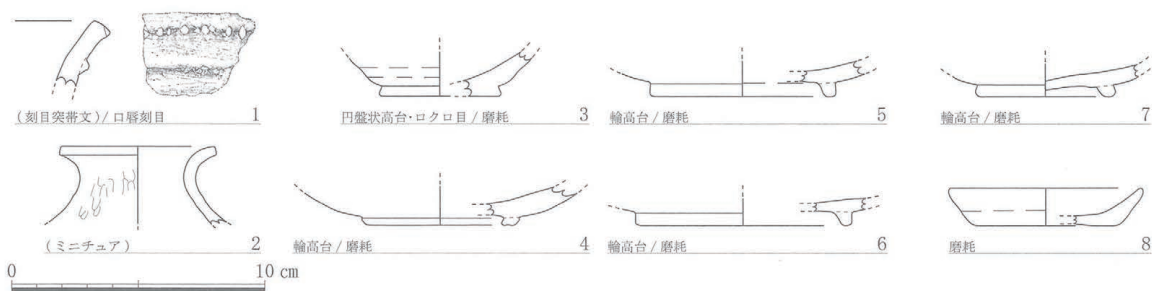
試掘トレンチの概要

TR 1

調査対象地の北側(上段)に設定した約2.9×3.0 mの試掘坑である。遺構の確認はできなかった。
遺物はⅢ層(黒色粘土質土)から摩耗した弥生土器片1点を出土している。

TR 2

調査対象地の中央附近(中段)に設定した約3.0×6.0 mの試掘坑である。ピット状遺構を検出している。
遺物はⅡ層(黒色シルト)を中心に土師質土器片55点、須恵器片2点、弥生土器片49点、縄文土器片32点を出土している。縄文土器片は条痕を含み、土師質土器片及び弥生土器片は摩耗がみられる。図示したのは縄文晩期の深鉢(1)、弥生前期の壺(2)、土師質土器の碗(3～7)、小皿(8)である。



第4図 TR2 出土遺物実測図 (S=1/3)

TR 3

調査対象地の南側(下段)に設定した約3.0×3.0 mの試掘坑である。遺構・遺物は確認できなかった。

まとめ

市道部の試掘調査の結果は、TR 2において旧耕作土下層に遺物包含層及びピット状遺構の存在を把握し、埋蔵文化財包蔵地の新設と本発掘調査に向けての基礎資料を得ることができた。TR 1に関しては南側に遺物包含層及び遺構が遺存している可能性が残るため、調査範囲に含めることとした。TR 3を設定した最下段は、農耕地の造営及び河川改修工事等の影響により、旧地形(遺構面)を存していない可能性が示された。出土遺物は「10-NW」と注記し、香南市文化財センターにおいて保管している。

造成地内の尾根頂部の試掘確認調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地である堀ノ内城跡が谷状地形(字「キコヲ谷」)を隔てて隣接しており、「城林」の遺称や段状を呈した地形などから関連性が期待されたが、調査対象地から遺構・遺物は確認できず、包蔵地として把握するには至らなかった。

尚、山南川左岸(字「鶴ヶ岡」)の市道部については、平成23年8月22日から24日に試掘確認調査を実施した。圃場整備事業の際に旧地形が改変されたと考えられ、遺構・遺物の確認はできなかった。調査結果は『香南市香我美町上分地区(字鶴ヶ岡)試掘確認調査概報』(香南市教育委員会2011年)で報告している。

【註】

- (1) 出原恵三 『拝原遺跡』 香我美町教育委員会 1993年
- (2) 松田知彦 『稗地遺跡』 (助)高知県埋蔵文化財センター 1993年
- (3) 宮地啓介 「中世城郭概要 一岩神城跡について」 高知考古学研究会 2010年



香我美町空中写真 (S.52 撮影) に加筆。
宗我神社は東北方約 400m の字「曾我」に鎮座していたが、大正 3 年 (1914) に天正神社と合祀し現在地に遷座。

庭ヶ淵遺跡周辺の地理・歴史的景観

第Ⅱ章 香南市域の地理・歴史的環境

第1節 地理的環境

庭ヶ淵遺跡は高知県香南市香我美町上分に所在し、県中央部に広がる高知平野の東端に位置している。

平成18(2006)年4月に旧香美郡の香南5町村(赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村)が合併し、面積126.5km²、人口約3万4,500人の香南市が誕生した。市域の西端には剣山山系白髪山(香美市物部町)に源を発して香南市吉川町吉原で土佐湾に注ぐ物部川(流路延長71km)が縦貫し、同香我美町別役峠を源流とする香宗川(流路延長19.5km)と共に流域の基盤を成している。これらの河川により形成された扇状地や沖積平野(河成堆積低地)には沃野が広がり、最下流域の低湿な海岸平野(汐入湿田)は圃場整備が成され、米作や施設園芸農業などの第一次産業が盛行している。平野部には標高100m未満の小起伏丘陵(残丘)が点在し、山裾及び現・旧河道周辺に断続的に分布する自然堤防沿いに集落が発展している。

当遺跡の所在する香南市香我美町は、香宗川流域を基幹に北東から南西方向に縦長な町域を呈し、面積の約7割を山地(丘陵)が占めている。東は月見山から長者が森を経る連峰を境として香南市夜須町、安芸市、安芸郡芸西村と接し、北は重畳とした熊王山山系を擁して奈良峠・秋葉山を連ねる分水嶺で香美市と尾根筋を分ける。西は香宗川の氾濫原性低地(鏡野)が広がり香南市野市町、同赤岡町と境域を成している。土佐湾を臨む南には県都高知市と県東部を結ぶ主要国道55号線が東西に走り、県中心部からの交通・輸送の便も良く、ベッドタウン化様相を呈する。また工業団地の造成や、当遺跡に目睫して広大な演習地を有する陸上自衛隊普通科連隊が移駐するなど、近年大規模な事業が展開している。

香南市は野市町域を中心に開発・都市化が進行し、高規格道路である南国・安芸道路の建設や、平成14(2002)年には第3セクターによる鉄道「ごめん・なはり線」が開通するなど、社会基盤の整備も進みつつある。一方、市内では山北をはじめとする「棒踊り」や「手結盆踊り」(県指定無形民俗文化財)などの伝統的な祭礼が継承されている地区も多く、民俗文化を次世代に伝える地域社会が残っている。

香南市の南部は太平洋(土佐湾)に面する海岸地帯であり、外洋性の高い波浪や沿岸流が海岸に作用して形成された複数列の浜堤(砂堆)が弓状に延びており、旧汀線を示している。海成複式堆積低地による堤間湿地(堤列低地)の発達により、背後に潟湖性の低地が認められる。この浜堤上に発展した集落である赤岡から岸本にかけての海岸は、嘗て製塩業が盛んであった地域であり、赤岡から物部川上流の大柵(香美市物部町)へ抜ける峠越えの往還路が、現在「塩の道」として整備されている。

香南市の東部には夜須川が南流し、河口付近に位置する手結内港は往時の景観を今に伝える藩政期の掘り込み港である。手結港の東には地質区分による四万十帯の露頭(横浪―手結住吉メランジュ:県指定天然記念物)が観察できる住吉海岸(香南市夜須町～安芸郡芸西村)が所在する。海洋底移動により遠隔地の枕状溶岩や層状チャート・多色凝灰岩などが混在する岩石群が分布し、また同帯の走行に対して上・下盤の剪断方向が異なり、その規模から地殻変動によるものと考えられるなど、プレート理論を実証している。

自然地理学的にみた当遺跡周辺の環境は、北方の秋葉山(標高489.5m)を主峰とする聞楽山(三宝山)山系に併走して、長者が森(標高723m)に連なる月見山山系から漸移する山裾丘陵が上分・下分(旧山南)附近にみられ、山北と地名を画している。当該地域では、古段丘地形に由来して稜線に定高性が認められ、小起伏量の谷状地形が河谷盆地を形成している。香宗川流域の各小河川沿いに粗粒の砂礫質堆積物による谷底平野が形成され、低位段丘に続く平坦面(緩傾斜面)として農耕地などに利用されている。

秋葉山山系は香我美町の北に位置する聞楽山(標高 368 m)より南西方向に標高を減じ、三宝山(金剛山 標高 265 m)の南西方向で野市台地(扇状地性中位段丘)の下に沈む。その秋葉山山系の北方に平行して烏ヶ森山系があり、同じく南西に向かって標高を減じて物部川にその山裾を侵蝕されている。三宝山の尾根上には仏像構造線が北東—南西の方向性を示して走向しており、尾根中腹に連なる急斜面(断層崖:傾斜角 30~40°)は、同地質構造線の衝上断層によるものである。

西南日本外帯に属する高知県地域の基盤は、四国脊梁山地をほぼ東西方向に走る御荷鉾構造線及び仏像構造線によって、北から三波川変成帯(御荷鉾緑色岩帯)・秩父累帯及び四万十帯に分類され、大観的には南ほど新しい地層が層状に累重して分布する覆瓦状構造を成している。当該地周辺は地帯構造的には四万十帯北帯に属しており、安芸構造線によって南帯と分けられる。北帯北部は断層帯が狭間隔で併走する白亜紀前期の地層(付加体)から成り、当地域は新莊川層群に属する須崎層(B部層)に該当する。主に暗灰色の泥岩から形成され、珪質岩を含む海底堆積物(混濁流)によるタービダイト層(砂泥互層)を主体に構成されており、半山層(葉山層)の分布地域で南側に整合・漸移関係で上位に重なる地層である。当遺跡の西約 4.7 kmにある山峰が三宝山で、中生代の地質構造帯「三宝山帯」の名前の由来となった山であり、尾根上より北部が秩父帯南帯(三宝山帯)である。構造線の北側に沿って石灰岩(トリアス期)が散在しており、北西約 4.3 kmには我が国有数の石灰鍾乳洞穴として奇勝に富む龍河洞(香美市土佐山田町)が存在する。

裾野に広がる野市台地は物部川下流域に発達した開析扇状地(古期扇状地)であり、海拔約 40~10mと北から南へ緩傾斜し、香長平野(香美・長岡郡南部の河成堆積低地)の東半を形成している。この台地は、秋葉山山系西端の三宝山山麓部で遮られた物部川旧河道が東南東へ流下したためできた扇状地性堆積物(砂礫層)によって形成されたものである。また物部川に面した台地の西端部は 5 mほどの段丘崖となり、下段は沖積扇状地(新时期扇状地)と成っている。野市台地は長岡台地(南国市・香美市土佐山田町)を含む段丘中位面と地形的に連続性がみられることから、ほぼ同時期に離水したと推測されている。降灰時期が約 7,300 年前とされる K-Ah 火山灰(鬼界アカホヤ)の堆積(濃集層準)が段丘上に認められ、AT(始良-Tn)火山灰(約 25,000 年前)の降灰層準が不明瞭なことから、氷河性海面移動に基づく世界規模の海水準変動(海退)がみられた最終氷期(ヴェルム氷期)極相期(約 20,000 年前)以前に形成されたと考えられている^{①)}。

野市台地は粗粒砂岩礫層を呈して透水性が高く、伏流による低地下水位の乏水地であり、原野の広がる非条里地域と考えられていたが、近年の発掘調査や地形観察などにより香宗川旧河道(埋没流路)の復原が試みられている^{②)}。物部川は下刻作用により河床が低下し、台地への灌漑は容易ではなかったが、近世初期以降の大規模な水利事業の展開により、今日にその遺産を見ることができている。

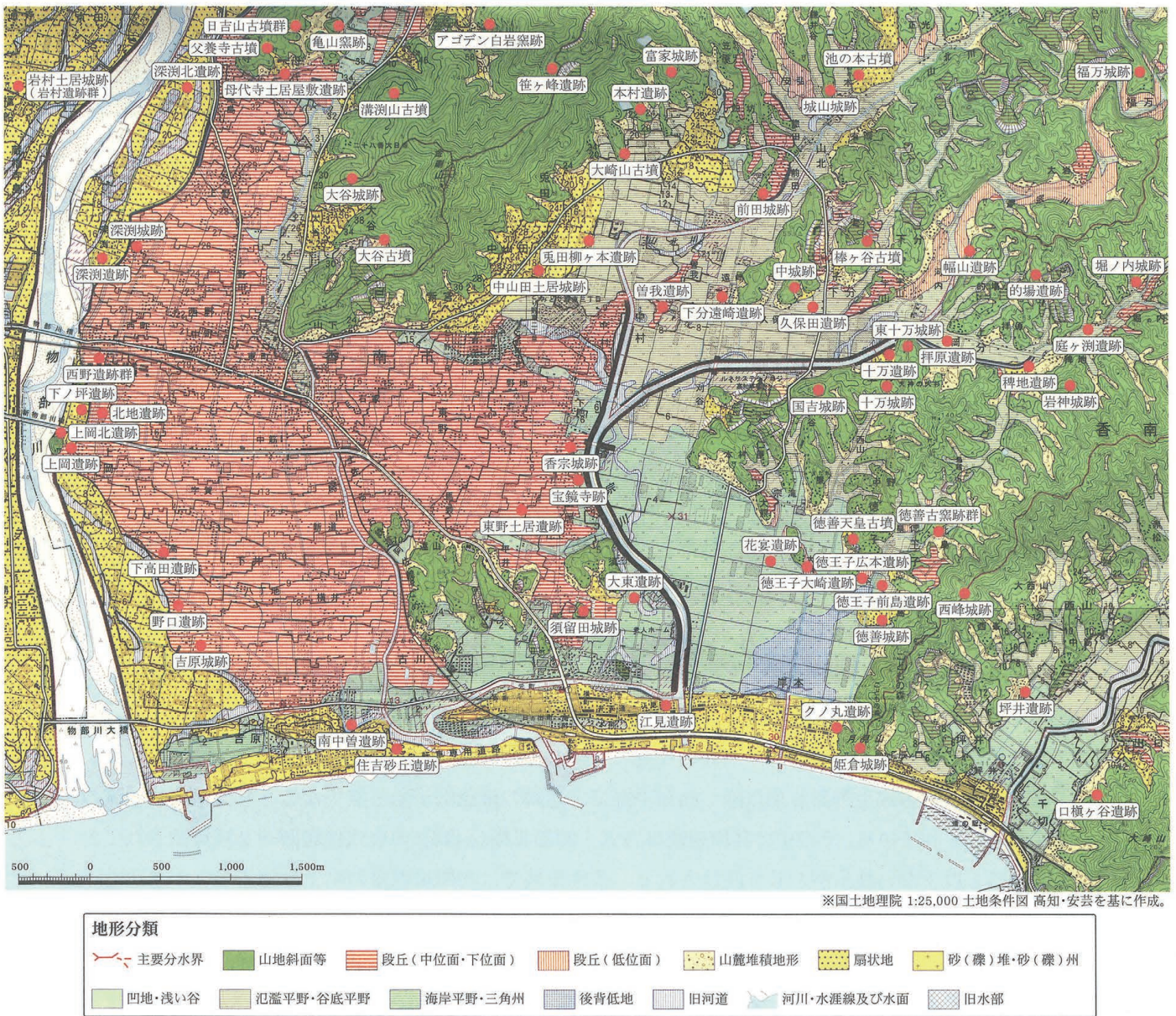
第 2 節 歴史的環境

庭ヶ淵遺跡の所在する香南市は、北部に聞楽山山系の山塊を背負い南に平野部と土佐湾が開けている。中央附近を香宗川(二級河川)が流下して恵みを齎し、西は一級水系物部川が市域を画している。

物部川は野市町をはじめ、高知平野東部(香長平野)を潤しているが、現在の流路を形成したのは近世初頭に築堤されて以降のことであり、それ以前に西偏していた複数の旧河道や凹地列の派流が緩勾配の扇状地上に微地形として遺されている。下流域には旧河道地形に沿って断続的に自然堤防が形成され、縄文後期以降の遺物分布がみられる。その中でも当遺跡から約 9.5 km西に位置する田村遺跡群^{③)}(南国市)は地勢的な優位性もあり、弥生時代における南四国最大級の拠点的(母村)集落として知られている。

香南市域における縄文時代以前の遺跡は、有舌尖頭器(草創期)が採集された手結遺跡、後期(宿毛・片粕・松ノ木式)の土器片を出土した拝原遺跡、晩期の貯蔵穴が確認された十万遺跡⁽⁴⁾、晩期末の突帯文土器が採集された深淵遺跡⁽⁵⁾の例が知られていたが、何れも断片的な出土状況でしかなかった。これまでは縄文・旧石器の空白地帯といわれるほど縄文時代以前の遺跡の例は僅少であったが、当遺跡において香長平野では初の事例となる縄文晩期の集落遺跡が発見された。近年の調査により旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石器文化期・縄文早期にかけての岩陰遺跡である奥谷南遺跡⁽⁶⁾(南国市)、小型のナイフ形石器が確認された新改西谷遺跡⁽⁷⁾(香美市土佐山田町)、西日本有数の縄文早期の定住跡を検出した刈谷我野遺跡⁽⁸⁾(同香北町)、無文厚手土器・押型文土器(縄文早期)を出土した開キ丸遺跡⁽⁹⁾(同土佐山田町)など、香長平野周辺に縄文後期を遡る遺跡の存在が明らかになりつつあり、香南市域から該期の遺跡が更に確認される可能性は高いと期待されている。

平成 20(2008)年、高規格道路建設に伴う発掘調査で、物部川以東で確認例の無かった弥生前期前半の



第5図 庭ヶ淵遺跡周辺の主な遺跡及び地形分類図 (S=1/45,000)

遺構(土坑跡)が、香宗川下流域の海岸平野微高地に立地する徳王子大崎遺跡⁽¹⁰⁾で発見された。出土した土器は前期前半の西見当Ⅰ式(畿内Ⅰ様式古段階併行)であり、前期の早い段階でも物部川左岸に集落が開いていたことを示す遺跡として注目されている。当遺跡でも弥生前期前半から中葉の土器片(遠賀川式)の出土がみられ、移行期の遺跡として田村遺跡群の影響(伝播)が考えられている⁽¹¹⁾。

弥生前期末になると、上岡遺跡⁽¹²⁾・北地遺跡⁽¹³⁾・下分遠崎遺跡⁽¹⁴⁾・拝原遺跡・十万遺跡など集落数は急増する。物部川右岸に所在する弥生時代の拠点集落田村遺跡群からの分村による集落数の増加だと考えられている。下分遠崎遺跡ではカツオの脊椎骨をはじめツキノワグマ・シカ・イノシシ・イヌなど様々な魚骨・獣骨類や、農工具を含む多様な木製品、また遺構出土の炭化米から熱帯ジャポニカのDNAが検出されるなど、自然科学分析により多くの知見が齎された。

下分遠崎遺跡や北地遺跡など幾つかの遺跡では、集落が弥生前期末から中期前半・中葉にかけて継続して営まれるが、前期末のみの短命な遺跡もみられる。香南市域において中期中葉から後半(Ⅲ様式中段階～Ⅳ様式古段階)にかけての遺跡は殆ど確認されていない。

中期末から後期の初めにかけては、当遺跡の北西約3.4 kmの地点に高地(丘陵)性集落的な要素を持つ本村遺跡⁽¹⁵⁾が所在している。この遺跡からは竪穴住居(建物)跡や段状遺構など当該期の高地性集落の典型的な遺構群と共にガラス製の勾玉も出土している。同遺跡は標高約30 m前後を測る低丘陵斜面部に立地しており、土器は凹線文土器が主体である。遺跡の北東に連なる山稜上に所在する笹ヶ峰遺跡や、日本屈指の鍾乳洞である龍河洞内で発見された龍河洞遺跡(香美市土佐山田町)などがほぼ同時期に営まれるなど、周辺一帯の土器の分布状況から、当該期には標高の高い地点を利用していたと考えられており、成立の背景として中部瀬戸内地方の影響を受けた可能性が指摘されている。

物部川と香宗川に挟まれた野市町域は、青銅器について注目される地域である。当遺跡の北方約3.9 kmの地点には、絵画銅剣で知られる兎田八幡宮があり、西方約7.0 kmの物部川段丘崖上段には、銅鏡(破鏡)の出土した北地遺跡と、銅矛の再加工品が出土した西野ルノ丸南A遺跡⁽¹⁶⁾(西野遺跡群)が所在している。この段丘崖の下段面からも後期前半の竪穴住居跡(下ノ坪遺跡⁽¹⁷⁾・上岡遺跡)が確認されており、下ノ坪遺跡では高知平野最大級の竪穴住居跡1棟から、約80点にも上るガラス小玉が出土している。段丘崖の上下段に分布するこれらの遺跡は、弥生後期前半に一連の集落を形成していたものと考えられている。

弥生後期後半から古墳時代初頭にかけては、深淵遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡⁽¹⁸⁾・幅山遺跡⁽¹⁹⁾・野口遺跡・南中曾遺跡など集落数も更に増加する。深淵遺跡・東野土居遺跡・幅山遺跡では竪穴住居跡と土器棺墓が確認され、兎田柳ヶ本遺跡⁽²⁰⁾では「方形周溝墓」の可能性を残す遺構を検出しているが、当地域において当該期の墓制や祭祀空間などの様相を把握するには資料の蓄積が不十分で、今後の調査結果に期待したい。これらの集落は物部・香宗両河川流域に展開しており、他地域からの搬入土器(庄内式土器・東阿波型土器)の存在からも、河川が当時の交通に果たしていた役割を推察することができる。

古墳時代前期の古式土師器Ⅱ期以降、高知平野では遺跡の確認例が殆ど無くなるなど、遺跡数急減の可能性が指摘されている。その中で拝原遺跡は古式土師器Ⅲ期(4世紀)の竪穴住居跡が2棟確認されており、県内でも数少ない検出例として注目される。香南市域では初期須恵器の出土は徳王子広本遺跡を除いて確認されておらず、高知平野を通じても前期古墳は殆ど例がみられない。丘陵先端部に立地していた徳善天皇(花散里)古墳は5世紀代の古墳とされているが、それ以外は6世紀後半以降に築造された後期古墳が大半であり、存在が伝えられるが旧態を存していないものも多い。大谷古墳⁽²¹⁾・大崎山古墳など発掘調査の実施された古墳もあるが、調査が十分成されておらず、詳細な時期特定のできないものが多

い。溝渕山(竹ノ内)古墳や日吉山古墳群・父養寺古墳など野市町佐古地区周辺の丘陵頂部附近に立地するもの、大崎山古墳や池の本古墳・棒ヶ谷古墳など半島状の丘陵に単独で立地するものなどがある。

古墳時代については、4～5世紀前後の様相は殆ど解明されていないのが実情である。6世紀後半から7世紀初めにかけての古墳時代後期の竪穴住居跡が、深淵遺跡・下ノ坪遺跡・西野ルノ丸遺跡・東野土居遺跡などで確認されているが、古墳被葬者の帰属集落との関連性については検討を要すると思われる。

古代(律令期)の遺跡としては、下ノ坪遺跡が白眉である。8世紀前半～9世紀中葉頃に盛行し、古代の出土遺物は硯や丸軋、全国的にも例の少ない四仙騎獣八稜鏡などが出土している。コの字状に配置された南四国最大級の規模を持つ総柱建物跡を検出しており、物部川に面した立地から奈良時代から平安時代にかけて川津として機能していた遺跡だと考えられている。深淵遺跡も同様に官衙としての役割を果たしていたと考えられており、二彩陶器・緑釉陶器・墨書土器・陶硯・蛇尾などが出土している。対岸に位置する岩村遺跡群⁽²²⁾(南国市)からも畿内・近江・東海産の緑釉陶器が出土しており、9世紀後半～10世紀中葉頃に盛期を迎えている。中世には城館(岩村土居城跡)の出現がみられ、長期に亘る拠点として存続した要因として、物部川(旧河道)に臨む川津としての水運掌握が背景にあると考えられる。

香宗川流域にも曾我遺跡⁽²³⁾や十万遺跡など官衙関連と考えられる遺跡が点在している。また条里地割(「香長条里」)の可能性を持つホノギ(中ノ坪・一ノ坪・大坪・四ノ坪など)が随所にみられる。

古代の窯跡として野市町佐古地区周辺に亀山窯跡・アゴデン白岩窯跡、香我美町徳王子に徳善古窯跡群(7世紀後半～8世紀初頭頃)が確認されている。亀山窯跡で生産された瓦は平安京大極殿や、藤原氏の氏寺である法勝寺に使用されていた記録が遺っており、古代における土佐と中央との関係を知る上で重要な遺跡と考えられている。物部川に面して深淵北遺跡⁽²⁴⁾が9世紀末～12世紀代にかけて成立していたとみられ、周辺には亀山窯跡関連集落の可能性のある母代寺土居屋敷遺跡⁽²⁵⁾が所在している。

古代末から中世初頭にかけて各地で荘園の成立がみられ、香美郡内に立荘された大忍庄(荘)は、土佐湾に面した岸本から山間部の奥物部に跨る広大な荘域を有していた。『和(倭)名類聚抄』(10世紀前半頃成立)にみえる大忍郷が荘園化したものと考えられ、鎌倉時代の後期には鎌倉の律宗寺院極楽寺が、次いで南北朝期には紀州の熊野新宮が荘領主となり、15世紀には室町幕府管領で土佐守護でもあった細川氏の所領となるなど、権門による支配の動向が当該地域に影響を与えてきた。

中世には香美郡南部において香宗我部氏の台頭をみる。香宗我部氏は鎌倉時代初頭に西遷した中原秋通が香美郡宗我部・深淵両郷の地頭職に補任したのに始まるとされている。地名を氏として宗我部氏を名乗ったが、長岡郡の宗我部(秦)氏と区別するため、郡名を冠して香宗我部氏を称したとする。香宗城を居館とし、室町時代(戦国期)には土佐守護細川氏の権力を背景に大忍庄へ進出するが、安芸氏との抗争で衰退する。長宗我部国親の三男親泰を後嗣として迎え局面を打開し、以後長宗我部氏の勢力拡大に貢献する。慶長5(1600)年主家の改易に伴い、地域権力としての香宗我部氏は終焉するが、本流は中山田氏として土佐に家名を遺している。現在香宗城跡は八幡社と土塁の一部を遺存しており、その南東には香宗我部氏菩提寺の宝鏡寺跡に観音堂が建っている。周辺の遺跡(東野土居遺跡)からは、中世の土師質土器や瓦質土器の他に貿易陶磁器などの広域流通品の出土がみられる。

また香宗川左岸の標高13m前後を測る丘陵縁辺部の微高地に立地している十万遺跡では、「重濠複郭式屋敷城」(松本豊寿『城下町の歴史的地理的研究』1967年)と考えられる溝跡を検出している。大忍庄内において名主層などの在地勢力が、構造的変質を遂げる時期の遺構として注目されており、周辺の中世城館なども含めて、当該地域が緊張状況下にあった可能性を示唆している。

近世前期になると、物部川山田堰からの分水(引水)により原野の広がる野市台地の開墾が進み、豊かな穀倉地帯へと景観を変えた。上岡北遺跡⁽²⁶⁾からは、物部川治水を手がけた野中兼山による築堤と推測される17世紀頃の石積み遺構が確認されている。野市町は西野(東町)周辺に街村集落が形成され、赤岡の町並と共に民家・商家が発展する。明治以降の近代化に伴う町村制度施行による合併を経て、香南地域の行政・経済・文化の中心地となり、今日に至る。

【註】

- (1) 研川英征「河岸段丘の形成と、地形学見地からみる物部川および高知平野」『土佐山田史談』2004年
- (2) 前田光雄氏、菊池直樹氏、辻康男氏の御教示による。
- (3) 前田光雄・吉成承三 他『田村遺跡群Ⅱ 第1～9分冊』(助高知県埋蔵文化財センター 2004・2006年)
- (4) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会 1988年
- (5) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『深淵遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (6) 松村信博・山本純代『奥谷南遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(助高知県埋蔵文化財センター 1999・2000・2001年)
- (7) 中山泰弘『新改西谷遺跡・勝楽寺跡』土佐山田町教育委員会 2002年
- (8) 松本安紀彦『刈谷我野遺跡Ⅰ・Ⅱ』香北町・香美市教育委員会 2005・2007年
- (9) 小林麻由・藁科哲夫『開キ丸遺跡』土佐山田町教育委員会 2002年
- (10) 島内洋二「徳王子大崎遺跡」『埋文こうち 第22号』高知県教育委員会 2009年
- (11) 出原恵三『南国土佐から問う弥生時代像 田村遺跡』新泉社 2009年
- (12) 更谷大介・溝渕真紀『上岡遺跡』野市町教育委員会 2005年
- (13) 松村信博・宮地啓介『北地遺跡』香南市教育委員会 2011年
- (14) 高橋啓明・出原恵三 他『下分遠崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』香我美町・香南市教育委員会 1989・1993・2010年
- (15) 坂本憲昭『本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1993年
- (16) 更谷大介「西野遺跡群ルノ丸地区南・ルノ丸地区南A」『埋文こうち 第21号』高知県教育委員会 2008年
- (17) 出原恵三・池澤俊幸・小松大洋 他『下ノ坪遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』野市町教育委員会 1997・1998・2000年
- (18) 筒井三菜・下村 裕 他『高知県埋蔵文化財センター年報 第20号』(助高知県埋蔵文化財センター 2011年)
- (19) 岡本 修『幅山遺跡』香我美町教育委員会 1999年
- (20) 松村信博・宮地啓介『畠田柳ヶ本遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (21) 山本哲也『大谷古墳』(助高知県文化財団 1991年)
- (22) 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ』南国市教育委員会 1997・1998・1999年
- (23) 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会 1989年
- (24) 吉成承三・佐竹 寛『深淵北遺跡』野市町教育委員会 1996年
- (25) 松村信博・宮地啓介『母代寺土居屋敷遺跡』香南市教育委員会 2010年
- (26) 更谷大介・溝渕真紀『上岡北遺跡』香南市教育委員会 2009年

【参考文献】

- 『香我美町史 上巻』香我美町史編纂委員会 1985年
『野市町史 上巻』野市町史編纂委員会 1992年 他

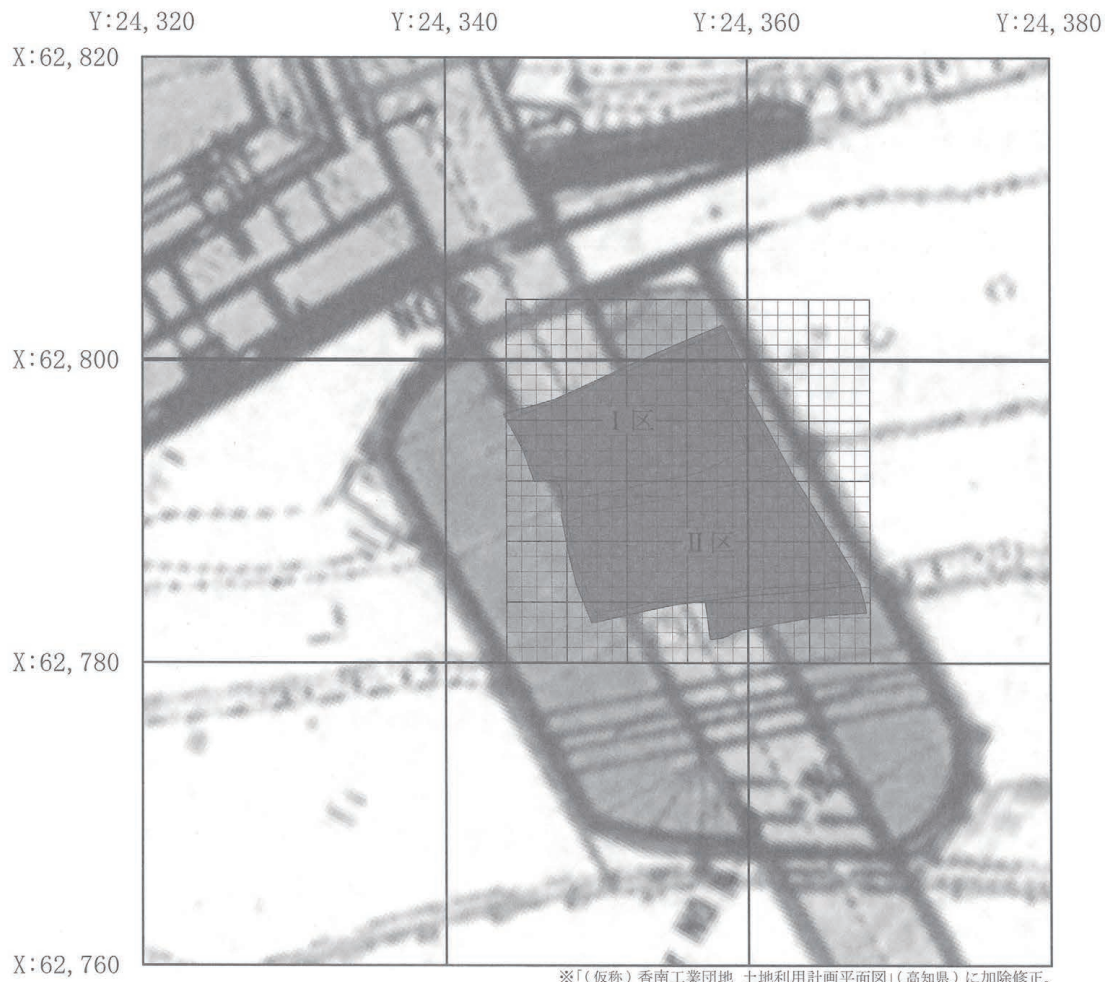
第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査の方法

試掘調査の結果に基づき、上段をⅠ区、中段をⅡ区と区画して調査区を設定した。本調査は遺物包含層が確認されたⅡ区から着手し、隣接民有地の保全を期して実掘範囲を画定した。Ⅰ区については東端にトレンチを開削して上段遺構の遺存状況を確認しつつ調査範囲を拡張していった。調査の手順としては、重機を用いて表土を剥除した後、包含層掘削・遺構検出・遺構埋土掘削等を手作業で精査した。

遺構の調査については、対象遺構の形状に則して任意の基準線(測量軸)を設定し、平面実測・レベル(海拔高)測量及び写真撮影等による記録を行った。水平・垂直位置の測量は、北面する市道螢野線に既存する測量基準点(永久境界杭)等を共用し、光波測距儀と水準器を併用して視準・計測を行った。層相については目視による土色観察と層理面による分層を試みた。遺構平面図及び土層断面図は、縮尺 20 分の 1 を基本として測量を行い、遺物出土状況図等は縮尺 10 分の 1 を適用した。

本報告書では、世界測地系に則した公共座標に基づいて 1 m の方眼を展開し、グリッド番号を付して遺構配置図として使用している。調査時における任意の方向軸は、真北(国土座標第Ⅳ系)を基準としたものに修正して本書図版に掲載している。



第 6 図 調査区位置及び公共座標 (S=1/500)

第2節 調査対象地周辺の土壌

調査対象地周辺の土壌は、『土地分類基本調査「手結・安芸」』（高知県企画部企画調整課 1982年）に拠れば「藤代統」と呼ばれる細粒褐色低地土壌で、香我美町内の氾濫原性低地（谷底平野）を主要な分布域とする水積土壌である。また北方丘陵に広がる土壌は「蓼沼統」と呼ばれ、香我美町・夜須町・安芸郡芸西村に広汎に分布している細粒黄色土壌である。非固結堆積岩を母材とする崩積土壌で山腹棚田として存在している。当該地では分布域がほぼ重なり、これらの土壌が混在している可能性が考えられる。『土佐州郡誌』（宝永年間）山南村の項には「其土赤黒」と記されている。

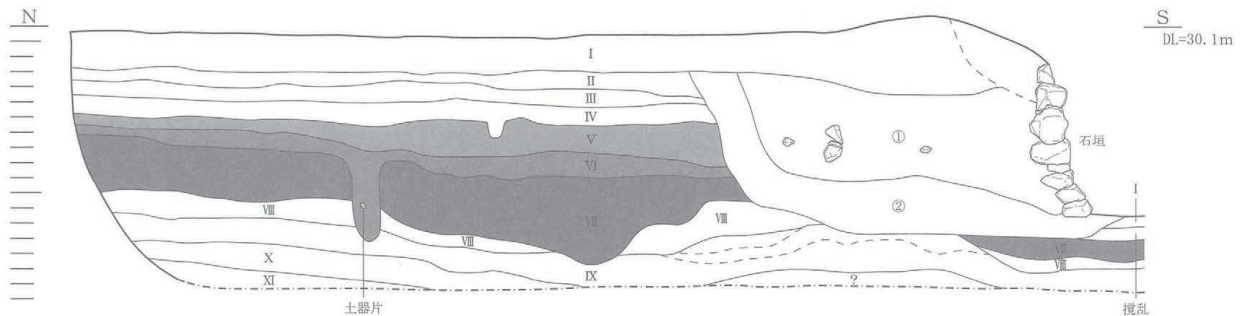
第3節 I区の調査

1. 基本層序

調査区東壁南側（第7図）及び北側（第14図）で堆積状況を観察した。I～III層はほぼ水平に堆積しており、中～近世以降の耕作土と考えられる土壌で灰色化が進行している。調査区は北から南へ緩傾斜している河成段丘面に立地しており、V・VI層（遺物包含層）以降は旧地形に則した堆積状況を呈している。下層からは黒ボク土壌（VII層）、K-Ah火山灰（鬼界アカホヤ）を含む層位（VIII層）を確認できた⁽¹⁾。IX層は所謂「チョコ層」と呼ばれる縄文早期以前の層相と考えられ、VII層以下に遺物の出土は確認できなかった。

本遺跡では遺構面上から礫群（集石）を検出しているが、V層以上の層準からは明黄褐色小礫（砂岩）を多く産出するのに対し、VI層以下は橙・明褐色を呈する傾向にあるなど、産状に相違がみられる⁽²⁾。

I区における基本層序は以下の通りである。

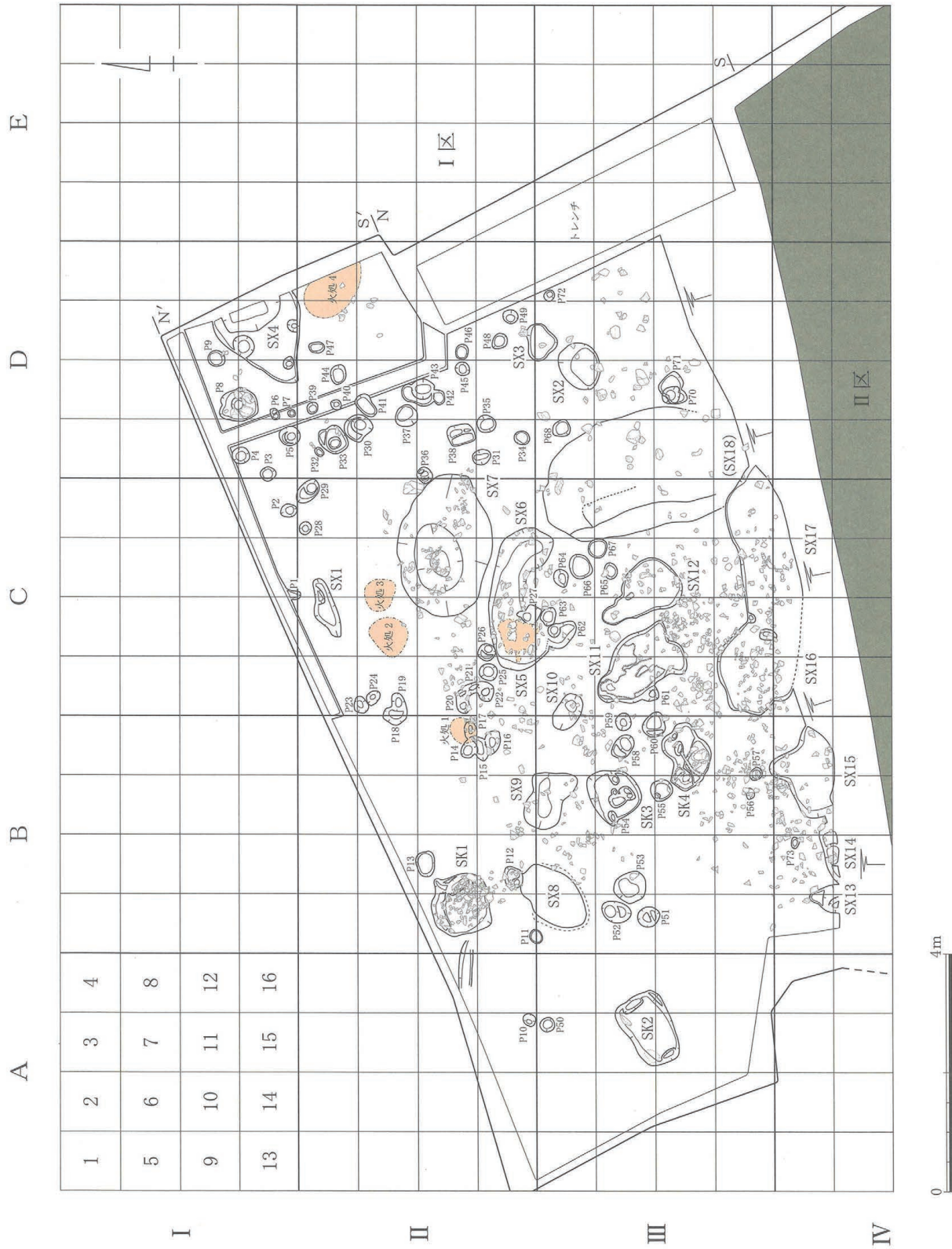


- I: 鈍い黄褐色シルト質粘土 II層と比較して黄色が強い。(現耕作土)
- II: 鈍い黄褐色シルト質粘土
- III: 鈍い黄褐色～暗褐色シルト質粘土 明黄褐色小礫を多留。
- IV: 暗褐色粘土質シルト 明黄褐色小礫を多留。
- V: 暗褐色～黒褐色粘土質シルト 明黄褐色小礫を多留。(遺物包含層)
- VI: 暗褐色～黒褐色粘土質シルト 明褐色礫を多留。(遺物包含層・遺構埋土)
- VII: 黒褐色シルト質粘土 ※黒ボク土壌
- VIII: 暗褐色～明褐色シルト質粘土 アカホヤを多留。
- IX: 暗褐色シルト質粘土 明褐色小礫を多留。(※チョコ層)
- X: 暗黒灰色粘土
- XI: 黄灰色シルト質粘土

- ①: 砂礫混粘土質シルト 4.5～20cm大の角礫
- ②: 灰褐色粘土質シルト
ブロック状に黒色粘土質シルトが混在。

0 2m

第7図 I区 東壁（南側）セクション図 (S=1/50)

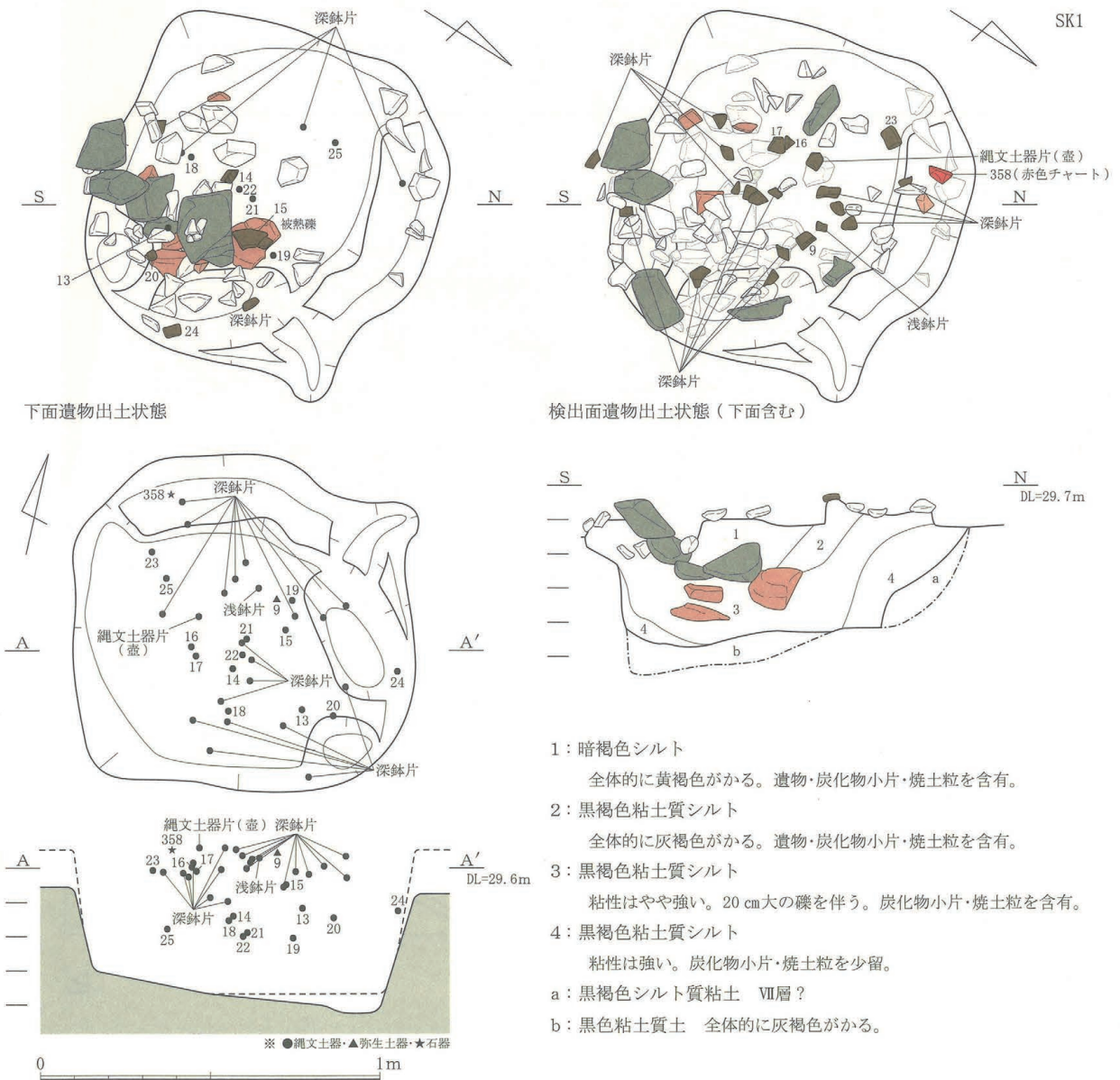


第8図 I区 遺構配置図 (S=1/100)

2. I 区の遺構・遺物

調査区は山南川を臨む河成段丘上段に立地しており、I 区の調査対象面積は約 130 m²である。遺構の検出状況に粗密を認められ、北及び西端を営為(占拠跡)の限りとする。本調査区で検出した主な遺構は、土坑状遺構(SK)4基、性格不明遺構(SX)18基、ピット状遺構(P)約80個である。形態的に捕らえ難い形状を呈した遺構をSXとして報告しているが、SKとした遺構も用途は不明であり、配石を伴う土壇墓の可能性を残す遺構も存在している。また地床炉(火処)と考えられる焼土痕を複数検出している。

遺物は二枚貝などの脈肋圧痕等による条痕及び刻目突帯を施文した深鉢形粗製土器等を主体に出土がみられる。縄文晩期後半(終末)を示す出土状況から当該期が本遺跡の主要な帰属時期と考えられるが、弥生前期前半の遺物(遠賀川式(系)土器)も僅少なが出土しており、縄文から弥生時代への移行期の遺跡としての側面も看取できる。尚、本書図版において遺物等の出土位置を示した垂直分布図は、空間的上下関係を重複的に模式図化したものであり、産出した礫等は粒径に応じた三角形で表現している。また被熱礫(赤変等)や模式図化に対応した礫等は、便宜上実物とは異なる色調で着色表示している。



第9図 SK1 平面・セクション・エレベーション(垂直分布)図(S=1/20)

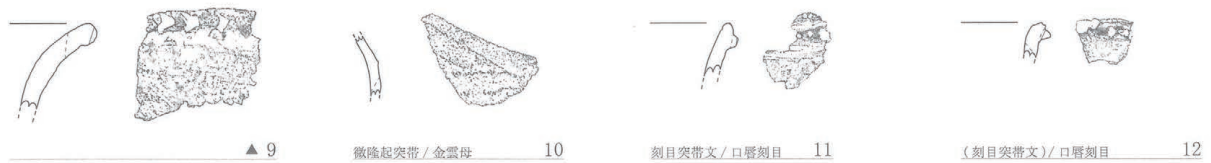
土坑状遺構(SK)

SK 1 (第9・10図) 縄文晩期後半

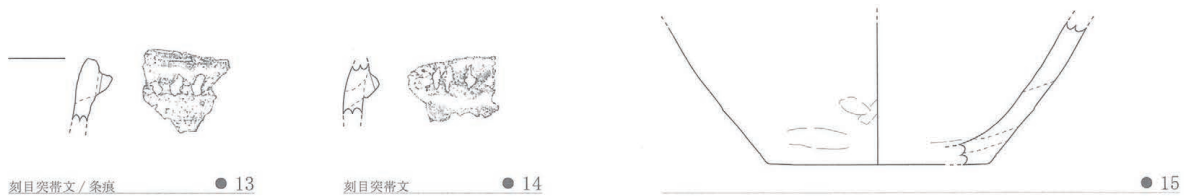
調査区BⅡ-9・10・13・14グリッドに位置する。検出高は29.53 mを測る。平面形態は隅丸方形状を呈し、径0.98～1.01 mを測る。断面形態は箱形状を呈し、深さは32～42 cmを測る。埋土は暗褐色シルト(1層)及び黒褐色粘土質シルト(2～4層)であり、焼土粒・炭化物小片を含有している。検出面及び遺構内からは5～21 cm大の(垂)角礫(粗粒砂岩等)を多数出土しており、打割や被熱の認められる礫も含まれている。産状から集石(配石)の埋没状況(第39図)が看取でき、1層は二次堆積の可能性を残している。

遺物は条痕を含む縄文土器片約100点と、上層から弥生土器片約30点を出土しており、弥生土器片の多くは摩耗している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(11～16・18～26)、浅鉢(10・17)であり、検出面で出土した石核状の赤色チャート(358)は配色等から人為的な要素を含んでいる。

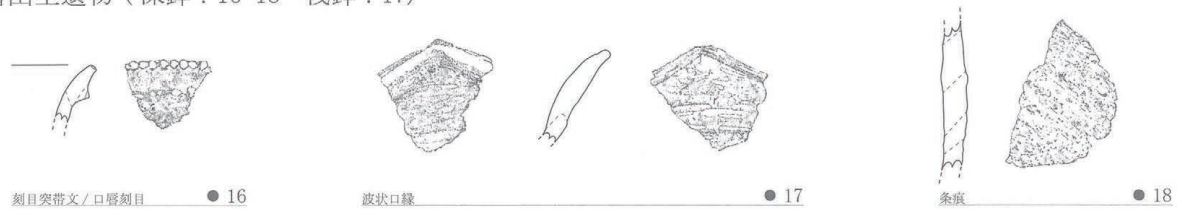
検出面(上層)出土遺物(弥生土器 甕:9 縄文土器 深鉢:11・12 浅鉢:10)



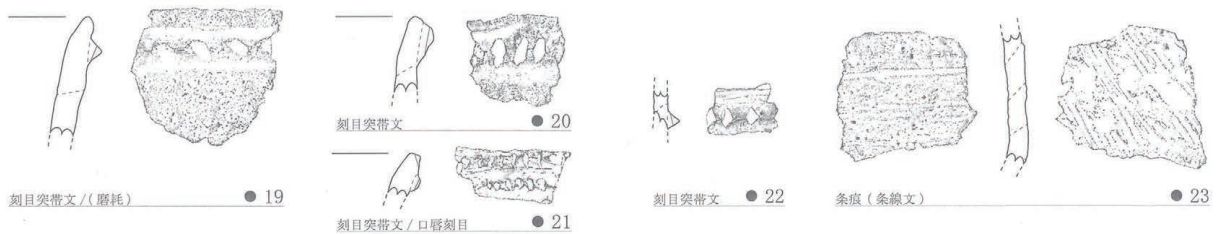
1層出土遺物(深鉢:13～15)



2層出土遺物(深鉢:16・18 浅鉢:17)



3層出土遺物(深鉢:19～23)



4層出土遺物(深鉢:24～26)

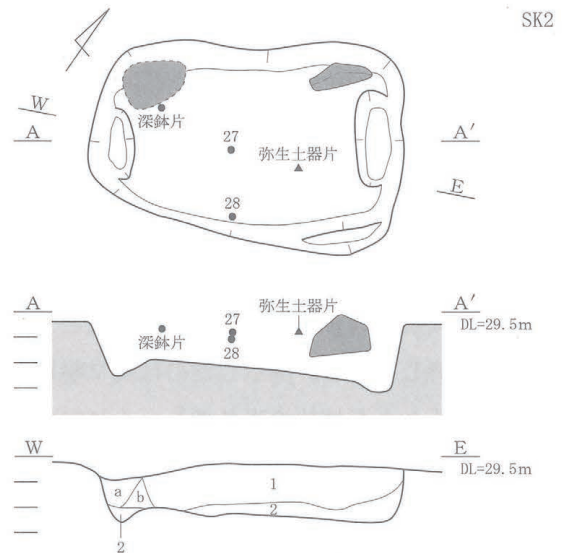
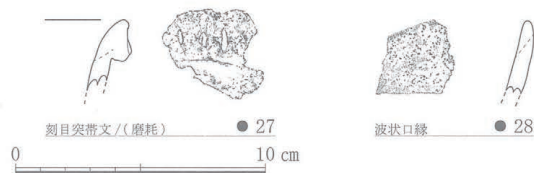


第10図 SK1 出土遺物実測図(S=1/3)

SK 2(第 11 図) 縄文晩期後半

調査区 AⅢ-7・8・11・12 グリッドに位置する。検出高は 29.28m を測り、上面から 25 cm 大の偏平な礫を標石状に検出している。平面形態は隅丸矩形を呈し、長径 1.24 m、短径 0.79 m を測る。断面形態は箱形状を呈するが、底面の東西端に溝状の落ち込みを検出しており、深さは 18~25 cm を測る。埋土は 1 層(機能面)と 2 層(加工面)に分層でき、東端に擾乱(a・b)がみられる。

遺物は条痕を含む縄文土器片 5 点と摩耗した弥生土器片 1 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(27)と浅鉢(28)である。



- 1: 暗褐色土 縮り・粘性やや有り。橙色粒・炭化物粒・角礫(焼土塊?)を含有。
- 2: 灰褐色土 縮り・粘性やや有り。黄色砂礫を含有。
- a: 灰黄色土 粘性有り。
- b: 暗褐色土 黄灰色が混在(a層より土色が濃い)。粘性有り。

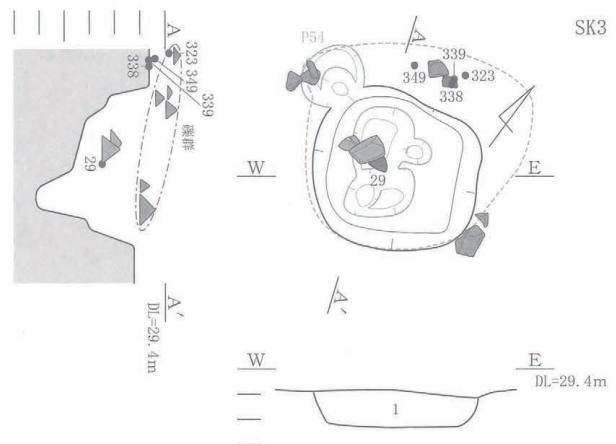


SK 3(第 11 図) 縄文晩期後半

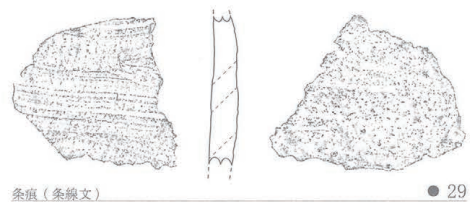
調査区 BⅢ-7 グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は 29.31m を測る。ピット状遺構(P54)と切り合うが先後関係は不明である。平面形態は隅丸方形を呈し、径 0.66 m を測る。断面形態は箱形状で深さは 14 cm を測り、底面から 8~13 cm 大の(亜)角礫(粗粒砂岩)を検出している。埋土は赤・黄褐色粒を含有する暗褐色粘土質シルトである。

遺物は条痕を含む縄文土器片 21 点と弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器片 1 点を出土している。縄文土器片には浅鉢片もみられる。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(29)である。

底面下層から不整形なピット状遺構(黒褐色粘土質シルトに黄褐色粘土ブロックを含有)を検出しているが、本遺構との関連性は不明である。



- 1: 暗褐色粘土質シルト 赤・黄褐色粒を一面に含有。



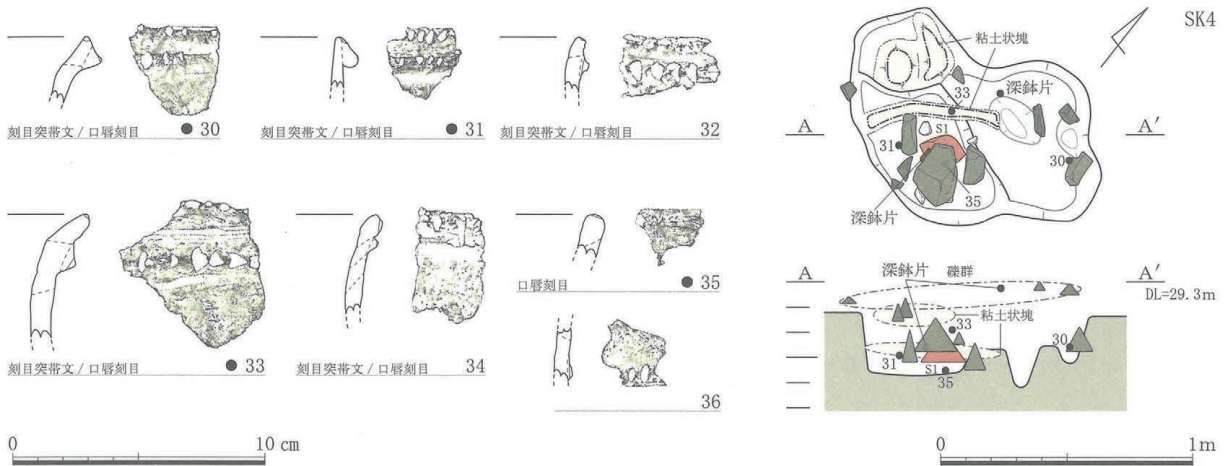
SK 4(第 12 図) 縄文晩期後半

調査区 BⅢ-11・12 グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は 29.19m を測る。平面形態は不整形を呈し、長径 1.14 m、短径 0.82 m を

第 11 図 SK2・3 平面・セクション・エレベーション図(S=1/30) 出土遺物実測図(S=1/3)

測る。断面形態は箱形状を呈するが、底面にピット状及び土坑状遺構を検出しており、深さは15~40 cmを測る。形状から切り合いの可能性も考えられる。埋土は赤・黄褐色粒を含有する暗褐色粘土質シルトである。遺構内に15~25 cm大の(亜)角礫(粗粒砂岩)を包含するが、上部配石が何らかの原因で埋没した可能性も考慮される。S1は円礫が分割され角礫状を呈し、被熱の痕跡を有している。

遺物は条痕を含む縄文土器片17点とハケ調整痕を含む弥生土器片15点を出土しており、ヘラ描沈線を施文した土器片もみられる。他に炭化物小片を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(30~35)と弥生前期の壺(36)である。



第12図 SK4 平面・エレベーション図 (S=1/30) 出土遺物実測図 (S=1/3)

性格不明遺構(S X)

S X 1

調査区CⅡ-2・3グリッドに位置する。検出高は29.66mを測る。平面形態は不整楕円形状を呈し、長径1.05m、短径0.38mを測る。断面形態は皿状を呈するが、底面にピット状の落ち込みを検出し、深さは8~11 cmを測る。埋土は暗褐色シルト質粘土を基調としている。遺物の出土は確認していない。

S X 2 (第13図)

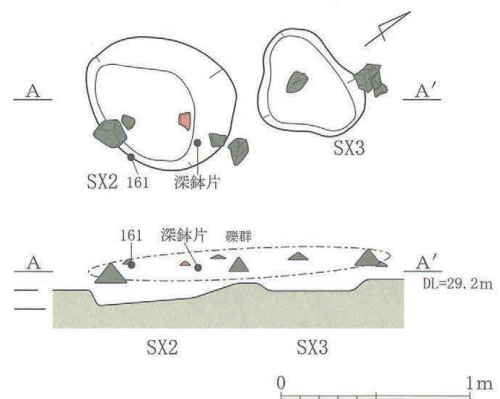
調査区DⅢ-2・3・6・7グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は29.13mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径0.82m、短径0.65mを測る。断面形態は皿状で深さは11 cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物の出土は確認していない。

S X 3 (第13図)

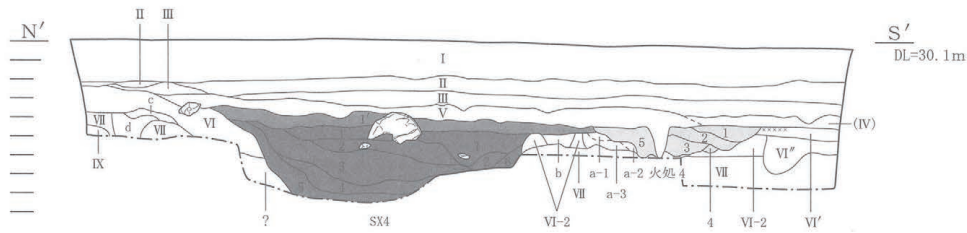
調査区DⅡ-15/DⅢ-3グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は29.16mを測る。平面形態は不整形を呈し、径0.50~0.57mを測る。断面形態は皿状で深さは7cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物の出土は確認していない。



第13図 SX2・3 平面・エレベーション図 (S=1/40)

I区 東壁(北側)セクション図(S=1/40)



SX4

- 1: 極暗褐色～暗赤褐色シルト質粘土
橙色小礫・炭化物を含有。
- 2: 極暗赤褐色～黒褐色シルト質粘土
小礫含有量は少なく、炭化物は多い。
- 3: 極暗赤褐色～黒褐色シルト質粘土
2より灰色がかかる。
- 4: 黒褐色シルト質粘土
- 5: 黒褐色シルト質粘土 若干明るい。
- 6: 極暗赤褐色～黒褐色シルト質粘土
炭化物を多留。
- 1': 暗赤褐色シルト質粘土
黒色土・炭化物を含有。橙色・明褐色礫を多留。

遺構埋土・他

- a: 極暗赤褐色シルト質粘土 橙色小礫を含有。
- b: 黒褐色シルト質粘土 極暗赤褐色土が混在。焼土・炭化物を含有。
- c: 灰褐色シルト質粘土
- d: 黒褐色シルト質粘土 橙・明褐色小礫・炭化物を含有。

SX4(第14図) 縄文晩期～

調査区DI-11・14・15・16グリッドに位置する。東端は調査区外のため未検出である。検出高は29.52mを測るが、調査区東壁(北側)セクション図(第14図)には上位からの掘り込みが看取できる。平面形態は不整形状を呈し、現状で径1.48mを測る。検出状態での断面形態は皿状を呈し、深さは10～23cmを測る。底面にピット状遺構を検出しているが、関連性は判断できない。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。

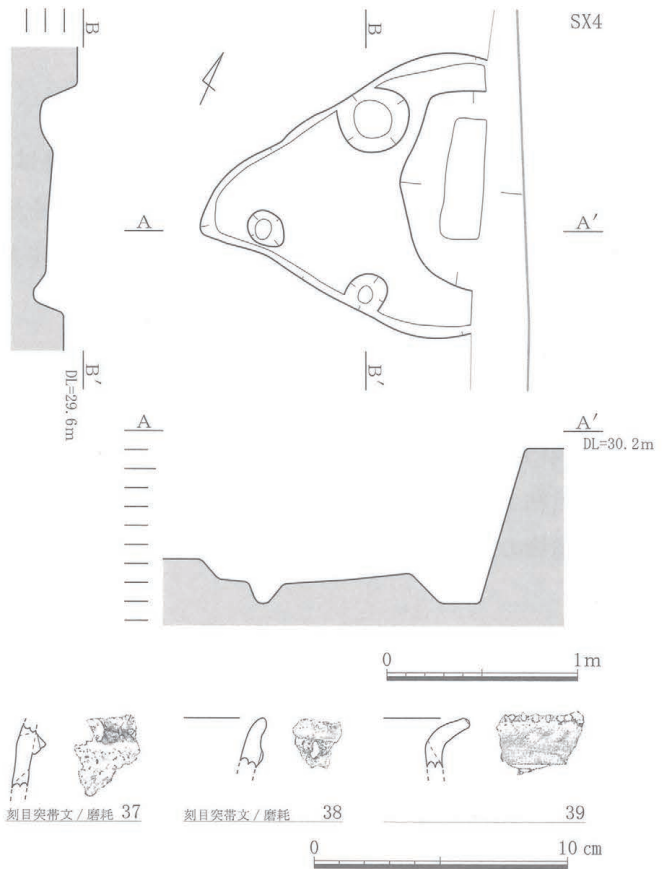
遺物は条痕を含む縄文土器片14点と弥生土器片17点を出土しており、弥生土器片の多くは摩耗している。他に炭化物小片を数点出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(37・38)と弥生前期の甕(39)である。

基本層序(亜層)

- VI': 黒褐色～暗褐色シルト質粘土 マンガン粒(×)を含有。
- VI'': 黒褐色～暗褐色シルト質粘土 明褐色小礫・炭化物を含有。
- VI-2: 黒褐色シルト質粘土 明褐色小礫・炭化物を含有。

火処4

- 1: 黒褐色シルト質粘土
- 2: 黒褐色シルト質粘土
VI層と比較するとやや赤みがかって明るい。橙色礫・炭化物を含有。
- 3: 極暗褐色～暗赤褐色シルト質粘土
- 4: 極暗褐色～暗赤褐色シルト質粘土
1～2cm大の明褐色小礫・炭化物を多留。
- 5: 褐色～にぶい赤褐色シルト質粘土
1～2cm大の明褐色小礫・炭化物を多留。



第14図 I区 東壁(北側)セクション図(S=1/40)

SX4 平面・エレベーション図(S=1/40) 出土遺物実測図(S=1/3)

S X 5 (第 15 図) 縄文晩期後半

調査区 C II-13・14・15/ C III-2 グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は 29.4m を測る。ピット状遺構(P27・62・63)と切り合うが関連性は不明であり、S X 6 とは同一遺構の可能性を含んでいる。平面形態は不整楕円形状を呈し、現状で長径 1.80m、短径 0.97m を測る。断面形態は皿状で深さは 13cm を測り、7~17cm 大の(亜)角礫(粗粒砂岩等)を多数包含している。焼土塊を検出しているが、非被熱礫が混入している。焼土塊の下面から落ち込み状遺構を検出している。

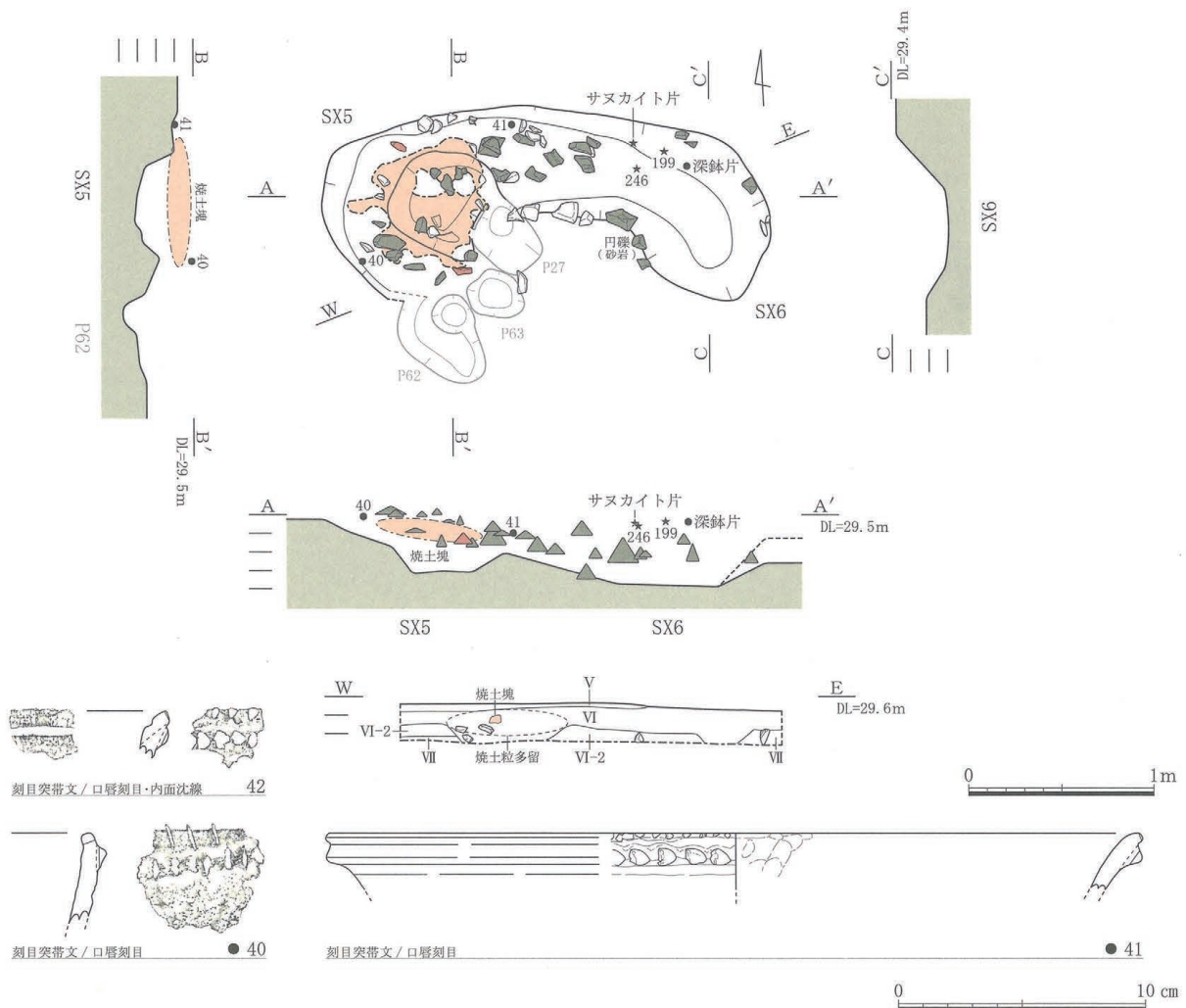
遺物は条痕を含む縄文土器片 28 点と、弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器 3 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(40・41)である。

本遺構は礫の産状や包含層中に焼土粒(焼土塊残滓)が多留するなど、検出状況に検討が残る。

S X 6 (第 15 図) 縄文晩期後半

調査区 C II-15・16/ C III-3・4 グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は 29.37m を測る。S X 5 とは切り合い関係にあるが、同一遺構の可能性を含んでいる。平面形態は楕円形状を呈し、現状で長径 0.95m、短径 0.71m を測る。断面形態は台形状で深さは 26cm を測り、上端に礫を遺している。

遺物は縄文土器片 2 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(42)である。



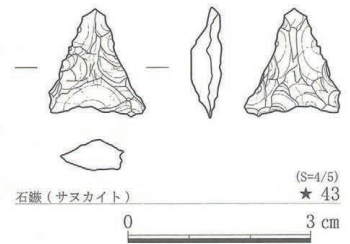
第 15 図 SX5・6 平面・エレベーション図 / 包含層セクション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

S X 7 (第 17 図) 縄文晩期後半

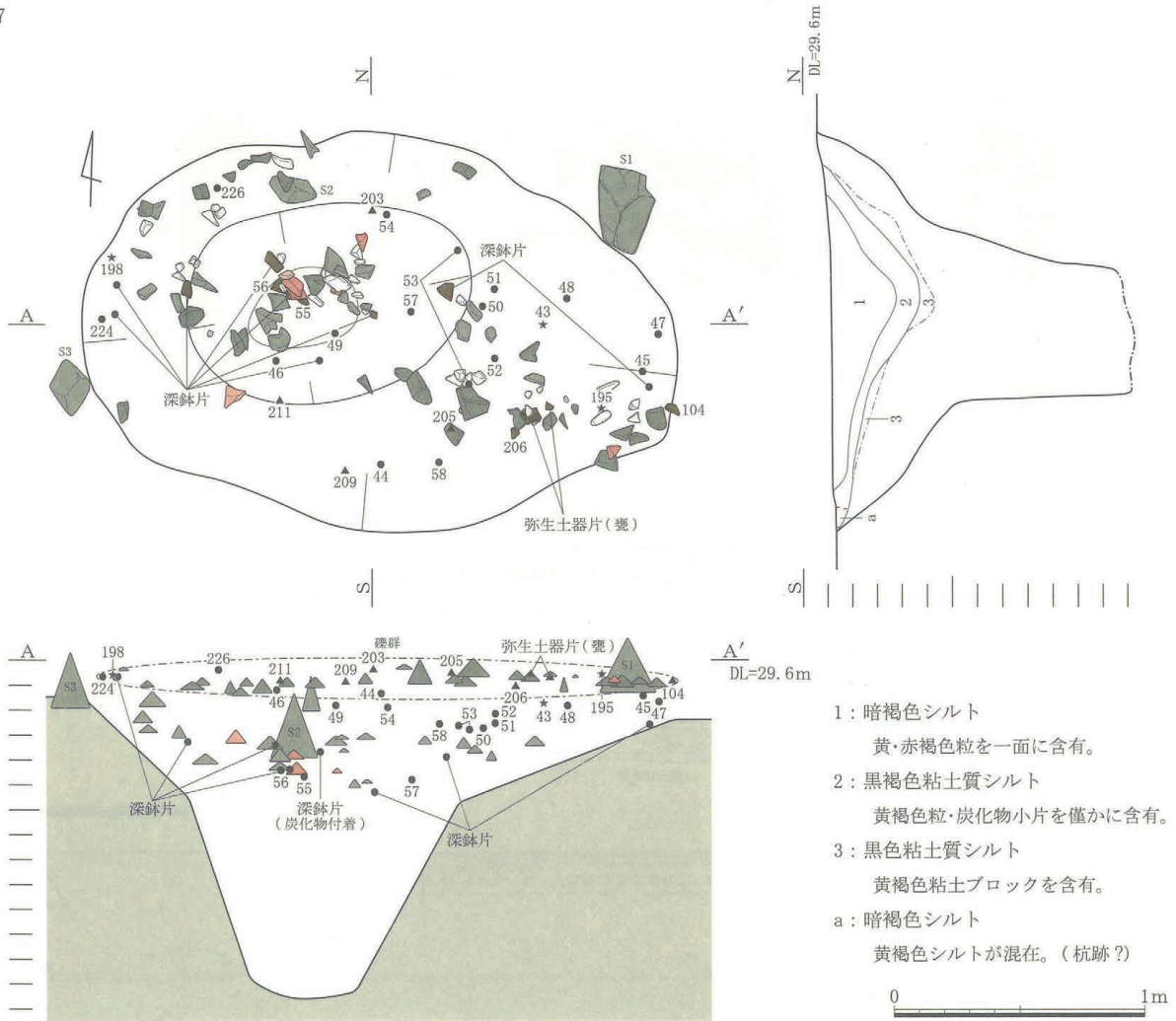
調査区CⅡ-6・7・8・10・11・12・15・16グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は29.43mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径2.41m、短径1.59mを測る。断面形態は漏斗状を呈し、深さは1.2m以上を測る。埋土は1・2層及び3層以下に分層でき、4～20cm大の(垂)角礫を多数包含している。

遺物は条痕を含む縄文土器片約100点を出土し、浅鉢片や山形紋状の沈線、内面にお焦げ状の炭化物が付着した土器片などがみられる。弥生土器の可能性が考えられる土器片も12点出土しており、摩耗したもののや2条沈線を施した土器片など、本遺構周辺に散布する弥生前期土器の出土状況の影響が予想される。他に炭化物小片を十数点出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(46～64)、浅鉢(45・65)及び石鏃(43)であるが、検出面で取上げた遺物は包含層出土の可能性を含んでいる。

本遺構は底面下層から湧水を確認しており、埋没した旧自然流路(溪水)跡の伏流水など地下水位が高い場所を選地していると考えられる。肩部や遺構内にやや大きめの礫(S1～3)を検出しているなど類似した事例から西日本に通有するとされる湿地式貯蔵穴の可能性も考慮されるが、堅果類及び加工材等の残存は確認しておらず、水汲み状遺構⁽³⁾の可能性も含めて慎重な検討が求められる。

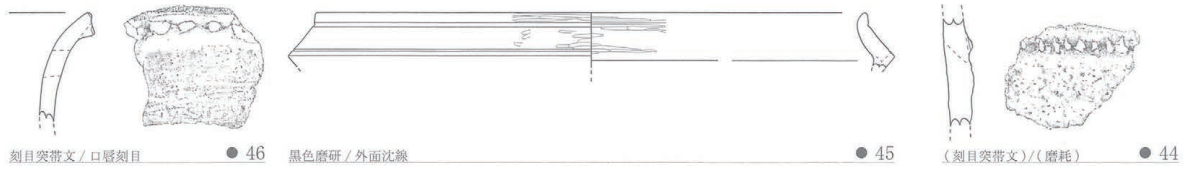


SX7

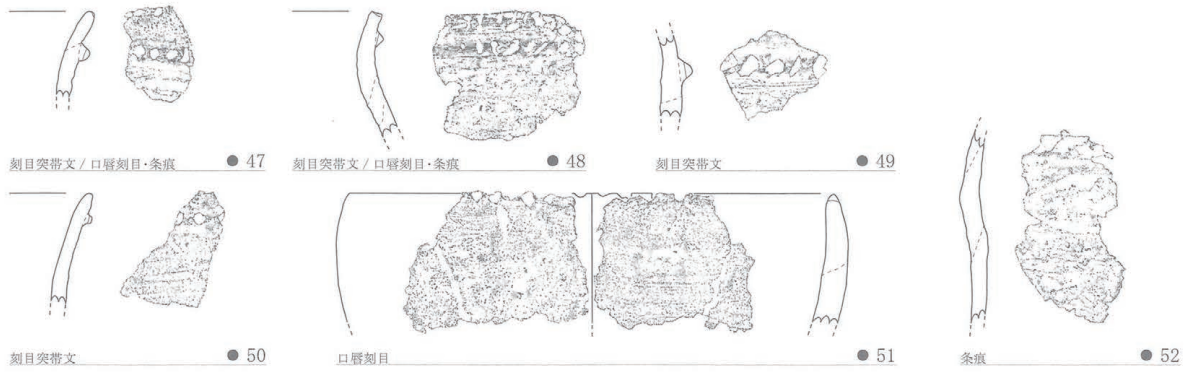


第 16 図 SX7 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/30) 出土遺物実測図 1 (S=4/5)

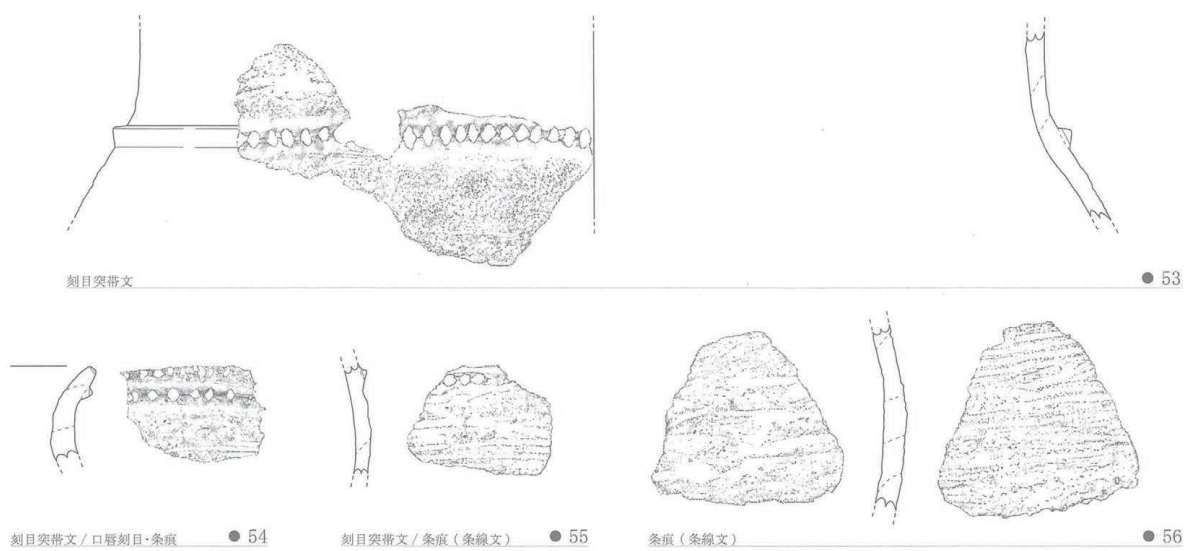
検出面出土遺物（深鉢：46 浅鉢：45）



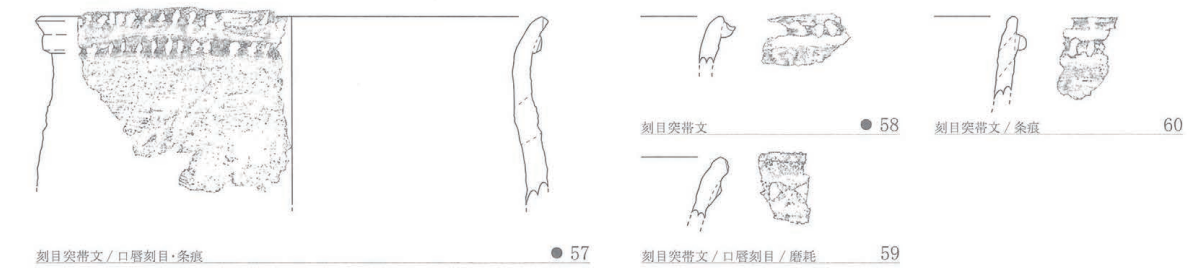
1層出土遺物（深鉢：47～52）



2層出土遺物（深鉢：53～56）



3層出土遺物（深鉢：57～60）



出土層位不明遺物（深鉢：61～64 浅鉢：65）



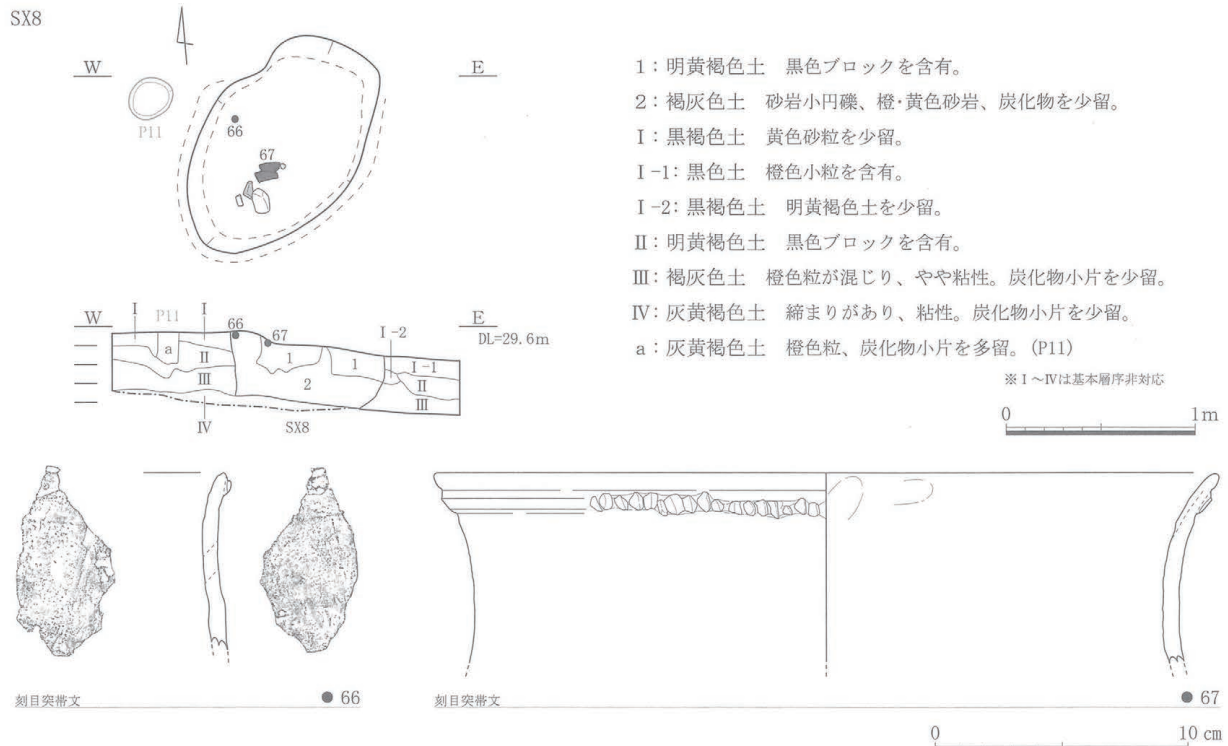
0 10 cm

第 17 図 SX7 出土遺物実測図 2(S=1/3)

S X 8 (第 18 図) 縄文晩期後半

調査区BⅡ-13・14/ BⅢ-1・2グリッドに位置する。検出高は29.51mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、現状では長径1.31m、短径0.81mを測る。断面形態は箱形状で深さは32cmを測るが、底面の検出は不明瞭である。埋土は明黄褐色土(1層)及び褐灰色土(2層)であり、上位層に礫の包含がみられる。

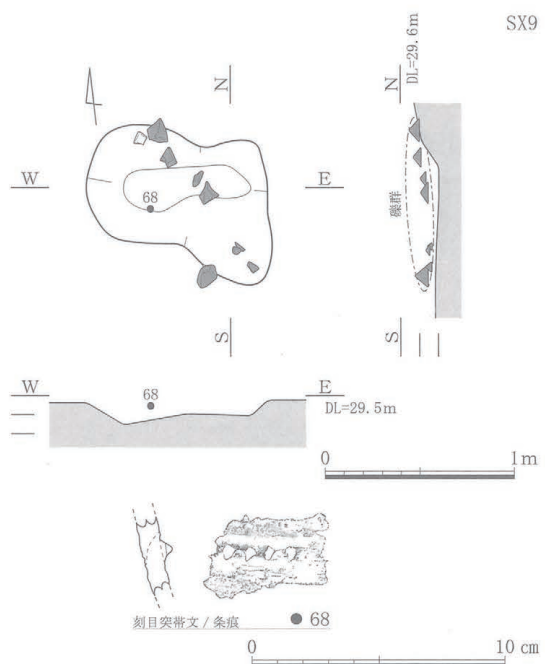
遺物は条痕を含む縄文土器片12点と、弥生土器と思われる摩耗した土器片3点を出土している。遺物の多くは上層から出土しており、縄文土器片には内面にお焦げ状の炭化物が付着した遺物もみられる。他に炭化物小片を数点出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(66・67)である。



S X 9 (第 18 図) 縄文晩期後半

調査区BⅡ-15/ BⅢ-3グリッドに位置する。礫群下層から検出し、検出高は29.45mを測る。平面形態は不整形形状を呈し、長径0.95m、短径0.62~0.76mを測る。断面形態は皿状を呈し、深さは5~10cmを測る。形状から切り合い関係の可能性が考えられる。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は条痕を含む縄文土器片4点と、弥生土器の可能性が考えられる土器片1点を出土しており、縄文土器片には浅鉢片もみられる。他にサヌカイト剥片1点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(68)である。



第 18 図 SX8・9 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

S X 13 (第 21 図)

調査区BⅣ-1・2・5・6グリッドに位置する。南側は石垣造成により旧態を存していない。礫群下面から検出し、検出高は29.15mを測る。平面形態は不整形状を呈し、現状で径0.49mを測る。断面形態は台形状を呈するが、ピット状の落ち込みを検出しており、深さは7~21cmを測る。埋土は上・下層に分層でき、形状から切り合い関係の可能性も考えられる。

遺物は1層(底面)からナゲ調整を施した縄文土器(深鉢)片1点と、2層から条痕を含む縄文土器片2点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(74)である。

S X 14 (第 21 図)

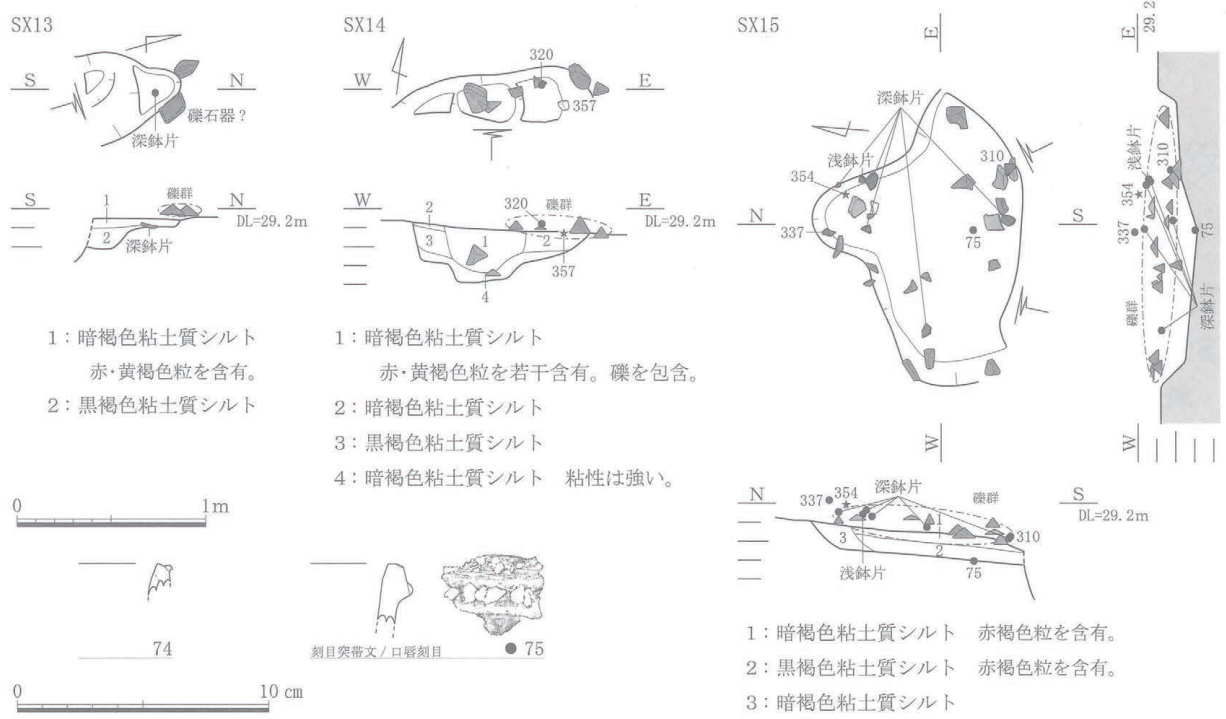
調査区BⅣ-2・3・5・6グリッドに位置する。南側は石垣造成により旧態を存していない。礫群下面から検出し、検出高は29.09mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、現状では長径1.06m、短径0.29mを測る。断面形態は台形状を呈するが、礫を包含したピット状の落ち込みを検出しており、深さは16~24cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調とし、形状から切り合い関係の可能性も考えられる。

遺物は縄文土器片1点と、ハケ調整を施した弥生土器片1点を出土している。

S X 15 (第 21 図)

調査区BⅣ-3・4グリッドに位置する。南側は石垣造成により旧態を存していない。礫群下面から検出し、検出高は29.08mを測る。平面形態は不整形状を呈し、現状では長径1.54m、短径1.11mを測る。断面形態は皿状で深さは11cmを測り、底面から7cm大の角礫(粗粒砂岩)を検出している。埋土は1・2層及び3層に分層でき、形状から切り合い関係の可能性も考えられる。

遺物は条痕を含む縄文土器片3点と、弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器片4点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(75)である。



第 21 図 SX13・14・15 平面・セクション・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

S X 17 (第 22 図)

調査区CⅢ-14・15・16/CⅣ-1・2・3・4グリッドに位置する。南側は石垣造成により旧態を存していない。礫群下面から検出し、検出高は29.09mを測る。S X 16と切り合い関係にある。平面形態は楕円形状を呈し、現状で長径3.97m、短径0.97mを測る。断面形態は皿状で深さは9cmを測り、7~13cm大の角礫(粗粒砂岩)を包含している。埋土は赤褐色粒を含有する暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は条痕を含む縄文土器片36点と弥生土器の可能性が考えられる土器片18点を出土しており、縄文土器片には浅鉢片もみられ、弥生土器片の多くは摩耗している。他にサヌカイト剥片を1点出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(80~84)である。

形状や立地及び礫の産出状況などから、下段(Ⅱ区)への漸移部(自然傾斜面)の可能性を残している。

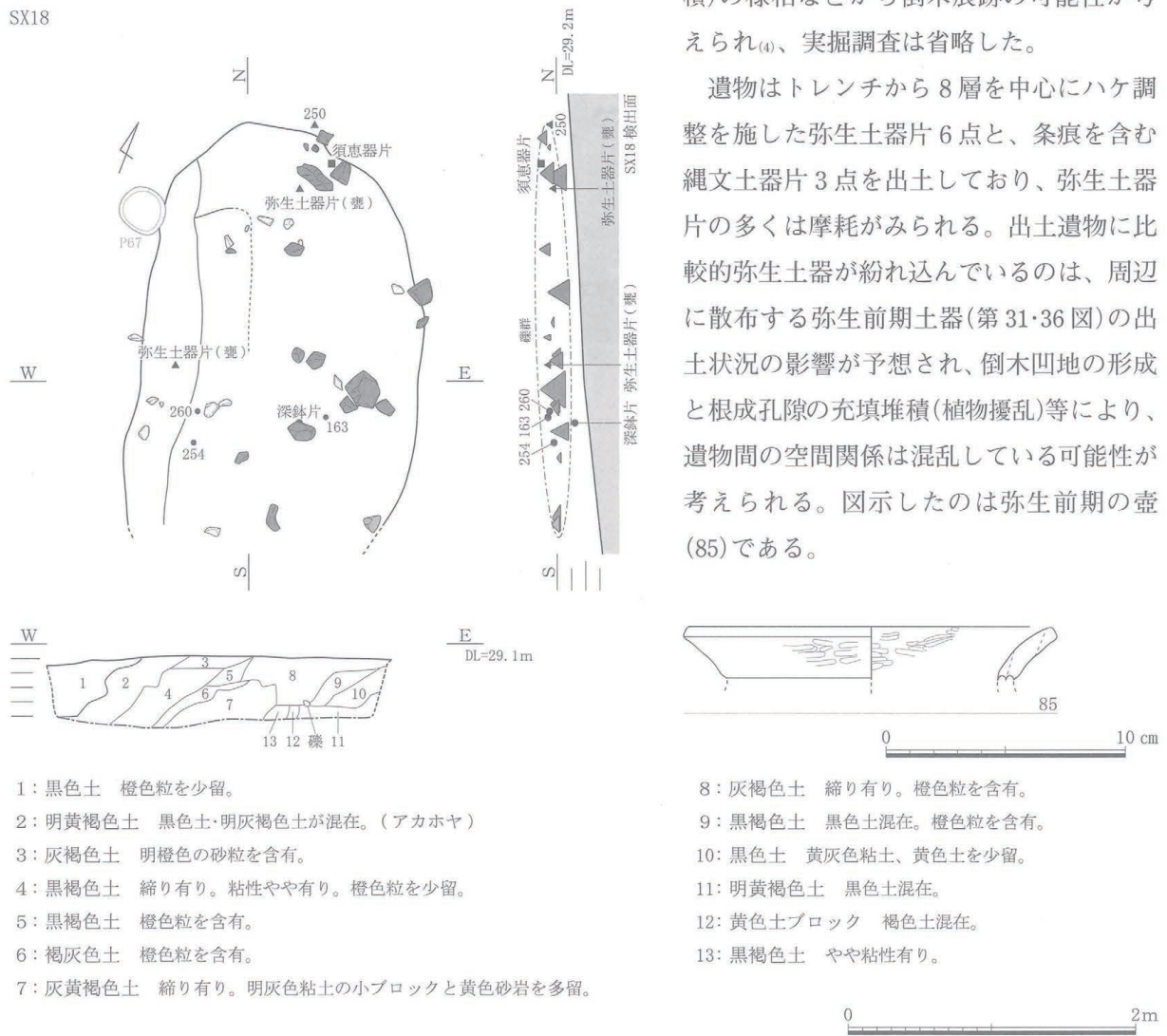
S X 18 (第 23 図) 倒木痕跡

調査区CⅢ-4・8・12・16/DⅢ-1・5・6・9・10グリッドに位置する。南端は大岩(石垣造成)により未検出である。礫群下面から検出し、検出高は29.05mを測る。ピット状遺構(P67)と切り合い関係にある。平面形態は楕円形状を呈し、現状で長径3.0m、短径1.92mを測る。本遺構は検出状況や土層断面(埋没状堆積)の様相などから倒木痕跡の可能性が考

えられ⁽⁴⁾、実掘調査は省略した。

遺物はトレンチから8層を中心にハケ調整を施した弥生土器片6点と、条痕を含む縄文土器片3点を出土しており、弥生土器片の多くは摩耗がみられる。出土遺物に比較的弥生土器が紛れ込んでいるのは、周辺に散布する弥生前期土器(第31・36図)の出土状況の影響が予想され、倒木凹地の形成と根成孔隙の充填堆積(植物擾乱)等により、遺物間の空間関係は混乱している可能性が考えられる。図示したのは弥生前期の壺(85)である。

SX18



第 23 図 SX18 セクション図・他 (S=1/50) 出土遺物実測図 (S=1/3)

ピット状遺構(P)

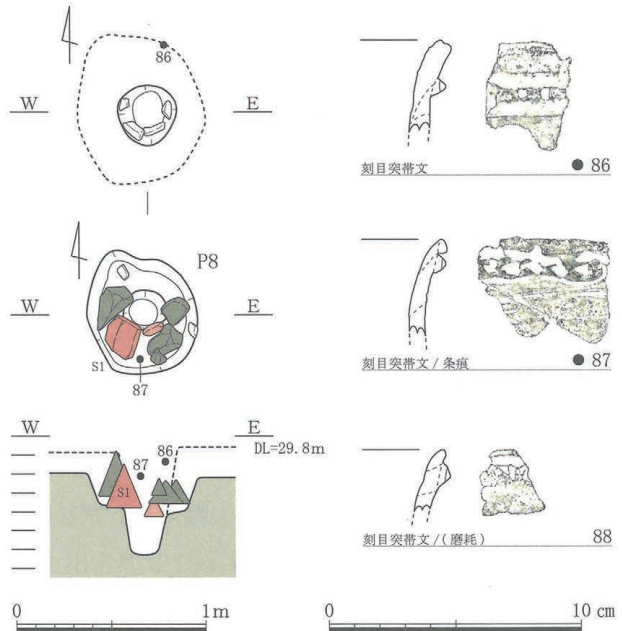
I区においてピット状遺構は時期不明を含めて約80個を検出したが、企劃性(掘建柱建物跡・平地式住居遺構・環状柱穴列等)は認められなかった。遺物の出土が確認できたものは約30個であり、何れも縄文又は弥生土器片等を僅かに含む程度である。遺構は切り合い関係も多く、縄文晩期後半から弥生前期前半を中心とした遺構が混在している状態である。

本報告書では特徴的な形態や図化し得る遺物を出土した遺構について掲載している。

P 8 (第24図) 縄文晩期後半

調査区D I-10・14グリッドに位置する。調査区北端に所在し、検出高は29.73mを測る。平面形態は歪な楕円形状を呈し、長径67cm、短径57cmを測る。断面形態は箱形状で深さは32~56cm(柱痕)を測る。埋土は赤・黄褐色粒を含有する暗褐色粘土質シルトを基調とするが、上面で検出した柱痕部分は灰褐色を呈する。底面から8~27cm大の亜円~垂角礫(粗粒砂岩等)を根石状に配している。S1は亜円礫を方形状に打割しており、被熱の痕跡を有している。

遺物は条痕を含む縄文土器片13点と炭化物小片を10点程出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(86~88)である。

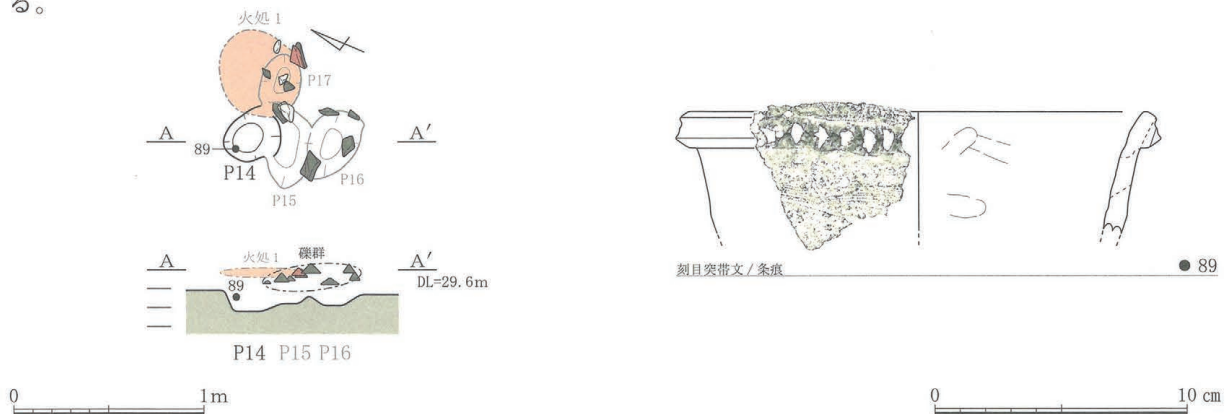


第24図 P8 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

P 14 (第25図) 縄文晩期後半

調査区B II-12グリッドに位置する。礫群下面から検出し、検出高は29.49mを測る。ピット状遺構(P15・17)と切り合うが先後関係は不明である。平面形態は楕円形状を呈し、長径30cm、短径24cmを測る。断面形態は台形状で深さは11cmを測る。埋土は赤褐色粒を含有する暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は条痕を含む縄文土器片3点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(89)である。



第25図 P14 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

P 29 (第 26 図) 縄文晩期

調査区CII-4グリッドに位置する。検出高は29.58mを測る。平面形態は楕円形状を呈し、長径47cm、短径28cmを測る。断面形態は台形状を呈するが、底面からピット状遺構を検出しており、深さは55cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。上面で23cm大の角礫(細~中粒砂岩)を検出しており、P30と状況が類似する。相関した場合の軸方向(対真北平均傾斜度)は現況でN-52°-Wであり、柱間距離は約1.4mを測る。

遺物は条痕を含む縄文土器片2点を出土している。

P 30 (第 26 図) 縄文晩期(後半)

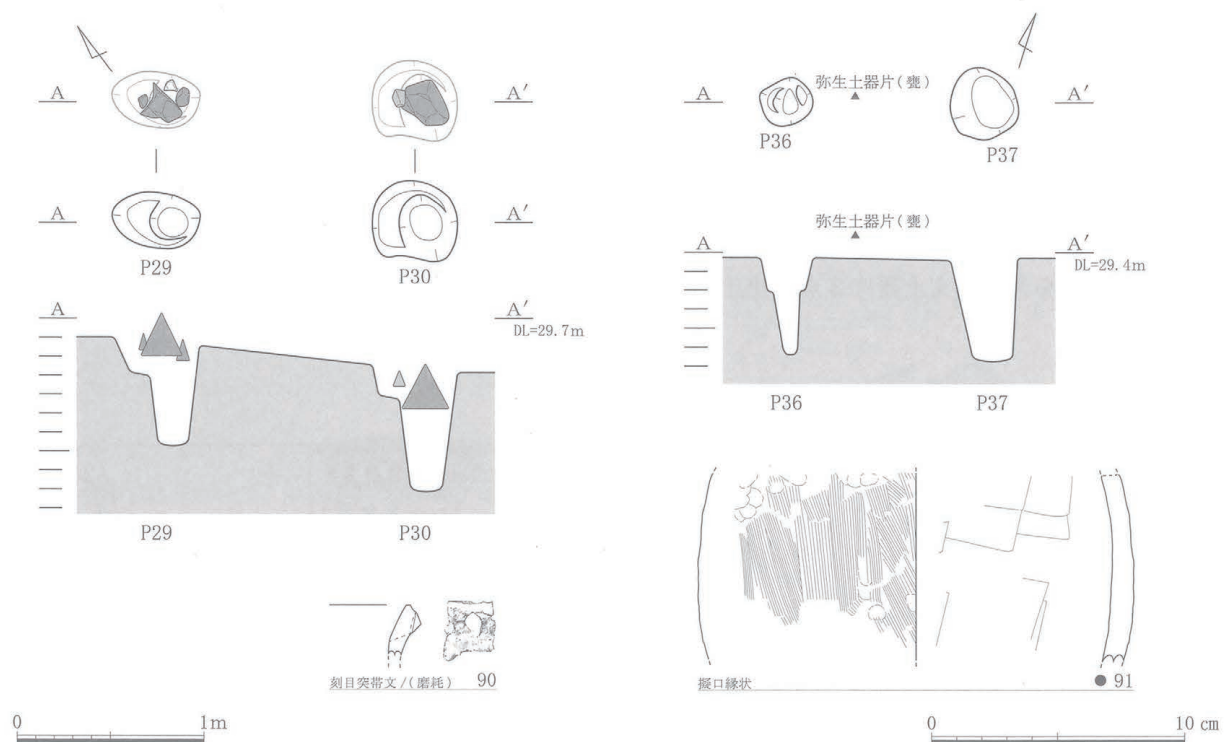
調査区DII-1・2・5・6グリッドに位置する。検出高は29.44mを測る。平面形態は隅丸方形形状を呈し、径45cmを測る。断面形態は台形状を呈するが、庭面から柱痕状のピット状遺構を検出しており、深さは65cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。上面で27cm大の垂角礫(粗粒砂岩)を検出しており、P29と状況が類似する。

遺物は縄文土器片2点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(90)である。

P 36 (第 26 図) 弥生前期前半

調査区CII-12/DII-9グリッドに位置する。検出高は29.38mを測る。平面形態は円形状を呈し、径24~26cmを測る。断面形態は箱形状を呈するが、底面から柱痕状のピット状遺構を検出しており、深さは52cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物はハケ調整を施した弥生土器片3点を出土している。図示したのは遺構最下層位から出土した弥生前期の甕(91)である。



第 26 図 P29・30/36・37 平面・エレベーション図 (S=1/40) 出土遺物実測図 (S=1/3)

P 37 (第 26 図) 弥生前期前半

調査区 DII-5・6 グリッドに位置する。検出高は 29.36m を測る。平面形態は円形状を呈し、径 35~38 cm を測る。断面形態は箱形状で深さは 53 cm を測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

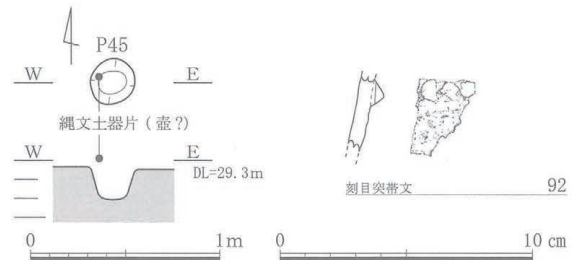
遺物はハケ調整を施した弥生土器片 2 点を出土している。

周辺からは弥生前期前半の遺構・遺物を散見し、本遺構も出土遺物などから当該期の遺構の可能性が考えられる。P36 と相関した場合の軸方向は現況で N-71°-E であり、柱間距離は約 1.1m を測る。

P 45 (第 27 図)

調査区 DII-10 グリッドに位置する。検出高は 29.26m を測る。平面形態は円形状を呈し、径 24 cm を測る。断面形態は台形状で深さは 17 cm を測る。埋土は暗褐色粘土質シルトを基調としている。

遺物は縄文土器片 1 点と弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器片 1 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(92)である。



第 27 図 P45 平面・エレベーション図 (S=1/40)
出土遺物実測図 (S=1/3)

P 70 (第 28 図)

調査区 DIII-10 グリッドに位置する。礫群上面から検出し、検出高は 29.20m を測る。ピット状遺構(P71)と切り合い関係にある。平面形態は楕円形状を呈し、現状で長径 31 cm、短径 20 cm を測る。断面形態は台形状で深さは 14 cm を測る。埋土は黄褐色粒を含有する灰褐色シルトである。

遺物は縄文土器片 1 点と弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器片 1 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(93)であるが、層位的な産状などから混入の可能性も考えられる。

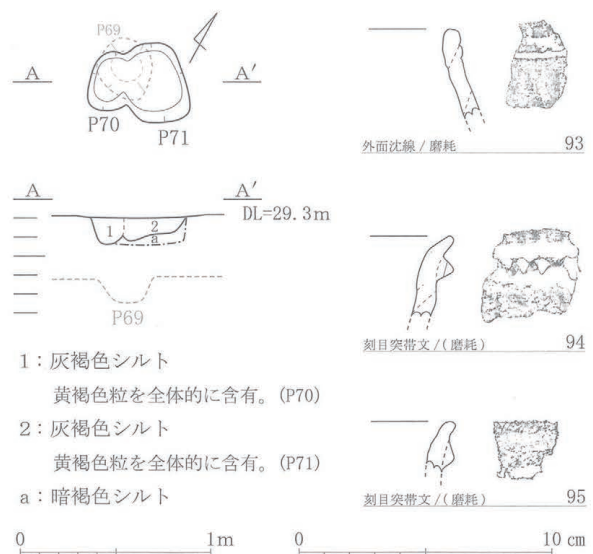
下面からピット状遺構(P69)を検出している。

P 71 (第 28 図)

調査区 DIII-10 グリッドに位置する。礫群上面から検出し、検出高は 29.21m を測る。ピット状遺構(P70)と切り合い関係にある。平面形態は隅丸矩形形状を呈し、現状で長径 43 cm、短径 33 cm を測る。断面形態は台形状で深さは 12 cm を測る。埋土は黄褐色粒を含有する灰褐色シルトである。

遺物は条痕を含む縄文土器片 3 点と弥生土器の可能性が考えられる摩耗した土器片 5 点を出土している。図示したのは縄文晩期と考えられる深鉢(94-95)であるが、層位的な産状などから混入の可能性も考えられる。

下面からピット状遺構(P69)を検出している。



- 1: 灰褐色シルト
黄褐色粒を全体的に含有。(P70)
- 2: 灰褐色シルト
黄褐色粒を全体的に含有。(P71)
- a: 暗褐色シルト

第 28 図 P70・71 平面・セクション図 (S=1/40)
出土遺物実測図 (S=1/3)

遺構番号	形態	規模			検出高 (m)	切合関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物	備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)					
P1	楕円形状	25	16	7	29.65	—	C I-15	縄文土器片 1点	
P2	楕円形状	28	23	45	29.66	—	C I-16	—	
P3	円形状	27	23	15	29.68	—	D I-13	—	
P4	円形状	29	28	10	29.71	—	D I-9・13	—	
P5	円形状	36	32	66	29.67	—	D I-13	土師質土器片(摩耗) 1点 弥生土器片(摩耗) 1点	段部
P6	楕円形状	21	14	14	29.56	—	D I-14	—	段部
P7	円形状	13	11	8	29.46	—	D I-14	—	
P8	不整形	67	57	56	29.73	—	D I-10・14	縄文土器片(条痕) 13点 炭化物小片 10点	根石状配石
P9	円形状	30	28	37	29.61	—	D I-10・11	—	
P10	円形状	24	21	14	29.57	—	A II-15	縄文土器片(浅鉢含) 3点	
P11	円形状	24	21	16	29.55	—	B II-13 B III-1	—	
P12	楕円形状	40	32	5	29.47	—	B II-14	—	礫群下面
P13	楕円形状	42	32	28	29.57	—	B II-10	—	
P14	楕円形状	30	24	11	29.49	P15・17	B II-12	縄文土器片(条痕) 3点	礫群下面
P15	楕円形状	45	22	8	29.50	P14・16・17	B II-16	—	礫群下面
P16	楕円形状	42	27	6	29.47	P15	B II-16	—	礫群下面
P17	楕円形状	28	21	6	29.51	P14・15	B II-12	—	火処1下面
P18	楕円形状	41	(31)	11	29.58	P19	B II-8 C II-5	—	
P19	楕円形状	31	25	15	29.57	P18	C II-5	縄文土器片(条痕) 1点	
P20	楕円形状	31	21	6	29.50	P21	C II-9	—	礫群下面
P21	楕円形状	(51)	18	5	29.51	P20・22	C II-9	—	礫群下面
P22	楕円形状	36	28	2	29.47	P21	C II-13	—	礫群下面
P23	楕円形状	29	24	19	29.63	—	C II-1・5	—	
P24	楕円形状	27	19	11	29.60	—	C II-5	—	
P25	円形状	31	28	16	29.44	—	C II-13	—	
P26	円形状	31	29	20	29.43	—	C II-13・14	弥生土器片(摩耗) 1点	
P27	不整形	35	30	18	29.26	SX5	C II-14	—	
P28	円形状	22	19	29	29.65	—	C II-4	縄文土器片 1点 弥生土器片(摩耗) 1点	
P29	楕円形状	47	28	55	29.58	—	C II-4	縄文土器片(条痕) 2点	礫検出
P30	隅丸方形	45	44	65	29.44	—	D II-1・5	縄文土器片 2点	礫検出
P31	楕円形状	32	25	11	29.36	—	D II-9・13	縄文土器片(浅鉢含) 4点	
P32	楕円形状	17	7	9	29.54	—	D II-1	—	
P33	不整形	46	43	26	29.50	—	D II-1	—	切り合い?
P34	円形状	27	23	17	29.22	—	D II-13	—	
P35	円形状	31	29	43	29.27	—	D II-13・14	—	
P36	円形状	26	24	52	29.38	—	C II-12 D II-9	弥生土器片(ハケ調) 3点	段部
P37	円形状	38	35	53	29.36	—	D II-5・6	弥生土器片(ハケ調) 2点	
P38	隅丸長方形	44	34	36	29.32	—	D II-9	縄文土器片(条痕) 3点	
P39	円形状	21	19	19	29.43	—	D II-2	縄文土器片(条痕) 1点	
P40	円形状	19	17	14	29.42	—	D II-2	—	
P41	楕円形状	43	27	8	29.42	—	D II-6	縄文土器片 1点	
P42	円形状	24	(18)	6	29.34	P43	D II-10	—	
P43	円形状	38	35	13	29.37	P42	D II-6・10	—	
P44	楕円形状	32	26	12	29.64	—	D II-2	—	
P45	円形状	24	24	17	29.26	—	D II-10	縄文土器片 1点 弥生土器片(摩耗) 1点	
P46	楕円形状	25	21	7	29.25	—	D II-11	弥生土器片 3点	

第1表 I区 ピット状遺構計測表

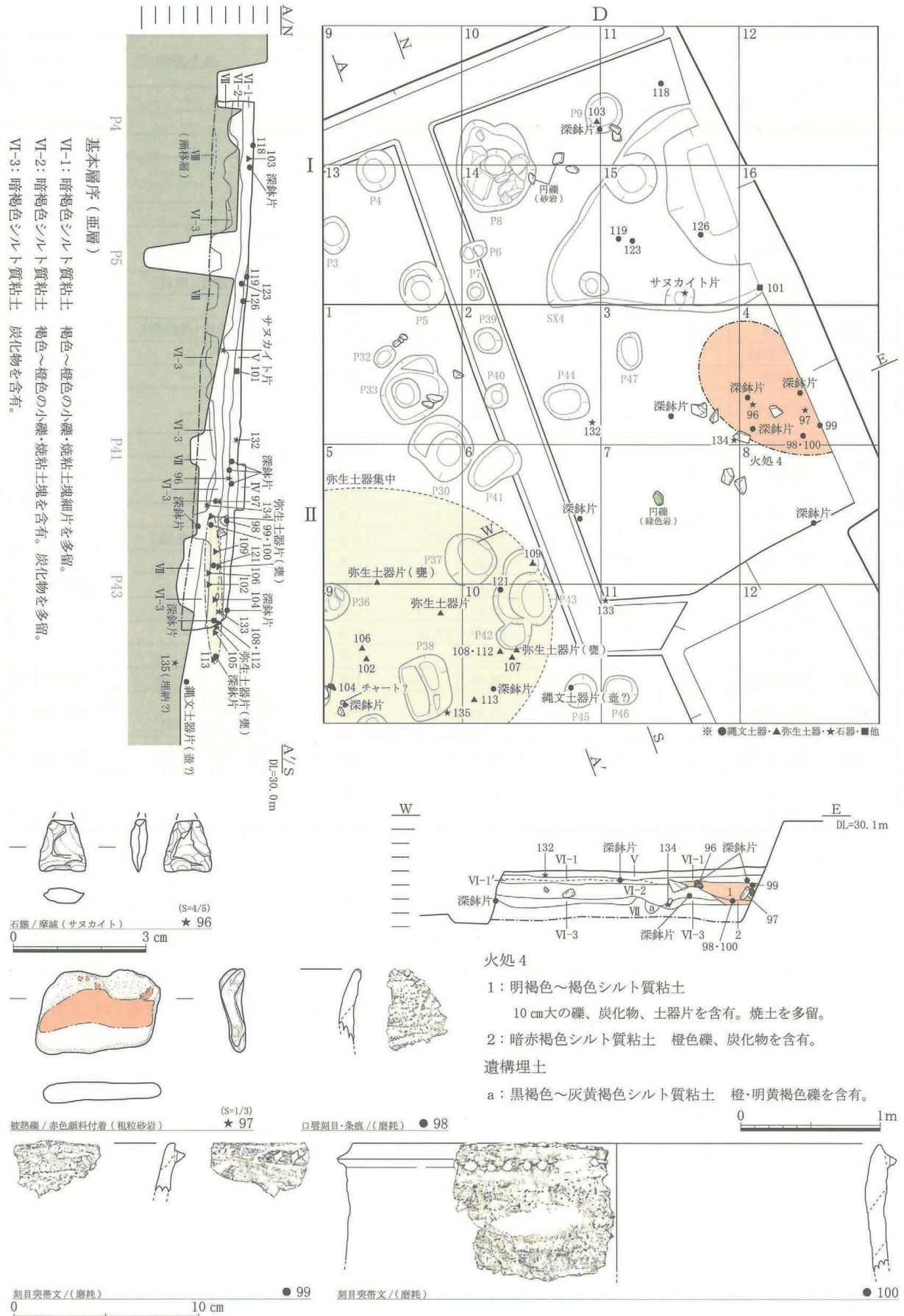
遺構番号	形態	規模			検出高 (m)	切合関係	遺構位置 (グリッド)	出土遺物	備考
		長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)					
P47	楕円形状	27	18	9	29.49	—	DII-3	—	
P48	楕円形状	30	24	10	29.21	—	DII-15	—	
P49	円形状	26	23	16	29.20	—	DII-15	—	
P50	円形状	24	23	9	29.57	—	AIII-3	—	
P51	円形状	37	34	24	29.35	—	BIII-5・9	—	段部
P52	楕円形状	51	35	23	29.39	—	BIII-5	縄文土器片 2点 炭化物小片 1点	段部
P53	不整形	55	52	23	29.36	—	BIII-5・6	弥生土器片(摩耗) 1点	
P54	円形状	26	24	23	29.36	SK3	BIII-7	—	
P55	円形状	39	36	19	29.23	—	BIII-7・11	縄文土器片(浅鉢舎) 5点	
P56	楕円形状	19	15	20	29.14	—	BIII-15	—	礫群下面
P57	円形状	23	19	17	29.12	—	BIII-15・16	—	礫群下面
P58	楕円形状	45	31	8	29.22	—	BIII-8	—	段部
P59	円形状	29	27	10	29.21	—	BIII-8	縄文土器片 2点	
P60	円形状	45	39	22	29.17	—	BIII-8・12	弥生土器片 3点	段部
P61						SX11	CIII-5・9	—	
P62	楕円形状	57	42	15	29.27	SX5	CIII-2	縄文土器片 4点	段部
P63	不整形	32	25	8	29.26	SX5	CIII-2	縄文土器片(条痕) 1点	
P64	楕円形状	32	24	6	29.25	—	CIII-3	—	
P65	楕円形状	28	23	4	29.19	—	CIII-7	—	礫群下面
P66	楕円形状	41	36	6	29.21	—	CIII-3	—	
P67	円形状	33	31	6	29.19	SX18	CIII-3・7	—	
P68	円形状	31	28	6	29.17	—	DIII-1	—	
P69	楕円形状	34	29	12	28.88	—	DIII-10	—	P70・71下面
P70	楕円形状	31	(20)	15	29.20	P71	DIII-10	縄文土器片 1点 弥生土器片(摩耗) 1点	礫群上面
P71	隅丸長方形	43	(33)	16	29.21	P70	DIII-10	縄文土器片(条痕) 3点 弥生土器片(摩耗) 5点	礫群上面
P72	円形状	20	17	19	29.10	—	DIII-4	—	
P73	楕円形状	19	13	5	29.13	—	BIV-2	—	礫群下面

3. 包含層出土遺物

本調査区(I区)ではV~VI層から口縁・底部を含む縄文土器片約2,100点、弥生土器片約300点、土師質土器片約100点、須恵器片3点の他、石器30点、サヌカイト剥片約80点を出土している。遺物包含層は分層し難い単層群として扱い可能な範囲で亜層を設定したが、層位による相対的な出土状況を把握できる資料は看取できなかった。本項では任意の区画(グリッド)毎に出土遺物の概況を報告し、若干の所見を述べるに留め、出土地点の不明瞭な遺物は当該区画を中心に出土した包含層一括資料とした。

調査区北東端の包含層遺物出土状況(第29・30区)

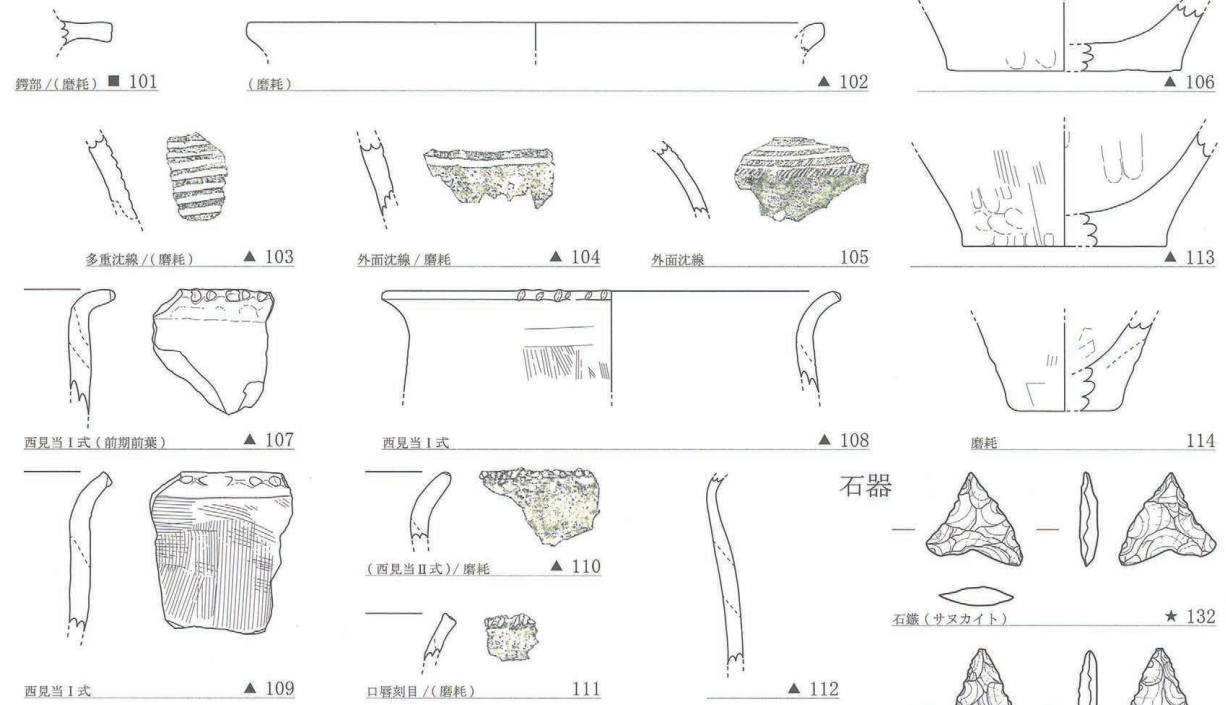
本項はI区の遺構・遺物の遺存状態を検討し、調査範囲を東側へ拡張した区画及び東方北側に該当する包含層より出土した遺物を中心に報告している。拡張区では比較的上層より縄文土器片の出土を確認し、包含層中より地床炉と考えられる焼土痕(火処4)を検出するなど、縄文晩期後半とされる生活面にも累重した占拠層準が窺える。また部分的に弥生前期土器片(遠賀川式)を比較的多く出土する箇所が認められたが、全体的には縄文晩期土器片と混在した出土状況を呈している。135は形状や出土状況から搬入した河床礫(頁岩)を用いた石剣(陽基石)と解されるが、両端に敲打痕を持つ叩石の可能性が有力である⁽⁵⁾。尚、拡張区南端は下層確認のためVII層(黒ボク土)まで掘削したが、遺構・遺物は確認できなかった。



第 29 図 I 区包含層 (北東端) 遺物出土状況図 (S=1/40) 火処 4 出土遺物実測図 (S=1/3・4/5)

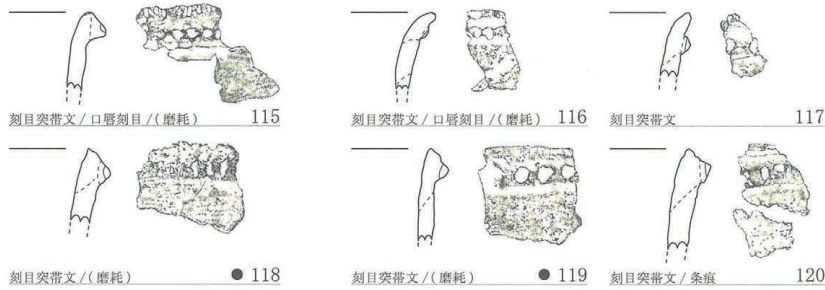
土師器
(羽釜: 101)

弥生土器 (壺: 102 ~ 106 甕: 107 ~ 114)

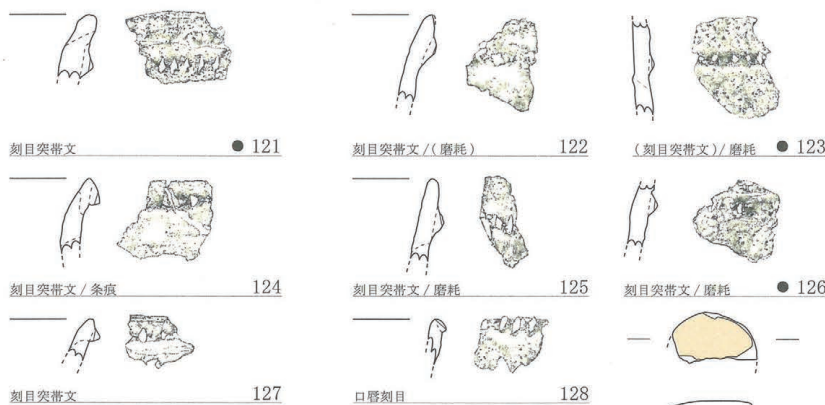


縄文土器

V層出土遺物 (深鉢: 115 ~ 120)



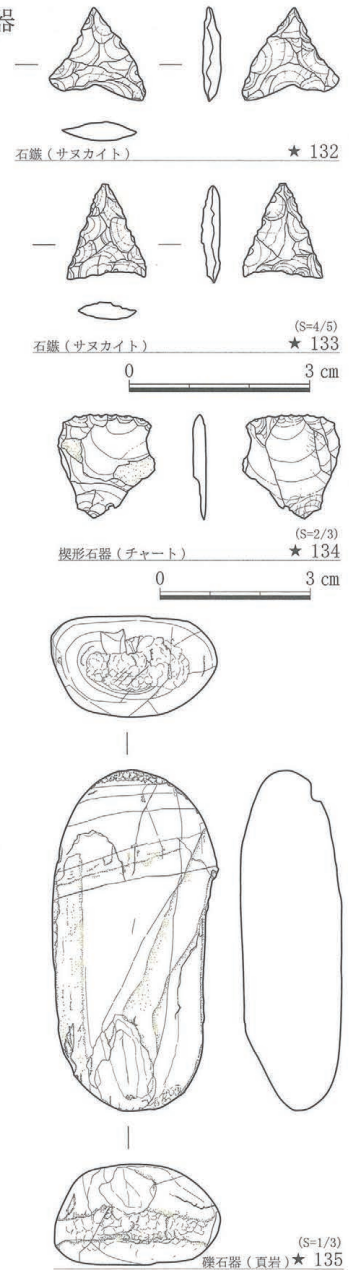
VI-1・2層出土遺物 (深鉢: 121 ~ 128)



VI-3層出土遺物 (深鉢: 129・130 土製品: 131)

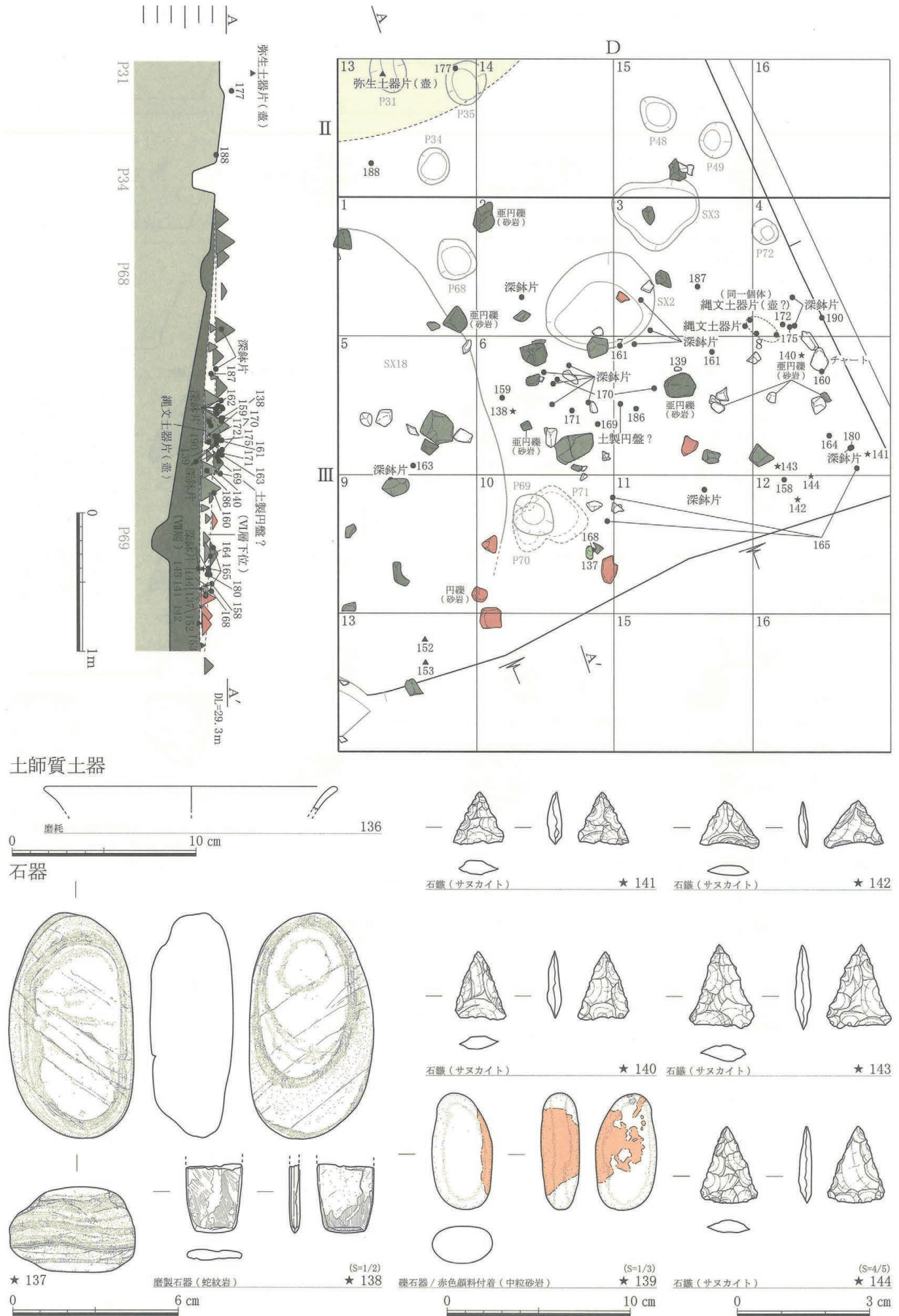


石器



0 10 cm

第30図 I区包含層(北東端)出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・4/5)



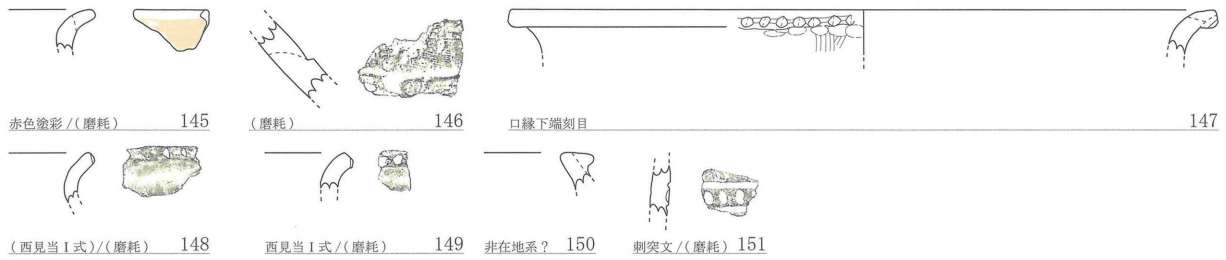
第31図 I区包含層(南東端)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・4/5)

調査区南東端の包含層遺物出土状況 (第31・32図)

本項はⅠ区南東端に該当する包含層から出土した遺物を中心に報告しているが、東端は重機によるトレンチ開削により、出土状況を把握し得ていない。当遺跡では広範囲から礫群と伴出して多数の土器片を確認している。礫群は部分的に累重して検出しており、産状(累積性)から造営に占拠層準(上位・下位)を看取できるが、出土遺物はほぼ時期を重ね、縄文晩期土器片と弥生前期土器片が混在する状況呈している。また土師質土器片等は本区画を含む調査区東側からⅤ層を中心に比較的多く出土しているが、殆どに著しい摩耗がみられる。南側は下層確認のためⅦ層(黒ボク土)まで掘削を試みたが、遺構・遺物は確認できなかった。P69は検出状況からP70・71とは異なる遺構残片の可能性が考えられる。

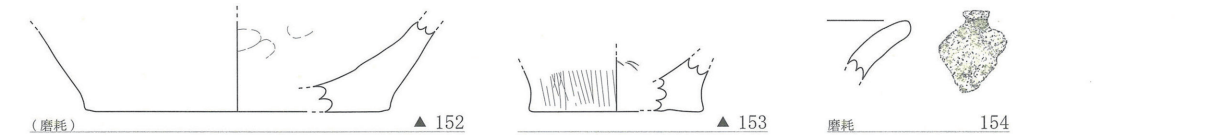
弥生土器

包含層上位(Ⅴ~Ⅵ層)出土遺物(壺:145・146 甕:147~151)



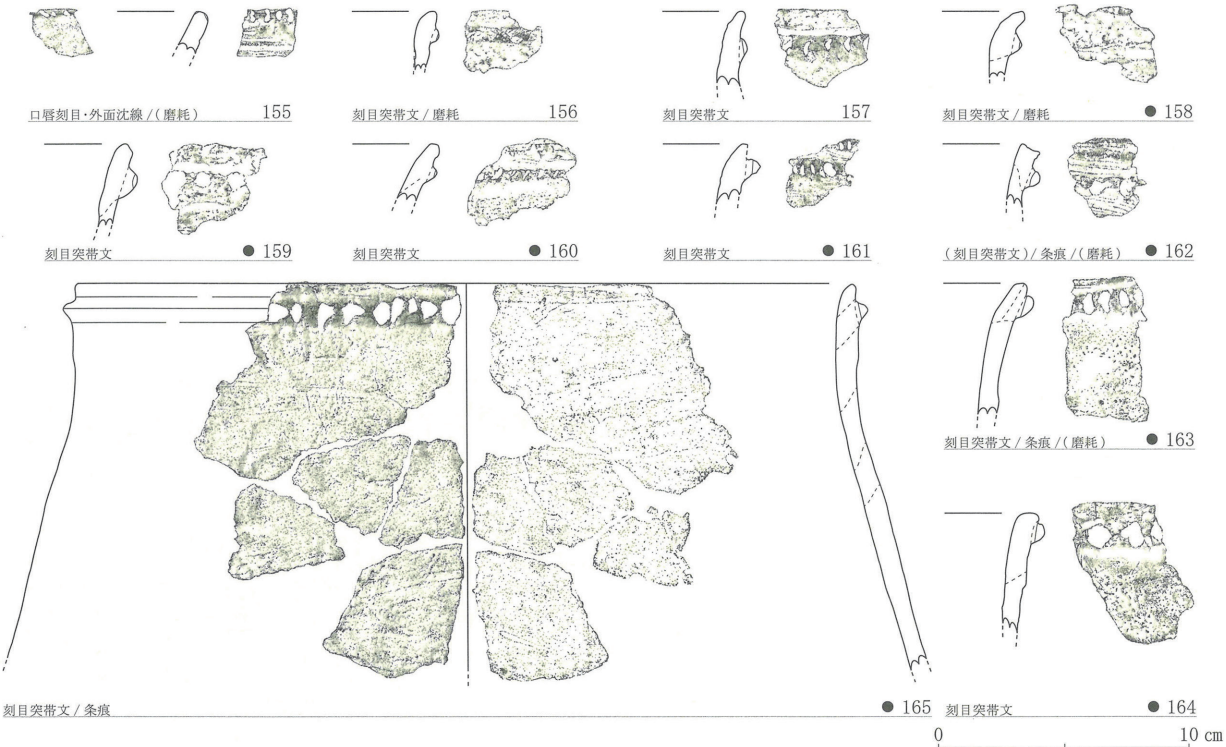
包含層下位(Ⅵ層)出土遺物(壺:152 甕:153)

出土層位不明遺物(甕:154)



縄文土器

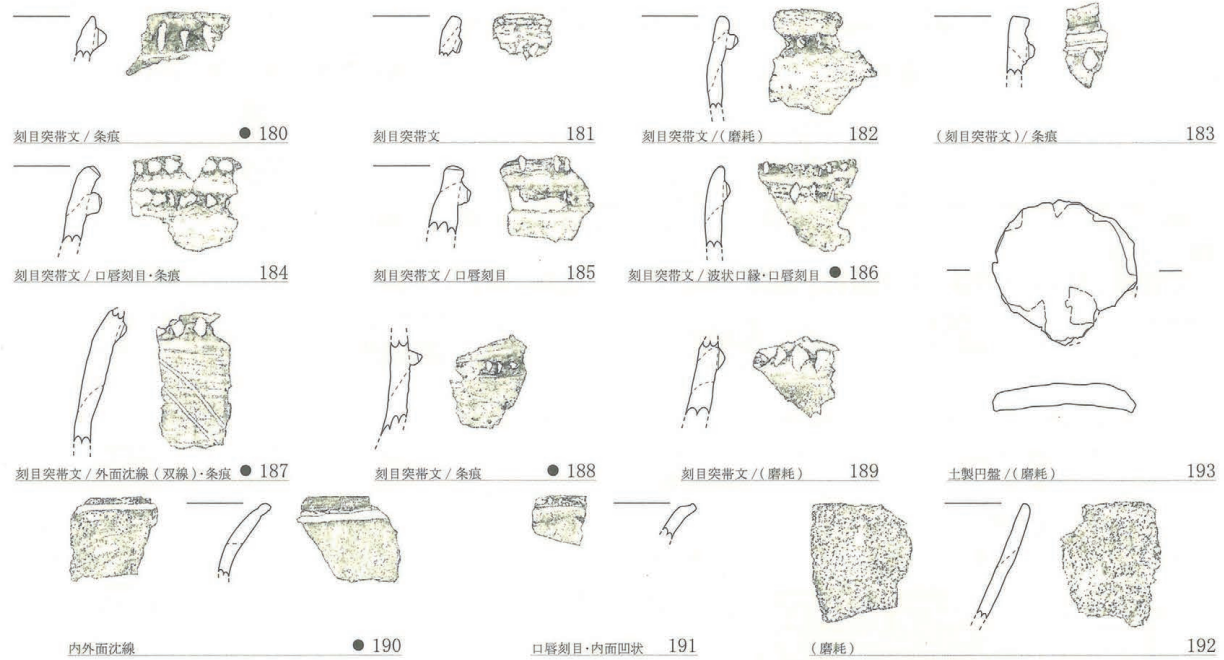
包含層上位(Ⅴ~Ⅵ層)出土遺物(深鉢:155~176 浅鉢:177~178 壺:179)



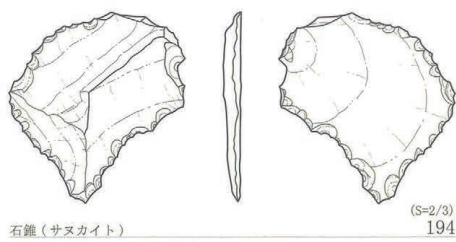
第32図 Ⅰ区包含層(南東端)出土遺物実測図2(S=1/3)



包含層下位 (VI層) 出土遺物 (深鉢: 180 ~ 189 浅鉢: 190 ~ 192 土製品: 193)



0 10 cm



石鏃集中分布域



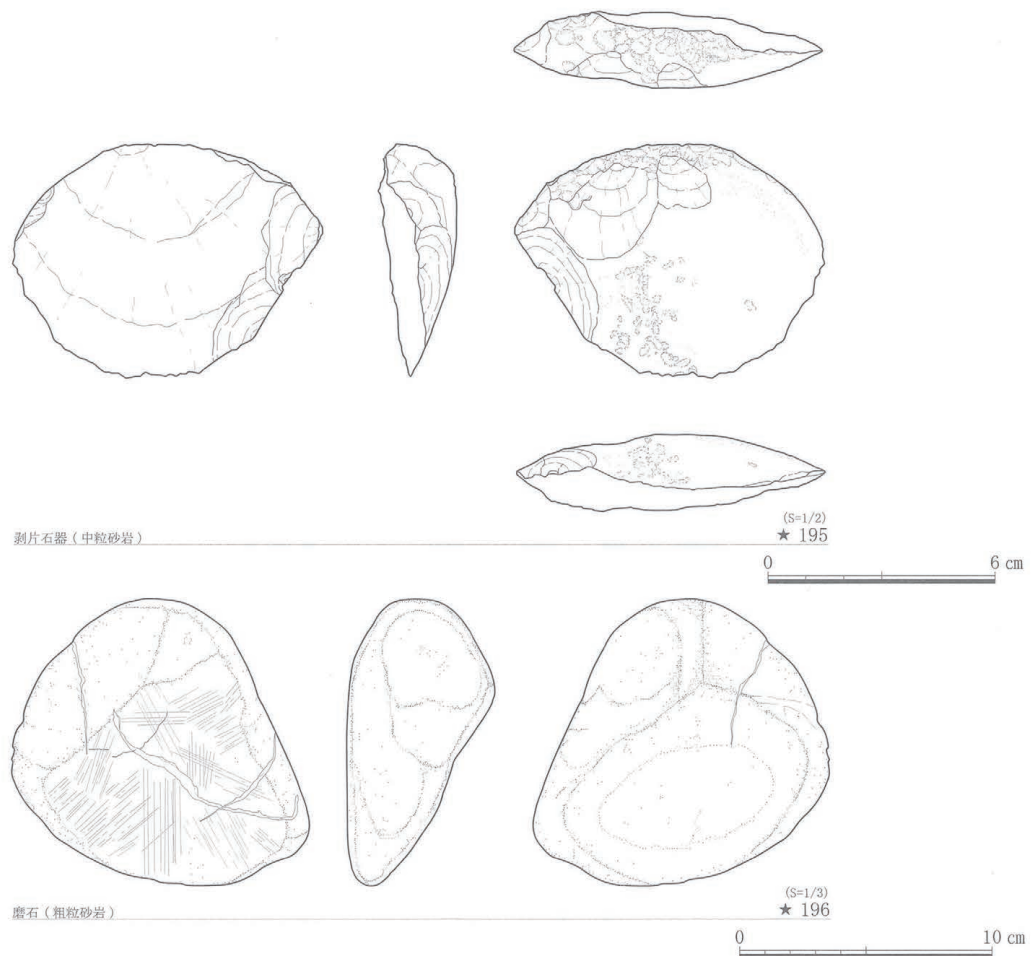
第33図 I区包含層 (南東端) 出土遺物実測図 3 (S=1/3・2/3)

調査区中央北側の包含層遺物出土状況 (第 34 ~ 36 図)

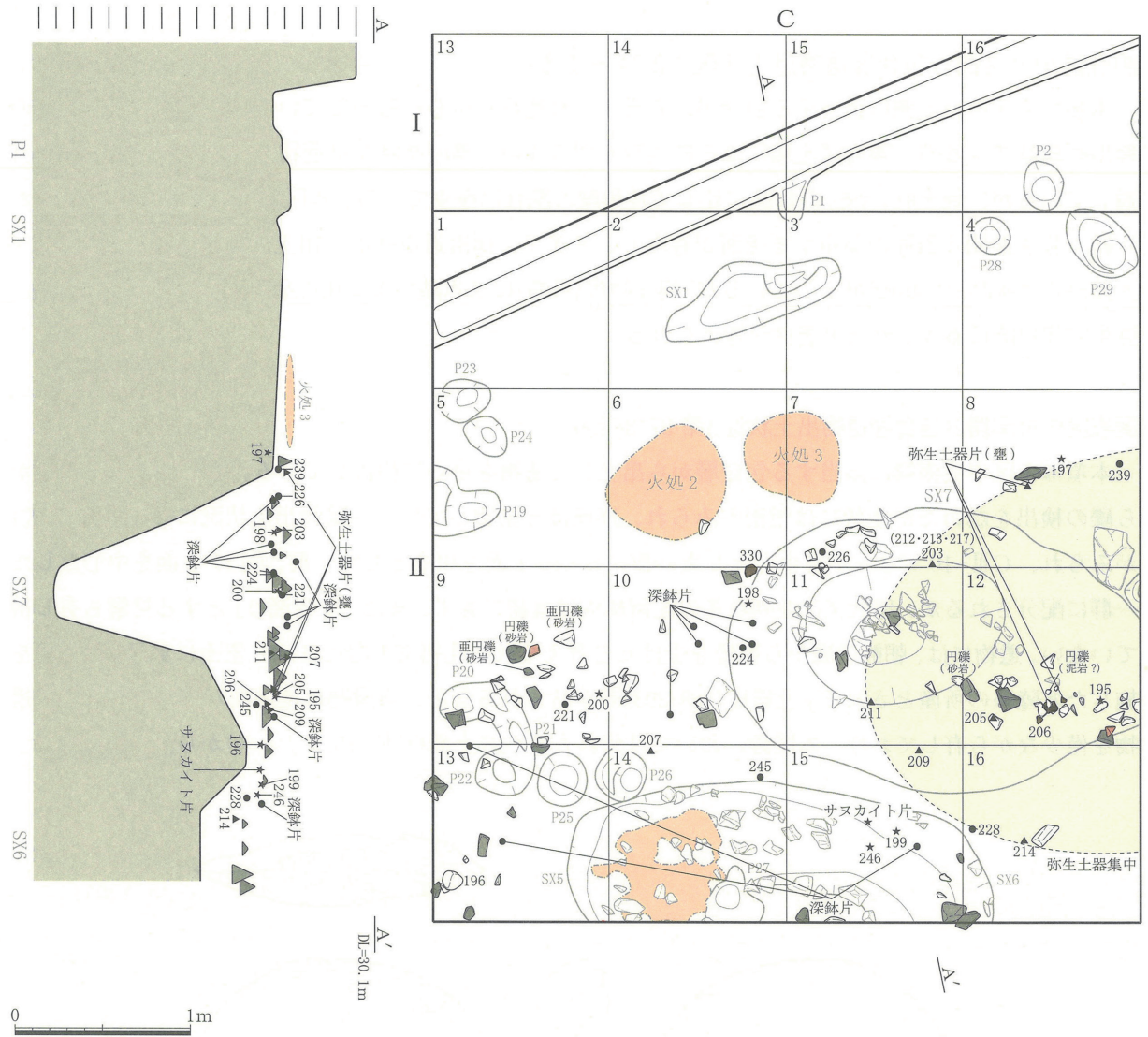
本項はⅠ区中央北側に該当する包含層から出土した遺物を中心に報告している。本区画からも礫群の検出を確認できるが、調査区北端にはその残滓を認めない。礫の産状及び遺物の出土状況は他区画と共通しているが、焼土痕(火処)の検出に比して被熱礫の割合は僅少である。本区画は隣接区画(第 29 図)から続く弥生前期土器片の集中する箇所が存在し、S X 7 上面附近を中心に出土がみられる。また S X 6 上面からは水晶片(246)が出土しているが、縄文時代(晩期)には水晶による加工品(勾玉等)の類例は無く⁽⁶⁾、弥生時代以降に搬入された可能性が考えられる。

調査区中央南側の包含層遺物出土状況 (第 37・38 図)

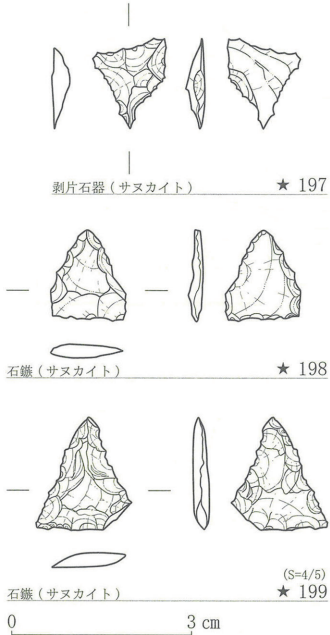
本項はⅠ区中央南側に該当する包含層から出土した遺物を中心に報告している。本区画はほぼ全域から礫の検出を認めたが産状には粗密がみられ、南側ほど累重している。遺物出土状況にも集中(収束性)がみられ、CⅢ-10 グリッドを中心とした一群、S X 16 上面を中心とした一群、同 17 上面を中心とした一群に配分されるが、環状又は並列状等の配置構成は確認できず、また「土器溜り」とする見解も有し得ていない。遺物には、朝鮮半島から影響を受けたと考えられる孔列文土器(281)や、器面に刻目(沈線状)を施した北陸系の所産とされる⁽⁷⁾土器片(288・293)等が含まれるなど、当遺跡は地域間の交流を窺わせる遺物を僅少なながら有しており、本区画においては何れも S X 16 上面(CⅢ-13 グリッド)から出土している。



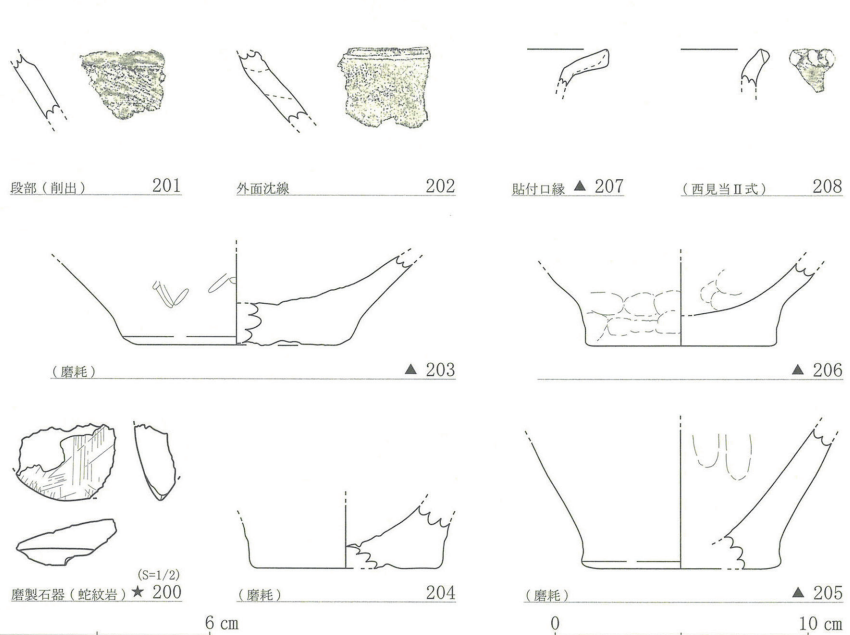
第 34 図 Ⅰ区包含層(中央北側)出土遺物実測図 1(S=1/2・1/3)



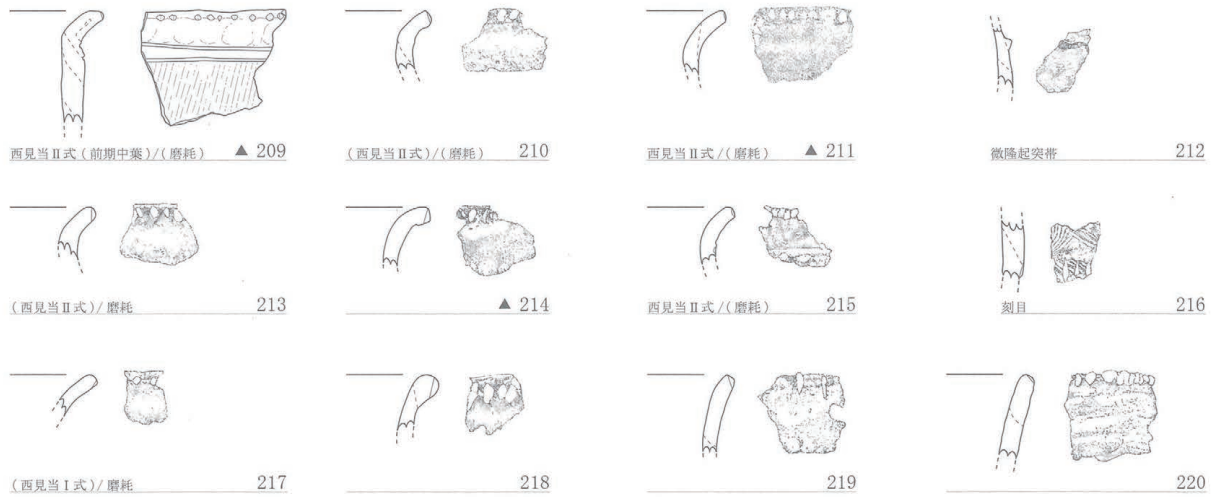
石器



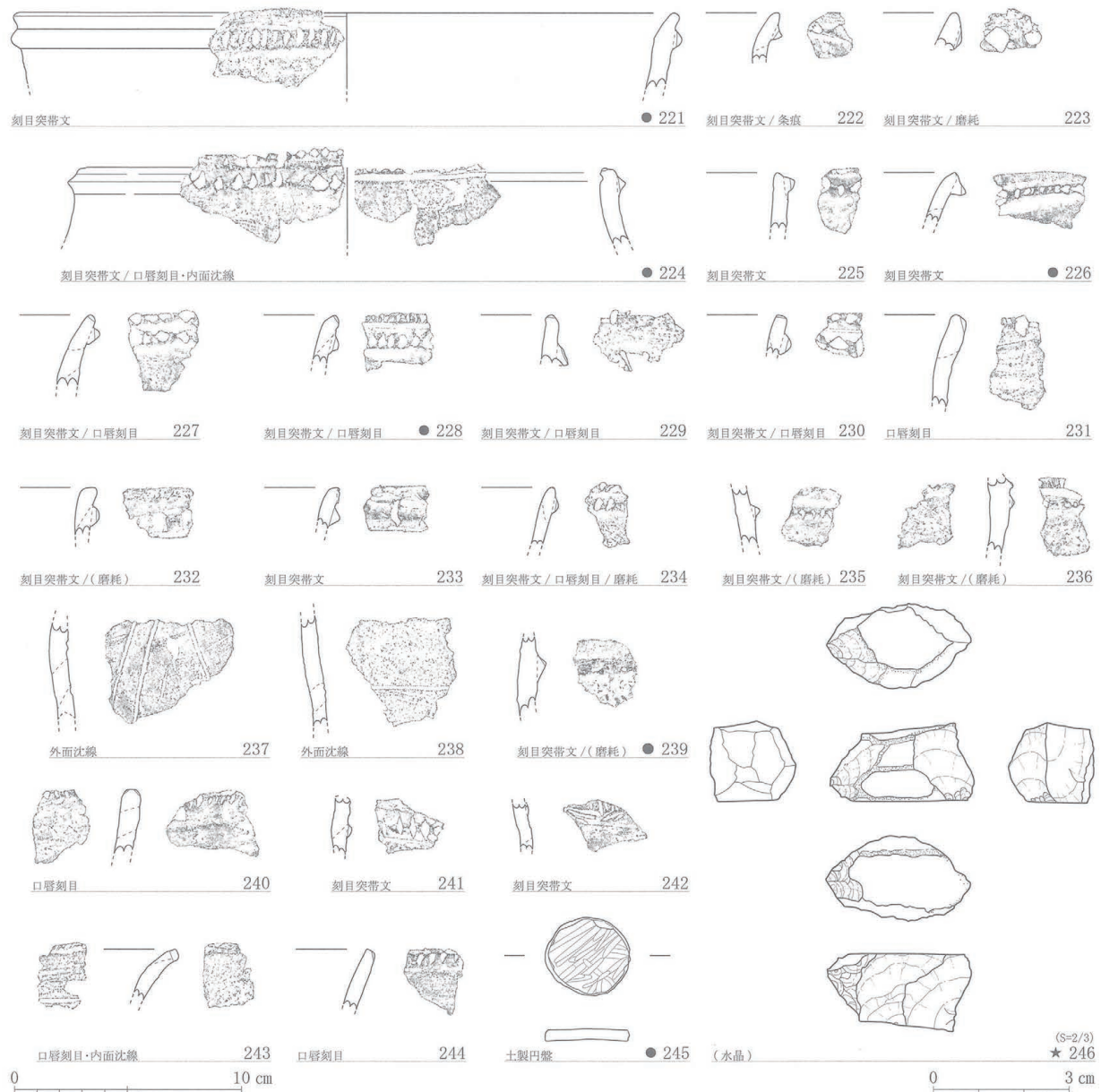
弥生土器 (壺: 201 ~ 203 甕: 204 ~ 220)



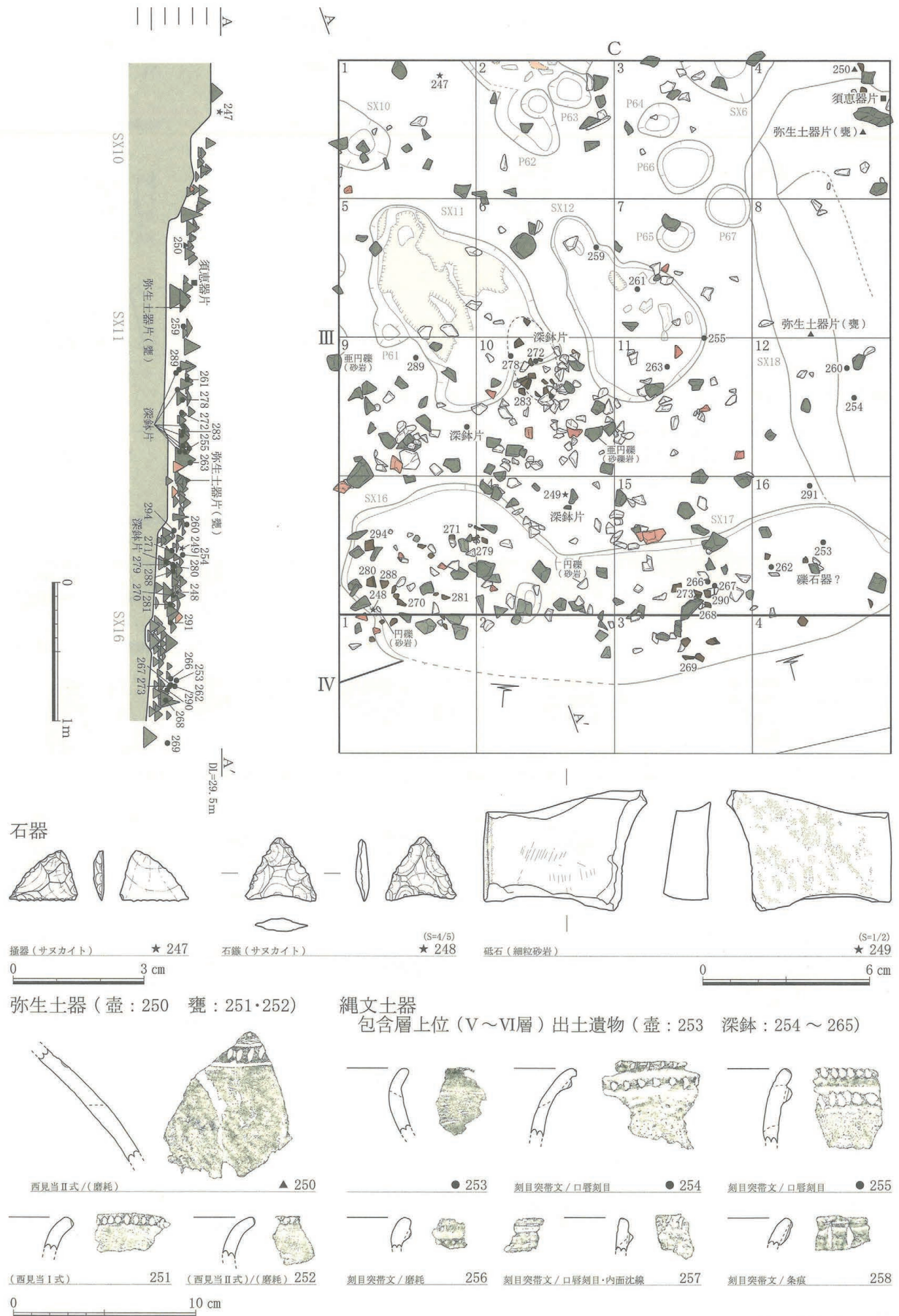
第 35 図 I 区包含層 (中央北側) 遺物出土状況図 (S=1/40) 出土遺物実測図 2 (S=1/2・1/3・4/5)



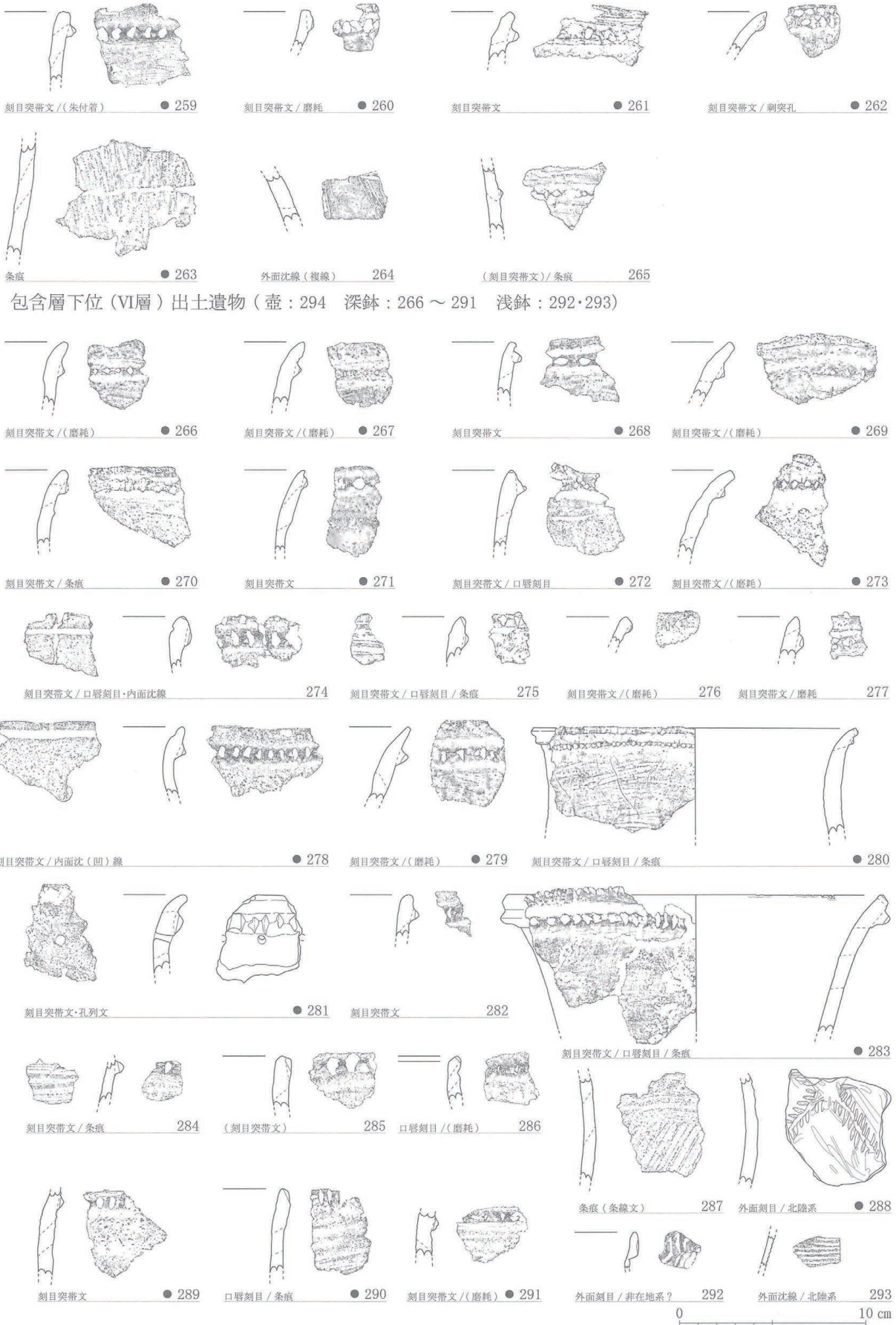
縄文土器（深鉢：221～242 浅鉢：243・244 土製品：245）



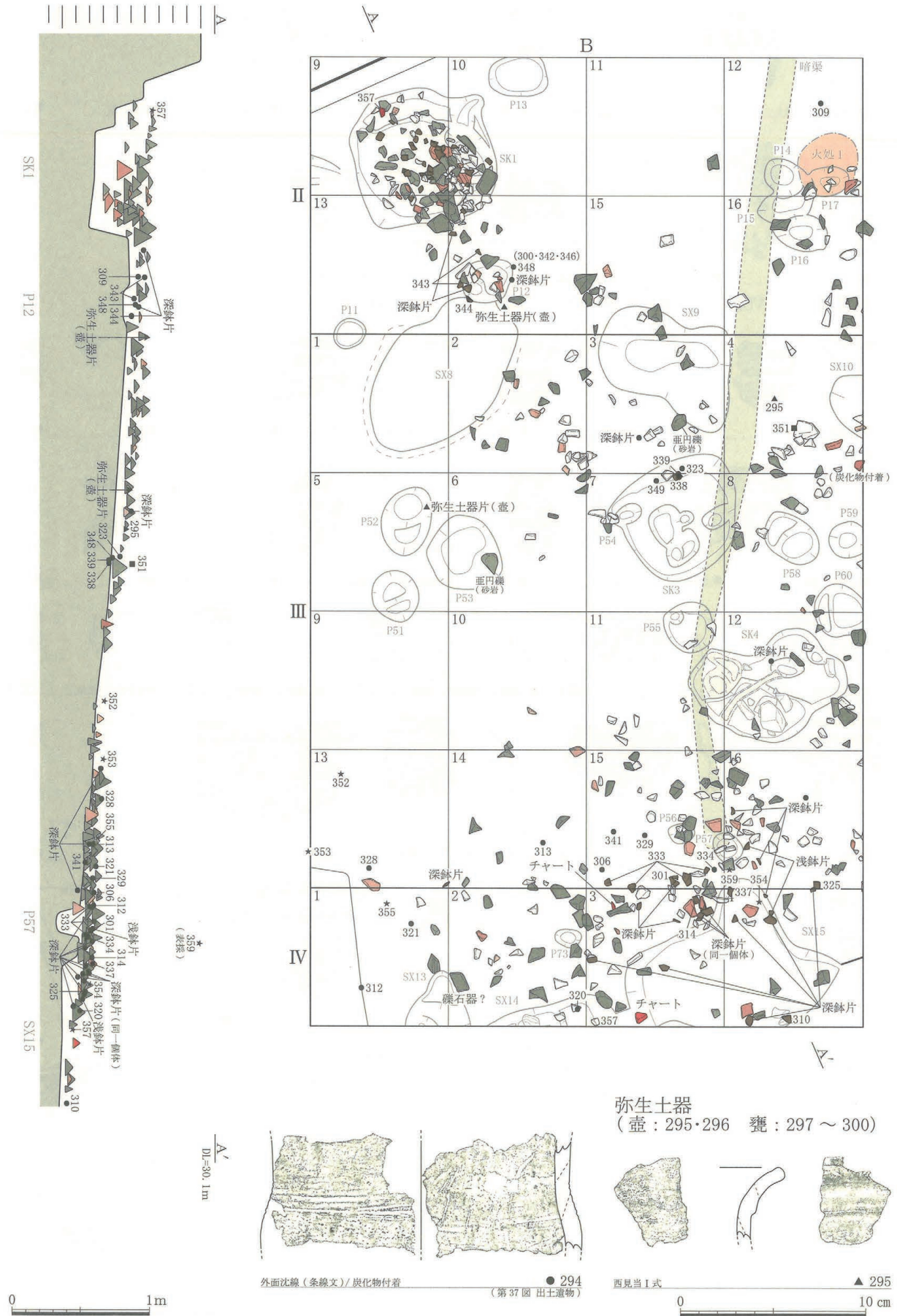
第36図 I区包含層（中央北側）出土遺物実測図3(S=1/3・2/3)



第37図 I区包含層(中央南側)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・4/5)



第 38 図 I 区包含層(中央南側)出土遺物実測図 2(S=1/3)



第39図 I区包含層(西側)遺物出土状況図(S=1/40) 出土遺物実測図1(S=1/3)

調査区西側の包含層遺物出土状況 (第 39 ~ 41 図)

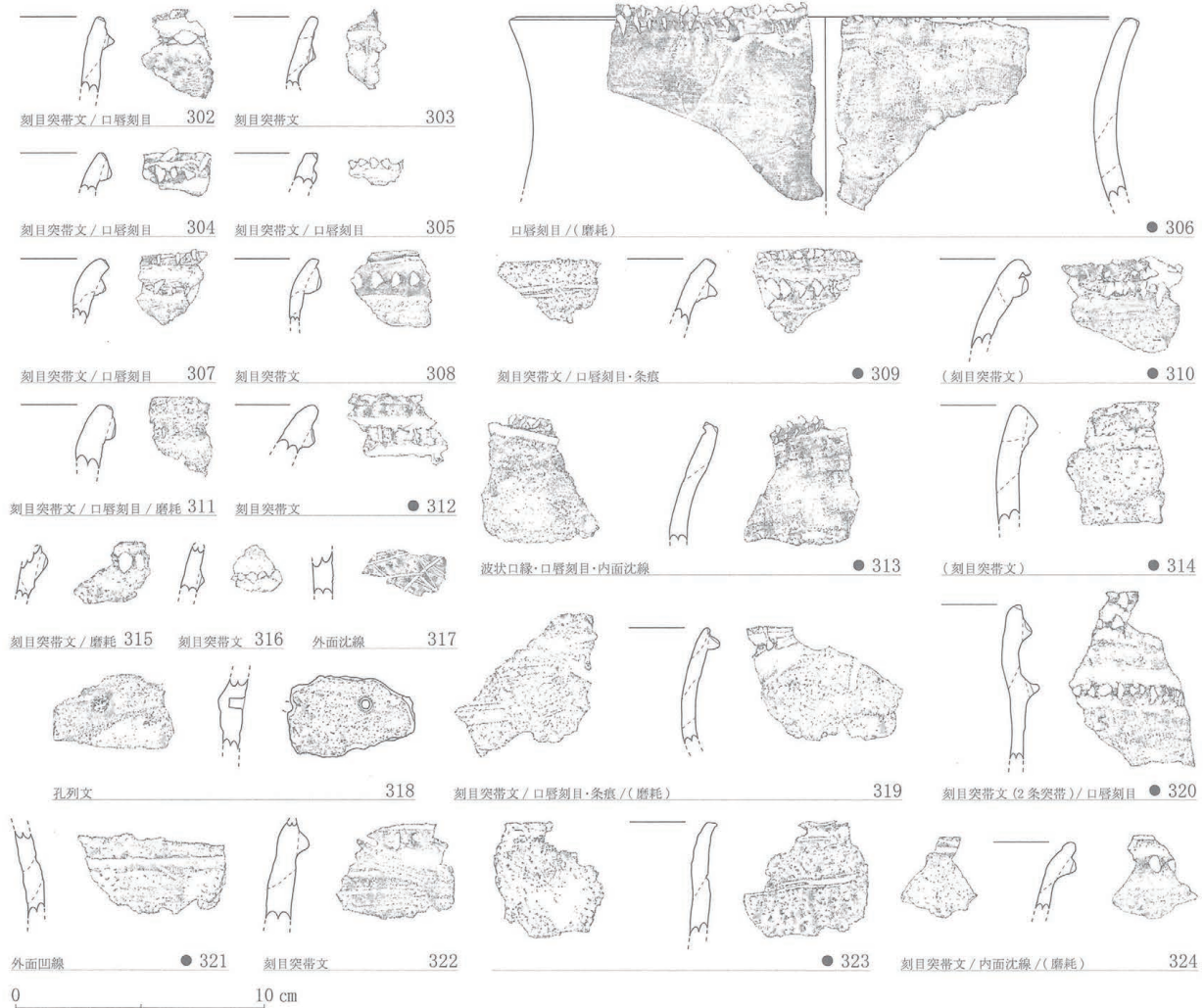
本項は I 区西側に該当する包含層から出土した遺物を中心に報告している。調査区北端及び西端を除いて礫の検出を認めるが産状には粗密がみられる。緩傾斜面端部(調査区南側)において累重が顕著であり、混在する考古残滓(遺物)は礫群の検出状況に比例する。礫群に配石構成等の人為性を見出すには至っていないが、BII-14 グリッドで検出した考古堆積物はSK 1 上面を被覆する集石(配石)と同一形状を呈していた可能性が考えられる。本区画からは二条突帯を有する土器片(320)や、当遺跡比にして比較的良好的な浅鉢片資料(333・他)を出土するなど、遺物組成に特徴がみられる。また断片的ながら弥生前期土器(遠賀川式)の壺(295)等を出土しており、当該期遺物が広汎に散布している状況が看取できる。

尚、本区画上面の石列は近世以降の暗渠と考えられ、赤色顔料が付着した礫石器(356)が混入していた。

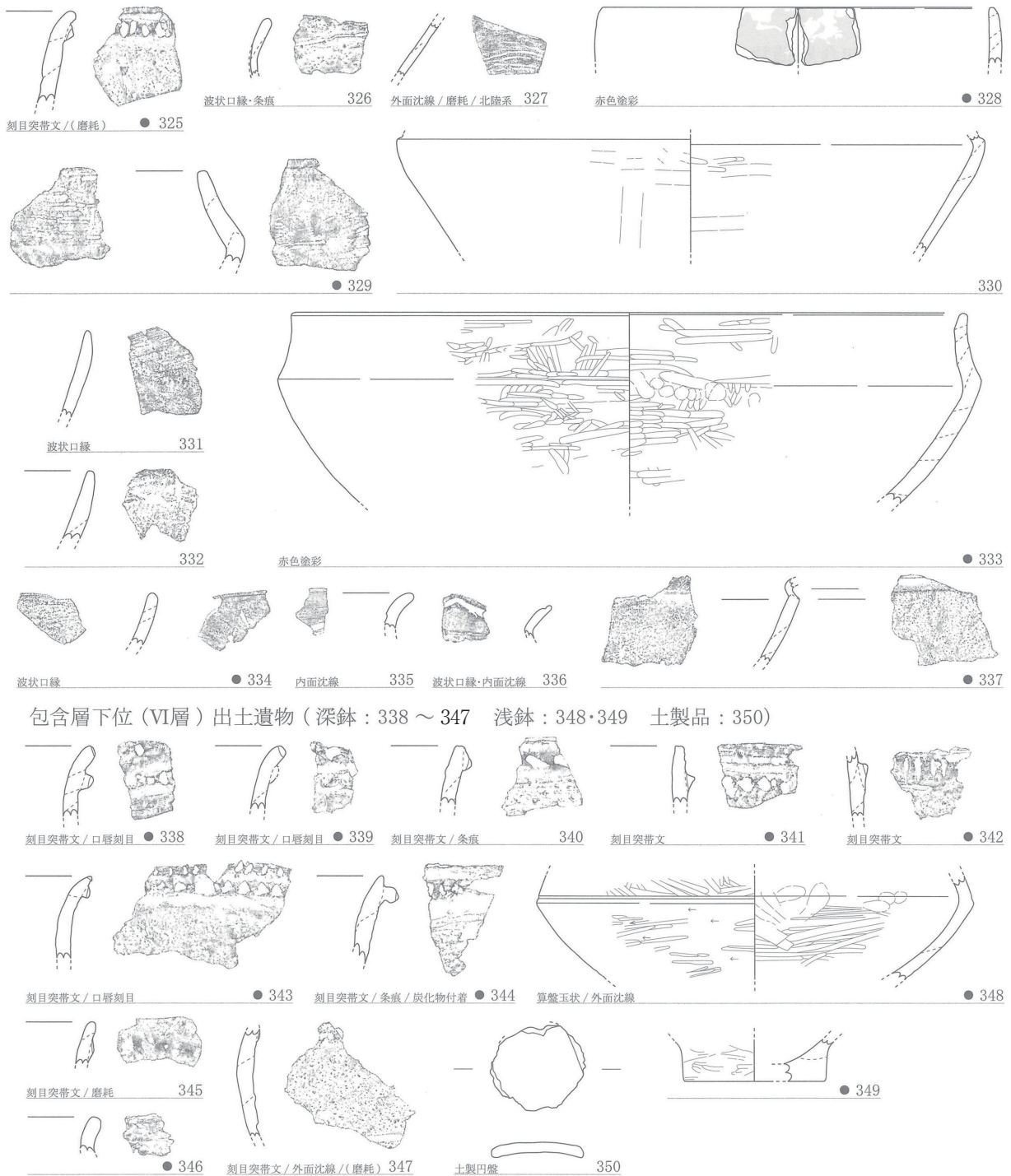


縄文土器

包含層上位 (V~VI層) 出土遺物 (深鉢: 301 ~ 325 浅鉢: 326 ~ 337)



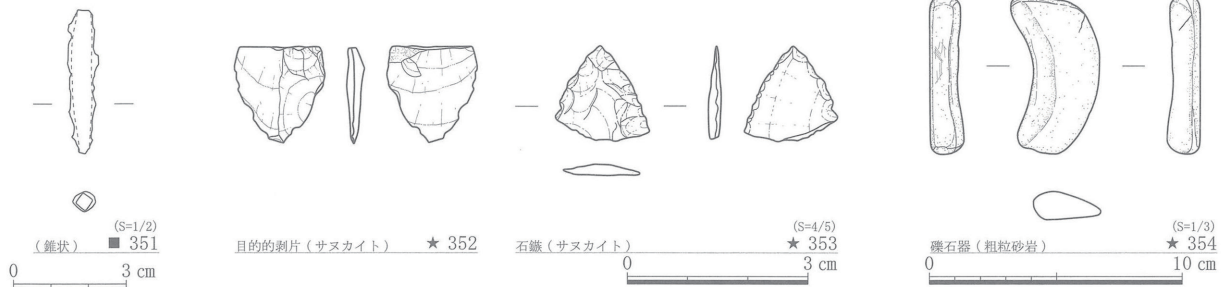
第 40 図 I 区包含層(西側) 出土遺物実測図 2(S=1/3)



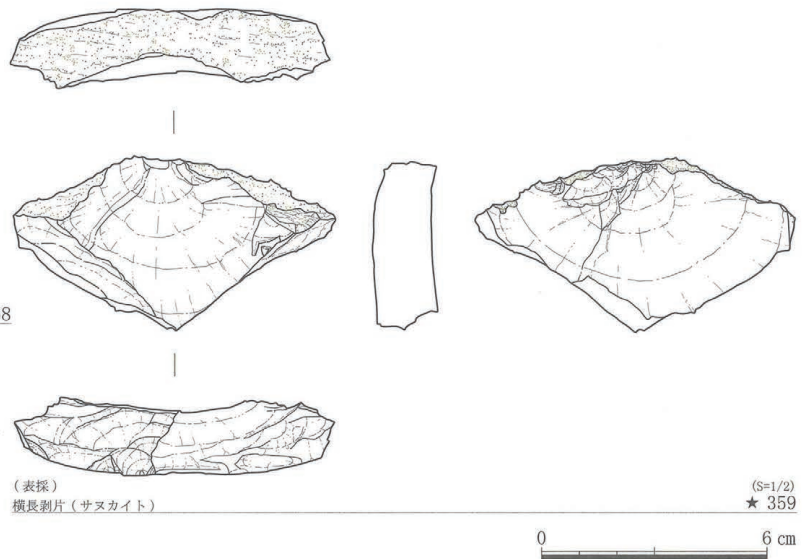
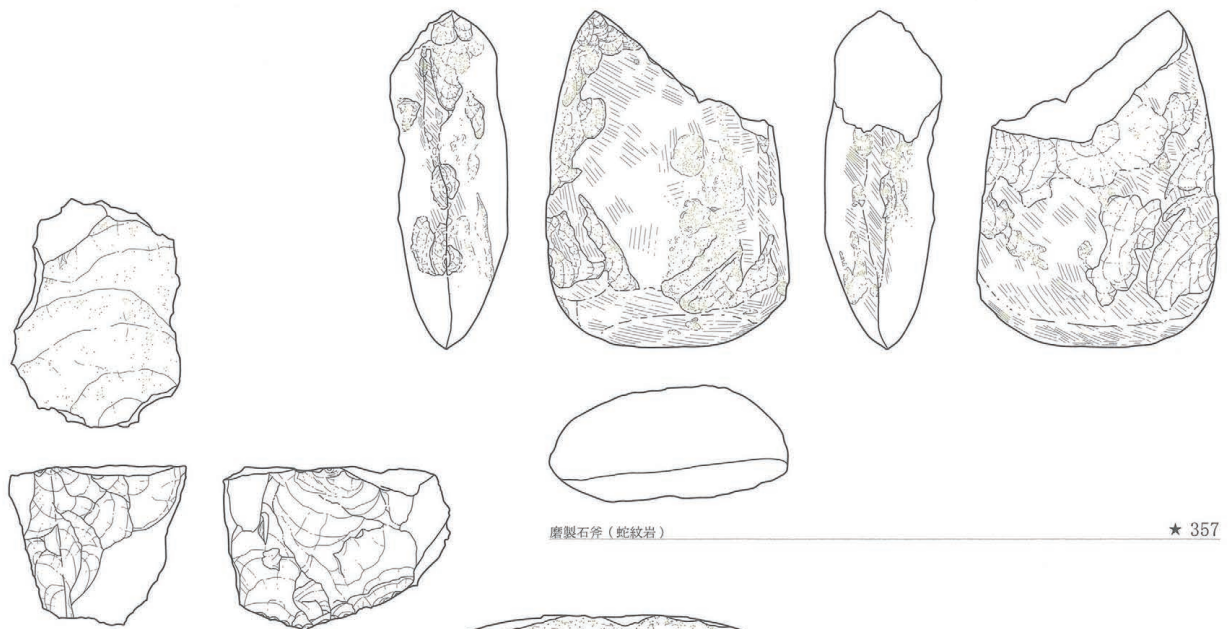
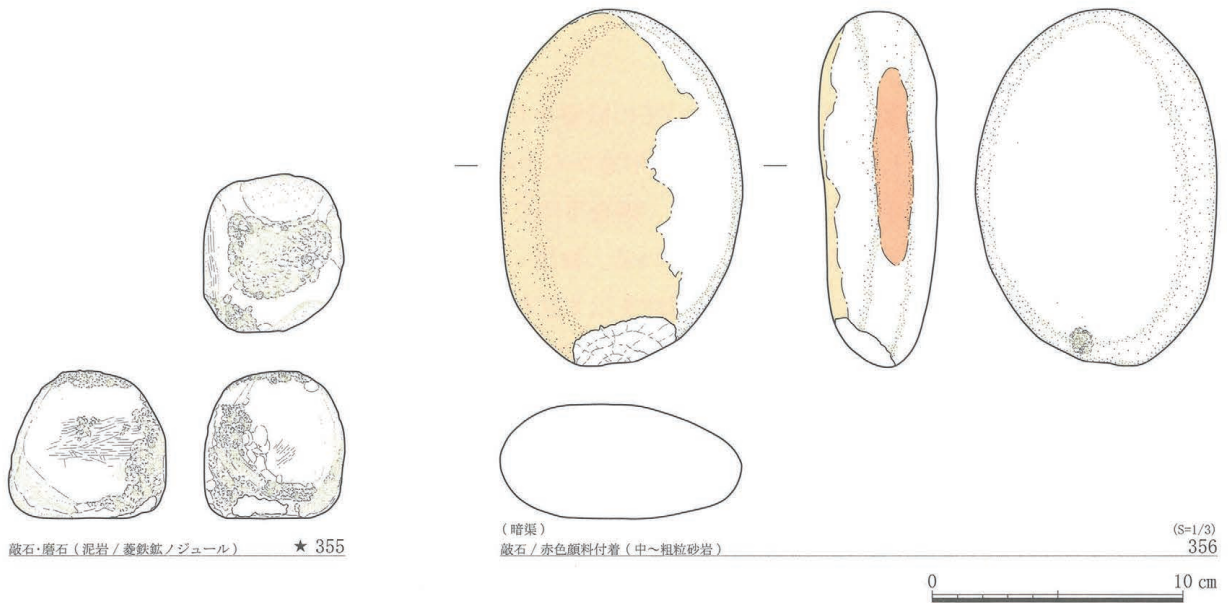
0 10 cm

鉄器

石器



第41図 I区包含層(西側)出土遺物実測図3(S=1/2・1/3・4/5)



第42図 I区包含層（西側）出土遺物実測図4(S=1/2・1/3)

4. 小括

I区における遺構及び遺物の出土状況についての概要として、本調査区端部(縁辺部)から配石を伴うと考えられる土坑群を検出しているが、これらは形態から土墳墓の可能性が考慮される。中・四国地方の縄文集落の墓制については不明な部分が多いが、調査事例では楕円形状乃至不整形を呈した遺構が多くみられ、長径1.0～1.6 m前後を測るとされている。検出した土坑群に打割や被熱など人為的所産の可能性が考えられる礫を伴出しているが、埋葬属性を示す証左は未検出であるなど墓制資料に耐え得る事例としては脆弱である。埋土中に縄文晩期(刻目突帯文期)を示す遺物が含まれていることから、当該期が主要な帰属時期と考えられるが、形式に基づく相互の供伴関係を把握できる資料は乏しい。

遺物の多くは包含層からの出土であるが、先行して着手したII区の状況から複数時期の遺物が累積土壌(単層群：V～VI層)中に重層し^(※)、層理による占拠面の分離は層相変化等も含めて困難が予察された。堆積斜面に対してサブトレンチ等で状況を把握し、層厚比に応じた任意による分層発掘を試みたが、VII層(黒ボク土)上面での遺構検出が主体となり、低床な落ち込み状形態を呈する性格不明遺構等については遺構残片(疑似遺構)の可能性も視野に検討が残る。出土層位不明遺物を除く主な包含層上位(V層中心)出土遺物は、縄文土器片約550点、弥生土器片約40点、土師質土器片約70点に対し、下位(VI層中心)では縄文土器片約1,420点、弥生土器片約140点、土師質土器片約20点を数え、遺構出土遺物を含めて弥生土器片の混在状況が看取できた。一般に離水後の段丘面は越水氾濫等により埋積することは稀であり、景観(環境)が安定していれば遺跡は地表面に残存する可能性が考えられる。火処4上面で出土した石鏃(サヌカイト)は風化しており、長期間露出していた可能性を示唆している。営為は土壌層序単元の古土壌面で行われ、崩積土などで堆積が再開し、土壌が被覆するまで占拠に由来する考古資料群はその上面に埋存するとされており、本調査区では考古残滓として礫群を検出している。多くは砂岩(碎屑堆積岩)で後背地の基盤岩に由来していると考えられるが、円磨度(角礫～超円礫)や粒径、形状等は多様であり、礫面(自然面)の衝撃痕の有無によって母材の運搬営力が区別できる。当遺跡で検出した礫群は人為的産状を呈している可能性が指摘されており⁽⁸⁾、伴出遺物に関しては水平・垂直分布から集中分布域を抽出できるが、遺跡の埋没過程により異なる時期の遺物群や年代測定試料が擾乱等による変位も含めて混在する可能性が考えられ、文化の変遷(縄文晩期後半～弥生前期前半)と層序累重に成因的關係は見出せない。遺物の編年的位置付けや構造論的共存関係などの考察(観察)については次章で総括し、本項を閉じたい。

また本調査区からは僅少なながら土師質土器片を出土しているが、時期的に不連続な遺物組成であり、層位による相対的な出土状況をみても包含層上位からの出土が比較的多く、検出遺構の帰属時期とも遊離している。何れも摩耗が著しく、如何なる運搬営力によって何処から当遺跡に沈着した遺物であるのかが、今後の重要な検討課題の一つであると考えられる。

【註】

- (1)「庭ヶ淵遺跡の火山灰分析」火山灰考古学研究所 2011年
- (2)(5)松村信博氏の見解による。
- (3)(4)藤方正治氏の見解による。(6)米田克彦氏の御教示による。
- (7)出原恵三氏、松本安紀彦氏、久田正弘氏の御教示による。
- (8)前田光雄氏、辻 康男氏の御教示による。

【参考文献】

松井 章 『環境考古学マニュアル』 同成社 2003年 他



縄文晩期土器(刻目突帯文)・弥生前期土器(甕: 胴部)
※II区 VI層

写真図版





香我美町 遠景 (S. 61 空撮)



香我美町旧山南 遠景 (S. 61 空撮)



調査対象地 遠景 (S. 61 空撮)



調査前風景 (平成 23 年 5 月 13 日 撮影)



調査区 遠景



完掘状態



完掘状態



完掘状態

図版 5

(第 7 図)



I 区 東壁（南側）土層断面

(第 14 図)



I 区 東壁（北側）土層断面

(第 29 図)



土層断面

(第 29 図)



土層断面

SK1 (第 9・10 図)



集石検出状態



集石検出状態



土層断面



1層埋土検出状態



礫検出状態



完掘状態

図版 7
SK2(第11図)



検出状態



土層断面

SK3(第11図)



土層断面



完掘状態



遺物出土状態



完掘状態

SK4(第12図)



礫検出状態



完掘状態

SX4(第14図)



土層断面



完掘状態

SX5・6(第15図)



土層断面



水晶片 (SX6 上面 : 246)



礫・焼土塊検出状態



焼土痕断面

SX7(第16・17図)

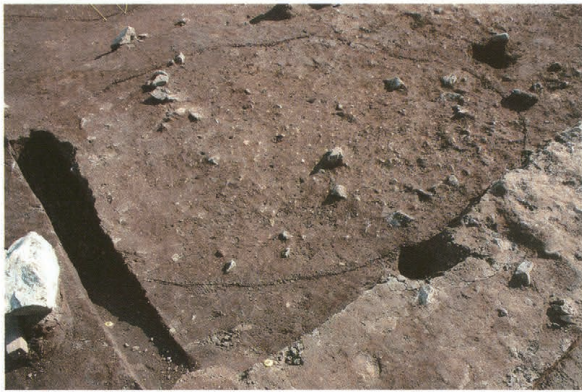


遺物出土状態 (検出面 : 46)



遺物出土状態 (検出面 : 43・48)

図版 9



検出状態



土層断面



遺物出土状態



完掘状態

SX8 (第18図)



検出状態



遺物出土状態



土層断面



完掘状態

SX9(第18図)



土層断面



完掘状態

SX11(第20図)



土層断面



完掘状態

SX12(第20図)



土層断面



完掘状態

SX13(第21図)



土層断面



遺物出土状態(完掘状態)

図版 11

SX14(第21図)



土層断面



完掘状態

SX15(第21図)



土層断面



完掘状態

SX16(第22図)



礫検出状態

SX17(第22図)



礫検出状態

SX18(第23図)



検出状態



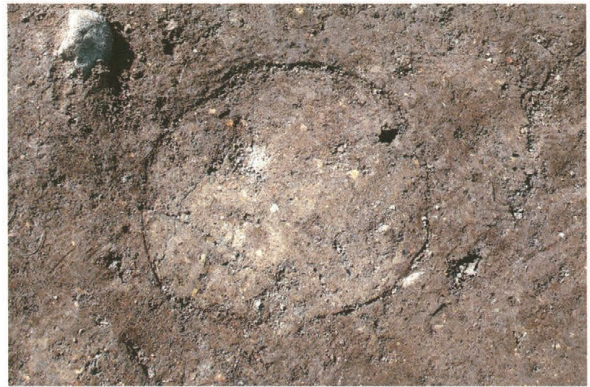
土層断面

P70・71(第28図)



検出状態

P8(第24図)



柱痕検出状態



根石状礫検出状態



完掘状態

P29(第26図)



礫検出状態



完掘状態

P30(第26図)



礫検出状態



完掘状態

図版 13
包含層出土遺物



弥生前期土器（西見当 I 式：109）



縄文晩期土器（刻目突帯文：165）



縄文晩期土器（赤色塗彩：328）



遺物出土状態（B III-15・B IV-3 グリッド）



礫石器（頁岩：135）



磨製石器（蛇紋岩：138）



石鏃（サヌカイト：140）



石鏃（サヌカイト：248）

礫群 (I区南側)



検出状態



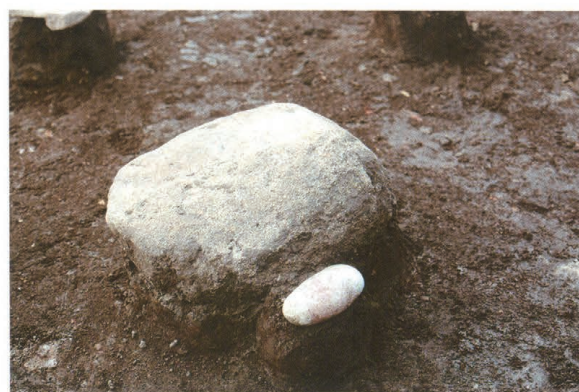
検出状態



検出状態



礫石器 (緑色岩 : 137)



礫石器 (赤色顔料付着 : 139)

図版 15
礫群 (I 区南端)



検出状態



検出状態

火処 1



検出状態

火処 2・3



検出状態

火処 4 (第 14・29 図)



検出状態



遺物出土状態



土層断面

暗渠 (第一次産業遺産)



検出状態

— 調査日誌抄 —



図版 16

5月9日(月) 調査対象地視察



調査前風景

7月6日(水) 草刈り / 調査区設定



調査前風景

7月8日(金) 調査初日 重機・コンテナ等搬入 / I区 トレンチ開削 II区 表土剥除 / 包含層掘削 / 他



作業風景



作業風景

7月11日(月) 2日目 II区 サブトレンチ開削 / 包含層掘削 / 他



縄文晩期土器(刻目突帯文)



作業風景

7月15日(金) 3日目 II区 集石検出 / 包含層掘削 / 他



磨製石器(蛇紋岩)



作業風景

7月21日(木)4日目 II区 集石検出/他



作業風景

7月26日(火)5日目 II区 包含層掘削/他



作業風景

7月28日(木)6日目 II区 集石検出/包含層掘削/他



夏草や 兵どもが…



休憩中

7月29日(金)7日目 II区 集石検出/氏家氏(徳島県埋文センター)・下村氏(高知県埋文センター)ら視察/他



弥生前期土器(甕:底部)



作業風景

8月1日(月)8日目 II区 集石検出/他



敲石(砂岩)



集石検出状態

図版 18

8月2日(火) 9日目 II区 住居状遺構精査 / 遺構検出 / 他



作業風景



作業風景

8月3日(水) 10日目 II区 住居状遺構精査 / 遺構検出 / 香南市中学校教員研修(視察) / 他



弥生前期土器(甕:底部)



作業風景

8月4日(木) 11日目 II区 集石検出 / 他



集石検出状態

8月5日(金) 12日目 II区 住居状遺構精査 / 他



住居状遺構(礫石器)

8月8日(月) 13日目 II区 住居状遺構精査 / 調査区西端 下層確認トレンチ開削 / 他



下層確認トレンチ



作業風景

8月9日(火) 14日目 I区 表土剥除(重機) II区 住居状遺構精査/出原氏・前田氏(県埋文センター)ら視察/他



作業風景



作業風景

8月10日(水) 15日目 I区 包含層(V) 掘削/宮里氏(県埋文センター)・米田氏(県文化財課)ら視察/他



弥生前期土器(西見当I式)



米田氏

8月11日(木) 16日目 I区 包含層(V) 掘削/集石検出 II区 下層調査/他



弥生前期土器(西見当II式)



下層調査

8月12日(金) 17日目 I区 包含層(V) 掘削/地元小学生見学/久家氏・筒井氏(県埋文センター)ら視察/他



小学生見学



作業風景

8月17日(水) 18日目 I区 包含層(V) 掘削/大学生見学/他



大学生見学



作業風景

8月18日(木) 19日目 I区 包含層(VI) 掘削(礫群検出)/暗渠検出/他



暗渠検出状態



作業風景

8月19日(金) 20日目 I区 包含層(VI) 掘削(礫群検出)/前田氏(同)視察/他



作業風景



作業風景

8月22日(月) 21日目 I区 礫群検出/包含層(サブトレンチ)掘削/他 (字「鶴ヶ岡」試掘)



礫群検出状態



作業風景

8月23日(火) 22日目 I区 包含層(VI) 掘削 / 遺構精査 / 他 (字「鶴ヶ岡」試掘)



サマカイト片(表採)



作業風景

8月24日(水) 23日目 I区 包含層(VI) 掘削 II区 住居状遺構精査 / 他 (字「鶴ヶ岡」試掘)



作業風景



作業風景

8月26日(金) 24日目 記者発表 / 現地説明会準備 / 他



(永野宏幸氏提供)

記者発表

8月28日(日) 現地説明会



現地説明会



(永野宏幸氏提供)

現地説明会



現地説明会

図版 22

8月29日(月)25日目 I区 調査区拡張/包含層(V~VI)掘削/他 対象地内包蔵地範囲確認試掘調査



試掘調査



作業風景

8月30日(火)26日目 I区 包含層(VI)掘削/専門学校生見学 II区 石垣撤去(重機)/他



作業風景



発掘体験

8月31日(水)27日目 I区 遺構検出・精査/SK1 集石検出 II区 南端包含層掘削/他



SK1 集石検出状態



作業風景

9月1日(木)28日目 I区 遺構検出・精査 II区 住居状遺構精査/他



作業風景



終業風景

9月5日(月) 29日目 I区 遺構検出・精査 / 包含層(VI) 掘削 II区 住居状遺構精査 / 他



作業風景



作業風景

9月6日(火) 30日目 I区 遺構検出 II区 住居状遺構精査 / 仙頭氏(前市長)・菊池氏(県埋文センター) 視察 / 他



菊池氏



仙頭氏

9月7日(水) 31日目 I区 遺構検出・精査 II区 住居状遺構精査 / 宮里氏(同)・昭和女子大学生見学 / 他



作業風景



(永野宏幸氏提供)

女子大学生見学

9月8日(木) 32日目 I区 遺構検出・精査 II区 住居状遺構精査 / 坂本氏・油利氏(南国市教育委員会)ら視察 / 他



作業…風景



南国市教委視察

図版 24

9月9日(金) 33日目 I区 遺構検出・精査 II区 住居状遺構精査 / 他



作業風景



作業風景

9月12日(月) 34日目 I区 遺構検出・精査 / 他



作業風景

9月13日(火) 35日目 I区 遺構検出・精査 / 他



作業風景

9月14日(水) 36日目 I区 調査区拡張 / 遺構検出・精査



作業風景

II区 住居状遺構精査 / 他



作業風景

9月15日(木) 37日目 I区 遺構検出・精査 II区 住居状遺構精査 / 出原氏(同)視察 / 他



作業風景



作業風景

9月21日(水) 38日目 I区 遺構検出・精査/他



台風一過

9月22日(木) 39日目 I区 包含層(VI)掘削/他



作業風景

9月27日(火) 40日目 I区 包含層(VI)掘削/香南ケーブルテレビ取材 II区 住居状遺構精査/他



取材風景



礫群検出状態

9月28日(水) 41日目 I区 遺構検出・精査/地元小学生見学 II区 住居状遺構精査/米田氏(同)視察/他



小学生見学



作業風景

9月29日(木) 42日目 I区 遺構検出・精査/他



作業風景

9月30日(金) 43日目 II区 住居状遺構精査/他



作業風景

図版 26

10月3日(月) 44日目 II区 住居状遺構精査 / 他



作業風景

10月4日(火) 45日目 調査区清掃・完掘写真 / 他



作業風景

10月6日(木) 46日目 コンテナ・仮設トイレ撤去 / 調査区完掘写真 / 下層確認 / 本調査終了



完掘状態



下層(黒ボク土)確認

10月10日(月) 土層断面剥ぎ取り(高知大学)



作業風景



作業風景

10月12日(水) 埋め戻し完了 / 打ち上げ



調査後風景



現況風景(平成24年10月22日撮影)

Excavation staff



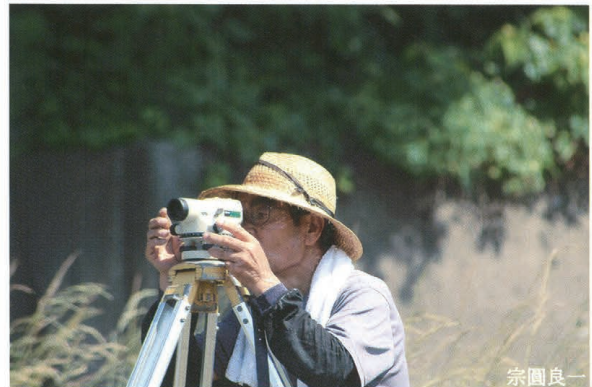
小松 誠
特命係長



藤方正治



溝淵進一郎



宗圓良一



永野宏幸



山中 忍



窪田泰詔



十方博安

齊藤美幸



澤田佐世



宮本幸子



清遠勝秀



宮地啓介



松村信博

お疲れさまでした

報 告 書 抄 録

ふりがな	にわがふちいせき							
書名	庭ヶ渕遺跡							
副書名	市道堀ノ内南北線整備工事に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	宮地啓介							
編集機関	高知県香南市文化財センター							
所在地	〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1 TEL 0887-54-2296							
発行年月日	2012/12/12							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にわがふちいせき 庭ヶ渕遺跡	こうちけんこうなんし 高知県香南市 かがみちようかみぶん 香我美町上分	39211	180060	33° 33′ 57″	133° 45′ 45″	平成23年 7月8日 ┆ 10月6日	約300㎡	市道整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
庭ヶ渕遺跡	集落跡	縄文晩期 弥生前期 古代 中世	土坑状遺構 性格不明遺構 ピット状遺構 (住居状遺構) (溝状遺構)	縄文土器 弥生土器 須恵器 土師質土器 (瓦質土器) 石器 鉄器		礫群		

高知県香南市発掘調査報告書第8集

庭ヶ渕遺跡

市道堀ノ内南北線整備工事に伴う発掘調査報告書

2012年12月

発行 高知県香南市教育委員会

香南市文化財センター

〒781-5453 高知県香南市香我美町山北1553-1

TEL 0887-54-2296

印刷 香南市野市町西野45

半田印刷